

ハイスクールD×D ～神魔兄弟の奮闘～

さすらいの旅人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イツセーとアーシアがリアスの正式な眷族悪魔となって数日が経った。テロリストと戦いながらも、平和な日常を過ごしている中、再び人間界で大きな事件が起きる。▼「ハイスクールDXD」神（兄）と悪魔（弟）の続編です。

目次

放課後のラグナロク

プロローグ	1
第一話	8
第二話	13
第三話	20
第四話	26
第五話	33
幕間	43
第六話	46
第七話	51
第八話	62
第九話	69
第十話	80
第十一話	85
第十二話	92
第十三話	102
第十四話	111
第十五話	122
幕間	134
第十六話	139
第十七話	144
第十八話	150

放課後のラグナロク プロローグ

『ふははははー！ ついに貴様の最後だ！ 拳龍帝よー！』
けんりゅうてい

見ただけで怪人と思われる輩が勝利宣言するように高笑いをして
いた。

『どうかなー！ 勝負つてのは最後までやってみねえと分からねえぞ！

行くぜ！ 禁手化！』
バランス・ブレイク

イツセーそつくりの特撮ヒーローが画面で変身を遂げた。元来の
茶髪からリアスと似た深紅色へとなって逆立ち、同時に全身から真紅
のオーラを放出させている。

その姿はイツセーの禁手そのものだ。
バランス・ブレイカー

俺——兵藤隆誠と（イツセーとアーシアを含めた）グレモリー眷族、
イリナ、アザゼルは兵藤家の地下一階にある大広間で鑑賞会をしてい
た。

巨大モニターに映る鑑賞作品は、俺も監修した『拳龍帝ファイター
ドラゴン』という特撮作品。現在、冥界で絶賛放映中の子供向けヒー
ロー番組だ。

もう言わなくても分かるが、この作品は俺の弟——イツセーが主役
だ。

尤も、アレはイツセー本人が演じていない。イツセーと背格好が同
じ役者にCGでアイツの顔を合成加工している。何れは本当にやつ
てもらおう予定で、修行の合間を縫って俺が時々演技指導中だ。と言っ
ても、俺の場合は戦闘をメインとした指導だけだ。

「……始まってすぐに冥界で大人気みたいです。特撮ヒーロー、『拳龍
帝ファイタードラゴン』」

イツセーの膝上に座っている子猫が尻尾をふりふりさせながら言
う。随分と詳しい事だ。

ここまで大人気なのは正直言って予想外だった。放送開始されて
早々に視聴率が五十%を超えるお化け番組になると聞いた時、俺

は思わず言葉を失って呆然としてしまう程に。子供に人気があるので、最初は十%程度の視聴率を出せるかもしれない、と言う予想を遥かに超えていたからな。

物語のあらすじはこんなところだ。

伝説のドラゴンと契約した若手悪魔の武道家イツセー・グレモリーは、悪魔に敵対する邪悪な組織と戦うヒーローである。

強さを求め、強くなる為に戦う男。自身に迫りくる悪人を倒す為、伝説のファイタードラゴンとなる！ ってなところだ。もうぶっちゃけ、ドラグ・ソボールの空孫悟と似たキャラだ。

今まで編集で見なかったが、番組として見るのは初めてだ。近くにいるイツセーは今も恥ずかしそうに見ている。

因みに著作権に関してはグレモリー家が仕切っている。番組を考案した俺も当然著作権を持っているが、殆どはグレモリー家に任せきりだ。冥界に関する番組は悪魔が仕切らないと色々と問題が起きかねないからな。俺としても、信用と信頼のあるグレモリー家だからこそ任せている。

グレモリー夫妻から聞いた話だと、『ファイタードラゴン』で相当稼ぎ始めたようだ。グッズも販売開始したのかも言ってた。何とも行動が早い事だ。

しかも玩具版のブーステッド・ギアの試作型なんて送られてきたんだよな。恐ろしい程に精巧で、音声まで再現されてから、俺やイツセーも思わず感心したぞ。

『いくぞ、邪悪な怪人！』

真紅の闘気を纏った『ファイタードラゴン』が一瞬姿を消すも、直後に怪人の目の前に現れて攻撃を仕掛ける。高速戦闘だけでなく、闘気弾による派手な爆破演出等も巻き起こっていた。

その後、主人公は敵の新兵器の力でピンチになるが、そこへヒロイン登場となる。

『ファイタードラゴン！ 来たわよ！ 私の力を使って！』

登場したのはドレスを着たリアス。彼女も当然本物じゃなく、リアスとよく似た背格好の役者にリアスの顔を加工している。

『来てくれたかつ、アリス姫！ これなら勝てる！』

『ファイタードラゴン』をサポートするアリス姫が飛ばした紅い魔力をその身に受けた。これも言うまでもないが、アリス姫はリアスの役名だ。リとアを入れ替えて『アリス姫』。俺が考えた安直なネーミングだが、流石にリアスじゃ不味いので、敢えて別名にさせたって訳だ。そして紅い魔力を受けた主人公の身体が紅く輝き、パワーを取り戻して戦いを仕掛けていた。

「味方側にはファイタードラゴンの相棒役としてアリス姫がいてな。ピンチになった時、アリス姫からの魔力を送る事で無敵のファイタードラゴンになるんだ」

俺の説明に反応したリアスがこっちを見る。

「……ねえリユースー。グレイファイアに聞いたわ。アリス姫の案をグレモリー家の取材チームに送ったのはあなたよね？ このアリス姫って、もしかして何れは『ファイタードラゴン』と……」

リアスは何かを期待している様子で訪ねてきた。

「悪いけど、そう言うネタバレ的な内容は答えられないよ。取り敢えず今は、リアスの人気が一段と高くなったって事で満足しといてくれ」

「……分かったわ」

俺からの返答にリアスは残念そうな表情をする。

リアスの質問内容は、『アリス姫』と『ファイタードラゴン』が結ばれて夫婦になる予定はあるのか、と言う質問だ。いくら俺が監修者だからって、そう言った展開は物語を見ながら楽しまないとダメだ。こう言ったヒーロー番組は特にな。

「……まあぶっちゃけ、リアスが望んだ展開にしようとは思っていない。俺としても、いくら『ファイタードラゴン』の設定が大して女に興味無い武道家だからって、『アリス姫』を戦いだけの相棒役だけで終わらせようと思っていない。恋愛シーンも時折出すつもりだ。流石に子供向けの番組だから、卑猥なシーンは一切無い健全なものだけだ。」

「ってか兄貴、やっぱり俺チョー恥ずかしいんだけど……」

「そう言うなって。初めて悪魔活動のデビュー早々大人気になるなんて、滅多に無いんだぞ」

知つての通り、イツセーは先日のレーティングゲーム襲撃後に人間から転生悪魔となり、漸く正式なりアスの眷族となっている。妹分のアーシアも同様に。

本来、眷族となったばかりの悪魔は雑用などの地道な活動からスタートするのが決まりとなっている。と言つても、眷族候補の時から既にやっていたが。しかし、眷族候補は悪魔としての経歴には一切入らないので、正式な悪魔となった事によつて一からスタート状態となっている。

だと言うのに、イツセーは最初の悪魔活動で早々に華々しいデビューした。冥界側からすれば、もう完全に順序をすつ飛ばしているも同然だ。

当然、イツセーのデビューを快く思わない新米の眷族悪魔達もいるだろう。だが、イツセーは現赤龍帝で並みの上級悪魔を簡単に倒せる実力者。気に食わないという理由で襲撃したところで、返り討ちにされるのがオチだ。

加えて聖書の神たしの弟でもあり、名門のグレモリー家や魔王サーゼクスもバツクにいる。そんな命知らずな真似が出来る新米がいたら、逆に驚いて感心する。ま、もし搦め手を使つての嫌がらせなんかしたら、相応の手を打たせてもらうが。

「こんな形でお前が有名になった事で、兄の俺としては鼻が高い」

「そうよね。幼なじみがこうやって有名になるって、リユースーくん
の言う通り鼻高々よね」

俺の台詞にイリナが賛同するようにキヤツキヤはしやぎながら言う。もう『ファイタードラゴン』を存分に楽しんでいるみたいだ。

イリナは天使だが、もうすつかりオカ研の面々にとけ込んでいる。俺も幼なじみとして接してくれるも、少しばかり聖書の神たしに対する申し訳無さが感じるけど。

「そういえば、イツセーくんって小さい頃、特撮ヒーロー大好きだったものね。私も付き合つてヒーローごっこしたわ」

と、イリナが変身ポーズをしながら言う。俺やイツセーが小さい頃に見ていたヒーローのものだ。

言われてみればイツセーは空孫悟だけじゃなく、特撮ヒーローにも憧れていたな。特に変身シーンはキラキラしながら見ていた。

「確かにやったなあ。あの頃のイリナは男の子っぽくて、やんちゃばかりしてた記憶があるな。それが今じゃ、俺好きな可愛い美少女さまなんだから、人間の成長って分かんらん」

俺好みの辺りを聞いたイリナは、途端に顔を真っ赤にする。

「もう！ イツセーくんったら、いきなりそんな風に口説くんだから！ も、もしかしてそう無自覚にリアスさん達を口説いていったの……？ だとしたら恐ろしい潜在能力だわ！ 堕ちちやう！ 私、堕天使に堕ちちやうううっ!!」

あつ、イリナの羽が白と黒で点滅してる。堕天するシーンは久しぶりに見たな。

天使は常に清純な存在でなければならぬ。なので欲に負けたり、悪魔の囁きを受けると堕天してしまう。とんだ厳しい誓約を付けてしまったと、聖書の神は今も少しばかり後悔している。

イリナの堕天を見たアザゼルが豪快に笑っている。

「ハハハハ、安心しろ。堕天歓迎だぜ。何しろミカエル直属の部下だ。VIP待遇で席を用意してやる」

「いやあああああつ！ 堕天使のボスが私を勧誘してくるうううっ！ 主よ、じゃなくてリユースーくん、助けてええええっ！」

「はいはい、分かったから」

イリナは涙目で俺に向かって天の祈りを捧げていた。

その堕天は何とかしてあげるから、取り敢えずその祈りは止めような。

因みに堕天の止め方は、白と黒に点滅してるイリナの羽に触れて、聖書の神のオーラをちよつと注げば元通りになる。これは聖書の神ならではの方法だが。

「リユースーお兄さまのおかげで、イツセーさんが有名になるなんて嬉しいです」

「そうだな。私たち眷族の良い宣伝にもなる。隆誠先輩には感謝しない」と

イツセーの隣にいるアーシアとゼノヴィアが楽しそうにしていた。アーシアから『リユースーお兄さま』……何度聞いても良い響きだ。初めてそう呼ばれた時の俺は感激の余り、涙を流しながら聖書の神の姿になった直後、そのままアーシアを抱き締めてしまった。とても嬉しかったとは言え、妹にセクハラ行動をってしまったのを後悔したよ。

アーシアはアーシアで、俺に抱きしめられた事で物凄くパニックになっただけだ。兄とは言え、聖書の神からの抱擁なんて全く予想してなかったと言ってたし。因みにイツセーやリアス達が苦笑している中、ゼノヴィアとイリナは物凄く羨ましそうに見ていたそうだ。以前の事を思い出していると、何やら朱乃がイツセーの肩に顔を載せて、艶っぽい声を耳元で囁いている。

「イリナちゃんを口説くのもいいですけど、そろそろ約束を果たしてもらえないと困りますわ。ですよ、リユースーくん？」

イツセーと頬ずりをしながら俺にも言ってくる朱乃。

約束？ 一体何の話だ？

俺が必死に思い出している最中、イツセーの隣でアーシアが不機嫌となっていた。リアスも目元をひくつかせている。更には子猫も無言でイツセーの太ももを掴っていた。全員、イツセーと俺を見ながら。

「約束？」

「ちよつと待て朱乃。俺はここ最近、お前と直接約束した覚えは無いんだが……」

イツセーと俺が聞き返すと、朱乃は満面の笑みで言う。

「デートの約束ですわ。ほら、ディオドラ・アスタロトとの戦いでイツセーくんが言ってくれたでしょう？ 遊園地のチケットをあげるから、二人で行くと良いってリユースーくんが」

……あ、ああ。やつと思いついた。

確か朱乃をパワーアップさせる方法として、イツセーにデートの誘

いをしろって言ったんだった。

もう色々な事があり過ぎたから、もう完全に忘れてたよ。と言うよ
り、思い出してる暇なんか全然無かったし。

それに、あの時の俺は阿呆のクルゼレイやシャルバ、アーシアの喪
失、そして暴走したイツセーの事で頭がいっぱいだったからな。

「あー、確かに言いました」

「と言うか朱乃、お前ちゃんと覚えていたんだな」

てつきり、朱乃も俺と同様に色々な事があり過ぎて忘れていると
思っていた。

「もちろん。……もしかして二人とも、あれはウソなの……?」

イツセーには目を潤ませて悲しそうな顔をした後、俺にはジトツ
とした目で睨んできた。何か俺とイツセーに対する差が違うな。

「ウ、ウソじゃないです！ だよな、兄貴!」

「あ、ああ、勿論だ。遊園地のチケツトもちゃんとある、ほら」

俺が慌てながら、収納用異空間から遊園地のチケツトを取り出して
朱乃に見せる。

チケツトを見た朱乃はウソじゃないと分かったのか、更にギュツと
イツセーを抱き締めて、心底嬉しそうな声音で言う。

「うれしい！ ありがとう、お義兄さま！ じゃあ、今度の休日、デー
トね。うふふ、イツセーくんと初デート♪」

お義兄さまって……いくら何でも気が早過ぎだろ。それに朱乃か
らそう呼ばれると何か複雑だよ。

それに加え、今の俺はとても不安だった。何故なら、俺とイツセー
と朱乃を睨む女性陣を見ただけで何かが起こりそうだと確信してい
るから。

第一話

翌日の放課後。

下校時間間近だが、俺達は気にしてないようにお茶を飲んでいいる。イツセーたち二年生がやる予定の修学旅行の話聞きながら。

顧問であるアザゼルは今日部室に来ていない。この所、冥界に帰って各勢力との談合を行っている。本来であれば元トップの聖書わの神も参加すべきと思われるが、三大勢力の助っ人と言う立場である為に極力参加はしない。と言うより、積極的に参加したら聖書わの神たがトツプを退いた意味が無いしな。

「そう言えば、二年生は修学旅行の時期だったわね」

リアスは優雅に紅茶を飲みながら言う。

「確か前に兄貴から聞いた話だと、部長と朱乃さんも京都に行ったんですよね?」

イツセーの質問に朱乃が答えようとする。

「そうですわ。部長と一緒に金閣寺、銀閣寺と各所を回ったものですよわ」

「そうね。けれど、意外に三泊四日でも行ける場所は限られてしまうわ」

リアスが頷きながら話を続けようとする。

イツセー達に計画的な行動をするように言っていると、朱乃が途端にリアスの失敗談を語ってくれた。最後に訪れる予定だった二条城に行く時間がなくなってしまい、駅のホームで悔しそうに地団太踏んでいたと。

「成程。だからあの時、リアスがおかしな行動をしていたって事か。これで漸く謎が解けたよ」

「リユースー、もしかして見てたの……!?!」

俺の呟きに反応したリアスが、頬を赤らめながらこちらを見る。

「ああ。二条城を見た後、駅のホームへ戻った時にリアスの姿を見かけてな。『上級悪魔のリアス・グレモリーに一体何が起きた?』ってな感じで」

言うまでもないが、当時の俺は悪魔のリアス達に素性を知られないよう、普通の一般人として振舞っていた。

あの時は安倍も含めた数人のクラスメイト達とグループで行動していて、偶然に地団太を踏むリアスを見た時は驚いたよ。一緒にいた安倍は俺と同じく疑問を抱いていたが、他のクラスメイト達は戸惑いつつも麗しのリアスを見てラッキーだとはしゃいでいた。

俺が去年の事を軽く説明すると、リアスは更に恥ずかしくなったのか、両手で赤くなっている顔を隠そうとする。

「まさか、リニューサーだけじゃなく清芽さんにまで見られていたなんて……!」

「あらあら、うふふ」

予想外に醜態を晒してしまったと後悔するリアスに、面白そうに見える朱乃。

因みにリアスが二条城へ行けなかった理由は、日本好きに加えて憧れの京都だった為、必要以上に町並みや土産屋に目が行って時間が掛かってしまったらしい。それだけ京都が楽しみだったと言うのがよく分かったよ。

すると、イツセーが何か気付いたように尋ねようとする。

「修学旅行で訪れるまで京都へ行かなかったんですか？ 移動は魔法陣ですればいいと思うんですが」

そう言うイツセーに、リアスは人差し指をノンノンと左右に振った。

「分かってないわね、イツセー。修学旅行で初めて京都に行くからいいのよ？ それに移動を魔法陣でするなんて、そんな野暮な事はしないわ」

「憧れの京都だからこそ、自分の足で回って、空気を肌で感じたかった。ってか？」

「その通りよ、リニューサー」

俺が繋げて言うと、リアスは正解だと頷く。

日本好きなのは知っているが、リアスって本当にこういう関連は夢中になるなあ。

確か以前、次期当主になつても人間界と冥界を行き来しながら生活したいって俺とイツセーに言つてたし。

それはそうと、今回の修学旅行にアザゼルも同行するとイツセーが言つてた。どうやらアイツも京都を堪能したいようだ。

用意されたお茶を飲み干した後、リアスは話題を変えようとする。「修学旅行もいいけれど、そろそろ学園祭の出し物についても話し合わないといけないわ」

そう。リアスの言う通り、今回オカ研の議題は学園祭の出し物だ。

駒王学園は、体育祭、修学旅行、学園祭は間が短くて連続で行う。行事関連は特に二年生が大変だ。

朱乃からプリントを受け取ったリアスは、すぐにテーブルの上に置いた。これはオカ研の出し物を書いて生徒会に提出する物となっている。

提出は本当ならもう少し先になるが、リアスはイツセーたち二年生の修学旅行を考慮して、早めに決めて提出する事になった。イツセー達が修学旅行に行つてる間、三年生と一年生で準備が出来るからな。

修学旅行だけでなく、学園祭をやる事にアーシアとゼノヴィア、そしてイリナも楽しみにしている。教会トリオは、こういったイベントが大好きだからな。はしゃぐ気持ちは分かる。

「確か去年は……お化け屋敷でしたっけ？ 俺と兄貴、その時は所属してませんでしたけど、本格的な作りで話題になってましたよ」

「そう言えば去年ウチのクラスメイトから聞いたが、随分リアルだったと言つてたぞ。まるで本物のお化けにしか見えなかったって」

俺とイツセーは当時、オカ研を警戒してお化け屋敷に入らなかつたから、話を聞いただけに過ぎない。

「そうね。本物のお化けを使っていたのだもの。それは怖かつたでしょうね」

さらりと言つてのけるリアスに、俺とイツセーは驚いた顔をする。

「ほ、本物だったんですか……？」

「おいおい、そんな事して大丈夫だったのか？」

俺たち兄弟からの問いに、リアスは平然と笑顔で答える。

「ええ。人間に害を与えない妖怪に依頼して、お化け屋敷で脅かす役をやってもらったわ。その妖怪たちも仕事がなくて困っていたから、お互い丁度良かったのよ」

「いやいや、俺が訊いたのはそっちじゃない。そんな反則的な事をやったら生徒会が絶対に黙っていないと思うんだが」

俺が細かく言うと、朱乃がリアスの代わりに応えようとする。

「リューサーさんの仰る通り、後で生徒会に怒られましたわ。当時副会長だったソーナ会長から、『本物使うなんてルール無視もいいところだわ!』って」

矢張りな。あの真面目なソーナが見逃す筈がない。

「ってか、本当にルール無視もいいところだぞ。」

「って事は、今年もお化け屋敷ですか？ だったら段ボールヴァンパイアのサーカスでもやりますか?」

「ははは。それは名案だ、イツセー。引き籠もりを更に改善させる案としては良いかもしれないな」

俺たち兄弟の発言にギヤスパーがぶつくり頬を膨らませて、すぐにイツセーの頭をポカポカと叩く。

「先輩たちのいじわるうううっ！ すぐに僕をネタにするんだからあつ！ 特にイツセー先輩はあ！」

ギヤスパーはイツセーが卒業するまでは弄られるだろう。まあその分、イツセーもイツセーで、貴重な男子の後輩の面倒を見る事になっている。

にしても、ギヤスパーは凄く進歩したよ。今までは俺が何とかしよう時間を掛けていたと言うのに、イツセーに任せただよ。今までは俺が何とかしよう時間を掛けていたと言うのに、イツセーに任せただよ。改めて考えると、イツセーは本当に凄いや。流石は俺の弟だ。

俺の考えを余所に、イツセーからの提案にリアスは悩んでいる様子だった。

「取り敢えず、新しい試みを——」

リアスがそこまで言ったところで、全員のケータイが同時に鳴った。

それが何を意味しているのかを知っているので、俺達は顔を見合わせる。
せていた。

「お前達、行くぞ」

俺がそう言うと、リアス達はコクンと頷いて行動を開始する。

第二話

ケータイから届いた報せには、『二つの廃工場に敵が潜んでいる』とあった。しかも、それらはかなり距離がある為、一つずつ対処するには時間を要してしまう。

なので今回は、二手に分断して対処する事にした。グレモリー眷族十イリナは一つ目を、俺は二つ目を対応すると。

俺の提案にリアス達は難色を示していた。いくら俺が強くても、一人だけでやるのは危険だと。

その中で特に反対していたのは元教会出身のゼノヴィアと、転生天使のイリナだ。イリナは天使長ミカエルの命により派遣されてるので、万が一に俺の身に何か起きたら大目玉を喰らうと大反対している。

彼女達が反対する気持ちは分かる。俺は嘗て天界のトップとして君臨していた聖書の神だ。人間に転生したとは言え、ミカエルたち天使勢が未だに聖書の神を敬い、各勢力からは警戒されている。そんな聖書の神が単独行動したら、危険だと反対するのは至極当然だ。

聖書の神を心配する気持ちは分かるけど、今は三大勢力の助っ人の立場だから他のトップ達は違う。俺は積極的に動ける立場なので、単独行動をしても何ら問題はない。尤も、もし自分の身に何か遭った場合は自己責任になるがな。

取り敢えずリアス達には一つ目の廃工場を任せるように言った俺は、すぐに転移を使って目的地から少し離れた場所へ到着するが——
「良いのか、イツセー？ お前はもう正式なリアスの眷族なのに、こんな勝手な事をして」

「確かにそうだが、俺は今でも兄貴の側近的な立場なんだろう？ だったら俺と一緒にいっても問題無い筈だ」

イツセーが超スピードで接近して俺の肩に触れた為、一緒に転移する事になってしまった。

「珍しいな。俺が分断の提案をした際、必ずリアスやアーシアたち美少女側と行動する筈だと言うのに。リアスに怒られるぞ？」

イツセーは俺の実力を理解と同時に大して心配はしてないから、リアス達の方へ行こうとする。しかし、今回はリアスの制止を振り切つて俺と行動するとは。

「部長には後で謝るよ。それに、俺が行けば部長やイリナ達も少しは安心するだろうしな。兄貴だつて、後々にアザゼル先生やミカエルさんから小言を言われるのは嫌だろ?」

「……………まあ、確かに」

言われてみればイツセーの言う通りかもしれない。アザゼルはまあ良いとしても、後から知ったミカエルが小言ついでに護衛を付けるべきだとか進言するのが目に見えてる。

「けど、一体どう言う風の吹き回しだ? いくら理由があるからって、お前がそんな殊勝な事を積極的に行うとは思えないんだが。その氣遣いは受け取っておくから、お前は早くリアス達の所へ——」

「無理すんなよ。ここ最近、参ってるんだろ?」

「……………」

俺がリアス達の所へ戻る様に言ってる最中、イツセーが突然真剣な顔をして言ってきた。

……………まさかイツセーの奴、俺の心情を察して無理矢理付いてきたのか?

「何を言ってる? 常に元気な俺が参る筈が——」

「今ここには弟おれしかいない。だから正直に言ってくれ。兄貴、ここ最近襲撃してる『禍カオス・ブリゲードの団』——英雄派の事を考えてるだろ? 特にセイクリッド・ギア

神器の所為で、不幸な人生を送る破目になった奴等の事を」

「——はあつ。お前には敵わんな」

またしても言ってる最中、今度は確信をついた事を言ってくるイツセー。反論出来ない程の大正解な為、俺は諦めるように嘆息する。

「いつから気付いていた?」

「襲撃者達がボロクソに罵倒しまくった兄貴の顔を見た後から」

「……………そうか」

つまり最初から気付いていたって事か。つたく。こういう事に関してには本当に鋭いな、俺の弟は。

イツセーの言う通り、俺はこのところ参り気味だった。と言うより、悩んでいると言った方が正しいだろう。

事の発端は、俺がリアス達と一緒に一回目の襲撃者達の対処をしている時だ。

襲撃者は『禍カオス・ブリザードの団』の英雄派で、構成員は全て人間だった。しかも全員が神セイクリッド・ギア器所有者。

俺がリアスと一緒に指揮を執りながら戦っていると、英雄派の連中が俺を見た途端、悪魔のリアス達以上の憎悪を込めて睨んできた。

『聖書の神！ 貴様の所為で俺は不幸のどん底を味わった！ 貴様が、貴様が神セイクリッド・ギア器なんか作らなければ、こんな事にならなかったんだ！』

『俺は貴様を絶対許さねえ！ 殺してやる！』

『返せよ！ 俺の人生を！ 何もかもテメエが悪いんだ！』

『この疫病神が！』

つてな事を罵倒されまくったよ。あの時は本当に内心グサツと突き刺さった。

アイツ等は言うなれば、聖書の神の被害者みたいな者達だ。

聖書の神は嘗て、人々を幸福にさせる愛と称し、『システム』で素質のある人間に神セイクリッド・ギア器を与える処置を施した。これが最善な方法だと。

自分のお陰で幸せな日々を送っているだろうと、最初は思っていた。だが、人間に転生した後、それは大きな間違いだった同時に後悔した。神セイクリッド・ギア器を得られた事で幸福になったどころか、逆に不幸な人生を送ってしまう破目になってしまったと。

数年前に弟と修行の旅をしていた際、一人の幼い神セイクリッド・ギア器所有者と出会った。その子は周囲の人間から迫害されていた。拳句の果てにはバケモノ扱いまでして殺そうとしていた程だ。俺とイツセーは速攻でその子を助け、迫害していた連中の記憶を消去させた。そして、その後にあの子が泣きながらこう言った。『どうして僕には、こんな物があるの？』って。

あの時ほど、聖書の神は自分がどれだけ思い上がり、愚かな事をし

てしまったのだと果てしなく後悔した。イツセーからも、セイクリッド・ギア 神器を
与えた聖書の神たしに対して罵倒した時も、結構グサツときたよ。

故に決めた。もしセイクリッド・ギア 神器の所為で不幸になった人間から罵倒され
ても、聖書の神たしは全て甘んじて受け入れると。彼等からしたら、そんな
事だけで許さないだろう。しかし、それが今の聖書の神たしにしか出来
ない事だ。

だと言うのに、今回の襲撃者達から罵倒されまくった時は、もう本
当に突き刺さる様に効いたよ。尤も、その連中は俺に対する罵倒に、
ブチ切れたゼノヴィアとイリナによつて徹底的に叩きのめされたが
な。

それ以降、立て続けに襲撃してくる英雄派の中に、最初の連中と同
じ罵倒する者もいた。それが流石に何回も言われると、聖書の神たしも流
石に参るよ。不幸にさせた自覚があるとは言え、嘗て天界のトップ
だった者がこの程度でへこたれるとは少しばかり情けないな。

「……なあイツセー、お前は今どう思ってる？ セイクリッド・ギア 神器の所為で、人
間を不幸にさせた諸悪の根源である聖書の神たしを」

「はっ。」

「以前、旅をしてた時に言ってたじゃないか。『こんなもの 神器を人間に与えた
神様は一体何考えてるんだ？』と」

イツセーが初めて聖書の神たしに大して毒を吐いた内容は今でもハツ
キリと覚えている。今の聖書の神たしにとって、イツセー 弟の言葉が他の人間と
違つて一番効いたから。

「……ああ、確かに言つたな」

「今でも俺を一人の家族として接しているが、それでも色々と思うと
ころはあるだろう？ 何なら今ここで言ってくれ。もしくは殴つて
も良いぞ。その方がお互いにスッキリするからな」

もしイツセーに罵倒されたり、殴られたとしても、俺は何の抵抗も
せずに受け入れる。イツセーが弟とは言つても、聖書の神たしの所為で
セイクリッド・ギア 神器を与えられた被害者の一人でもある。例えもし殺すような事
をしても、相手がイツセーなら俺は受け入れるつもりだ。

「……………」

あく久々に笑った。こんなに心の底から笑ったなんて久しぶりだよ。おまけに今まで抱えていた物がスッキリしたように吹っ飛んでるし。

さつきまでウジウジと悩んでいた自分がバカだったんじゃないかと思う程だ。イツセーの言う通り、俺は本当にバカだったかもしれないな。

とは言え、いくらイツセーが責めないとは言っても、聖書の神の所為で不幸にした人間に対しては受け止めないといけない事に変わりはない。

「ありがとな、イツセー。お陰で心が晴れたよ」

「は？」

「よし！ 今日には久々にお前とコンビプレーでもやるか。即効で襲撃者共を片付けた後、すぐにリアス達と合流するぞ」

「お、おう……って！ ちよつと待ちやがれ兄貴！ さつきまで参つてた顔してたのに、何で急に元気になってんだよ!? 今日兄貴は何か不気味なだけど！」

先に行く俺に、イツセーは文句を言いながら後から付いてくる。

ああだこうだと言いつつも、俺とイツセーは襲撃者が潜んでいる廃工場の中に入る。

「来たか、聖書の神！ 俺達は貴様の所為で不幸な人生を——」

「悪いけど、もう英雄派からの罵詈雑言は聞き飽きてるんだ。文句なら後で聞いてやるよ。行くぞ、イツセー。一分以内で片付けるぞ」

「おう！」

「え？ ちよ、ちよつと待て！ 俺達は貴様の被害者で——」

『ぎやあああああああゝゝゝゝ!!!』

襲撃者達の行動に付き合う事なく、俺とイツセーは神器を使わせる前に速攻で仕掛けて全員をKOさせた。

俺たち兄弟は今まで個人で戦っているが、格闘戦のコンビプレーも大得意だ。それに加えて個人の戦闘力以上の力を発揮する。なので神器に頼った未熟な戦い方しかない襲撃者達を簡単に倒したの
は言うまでもない。

因みに俺達にKOされて今も気絶中の襲撃者達は、目覚めた後には記憶が消去されている為、何の情報も得る事が出来ない。最初の襲撃者達から同じ事が続いている。一応コイツ等は襲撃者である為、調べるだけ調べると言う事で冥界へ送る手筈になっている。

一通りの作業を終えたので、俺はイツセーと一緒に転移術を使ってリアス達がいる一つ目の廃工場へ向かうと、もう既に片付いていた。何人が逃がしてしまったみたいだが、残りは全て冥界へ送るようだ。因みに俺の単独行動とイツセーの独断については、後でアザゼルに報告するらしい。

その後、イリナから意見が上がった。今回や今までの英雄派の行動について。

リアス達が色々な推測を立てるも、俺の方でアザゼルと話し合ってみると言う事で話を終える事にした。

用が済んだ俺達は部室へ戻って一息ついた後、帰り支度をする中で朱乃が何故か鼻歌を歌っていた。

「どうした、朱乃。何か随分とご機嫌だが」

「それは当然。明日ですもの。自然と笑みがこぼれますわ」

「明日? ……………ああ、そう言えば明日はアレだったな」

「ええ。デート。明日イツセーくんは私の彼氏ですわ、うふふ」

危ない危ない。俺とした事がまたしても忘れてた。明日はイツセーが朱乃とデートする日だって事を。

俺と朱乃の会話を聞いた直後に空気が変わり、女性陣全員の殺意がイツセーに向いていた。俺も俺で、朱乃のデートを手助けした事もあつてか、リアスから睨まれたし。

第三話

「それじゃあ小猫、今日もイツセーの治療を頼むよ」
「……分かりました」

リアス達と一緒に戦闘から帰って来た俺は、部屋に小猫を連れてきた。削り取られてしまったイツセーの寿命を、小猫の仙術で治療させる準備を行う為に。

イツセーは転生悪魔になる前に、シャルバとの戦闘で禁^{バランス・ブレイカー}手に至った。が、その後に問題が起きた。暴走してる際、自分の命を闘^{オーラ}気に変換して周囲の物を破壊し、更には俺と戦う時にも大量の闘^{オーラ}気を使いまくった。

命を使つた為に死ぬ寸前となったイツセーは転生悪魔となるが、悪魔の寿命を使つて正常な状態へと戻った。但し、その寿命は二〜三十%以上失っている。

悪魔は一万年近い寿命を持っているが、転生悪魔となったイツセーは他と違って七〜八千年生きられない。それでも人間からすれば永遠に近いがな。

しかし、イツセーは他のグレモリー眷族と違って寿命が短い分、一番最初に死ぬ事が確定済みだ。イツセーにはリアス達と同じ時間を過ごして貰いたいから、失った寿命を元に戻そうと考えた。

その結果として、俺は小猫に仙術治療をしてもらうよう頼んだ。以前まで仙術を使う事を拒んでいた小猫だったが、心の整理がついたのか、今回の治療を快く引き受けてくれた。小猫としても、イツセーが自分より先に死んでしまうのは嫌みたいだ。

なので俺は数日の間、効率の良い仙術治療法を小猫に一通りの事を教えた。教えられてる小猫はフムフムと学んだ後、イツセーに仙術治療を実践している。因みに『仙術治療の際は、肌と肌を直接合わせる事で回復が早くなる』と教えたら、小猫は顔を恥ずかしそうに赤くしながらも実践したそうだ。治療後にイツセーから聞いた後は、小猫も結構大胆になってきたなあと思わず感心したよ。

「……あの、リユースー先輩。一つ確認が」

「ん？ どうした？」

俺の部屋を出ようとする小猫が、突然振り返って質問してこようとする。しかも顔を真っ赤にしながら。

「……………」、「こんな事を訊くのはどうかと思うんですが…………」。もつと手っ取り早い方法は、ありますか？ 例えば、その……………ぼ、房中術とか」

「……………」

おいおい、よりもよつて俺になんつー事を訊いてくるんだよ。思わず無言になってしまったじゃないか。

いくら俺が効率の良い仙術治療を教えるからって、それは流石に返答に困るぞ。

因みに房中術とは、分かり易く言えば男女の性行為である。イツセー風に言えばエッチするって事だ。

「…………え、えつと…………その方法は俺じゃなくて、治療してるイツセーに確認を取ってくれ。まあ敢えて言うなら、それはそれで充分な治療になるって事だけは言っておく」

「…………分かり、ました。変な質問して、すいませんでした。では」
恥ずかしい質問をしていると自覚してるのか、小猫は確認した後には颯爽と部屋から出て行った。

その後、小猫が本当に房中術を実践しようとしてるのか不安に思った。もしリアス達の耳に入ったら、とんでもない事になるかもしれないと。

不安を抱いてる俺は確認と言う名目でイツセーの部屋に行くと、扉の前には何故か薄い白装束を纏った猫耳モードの小猫がいた。

「どうしたんだ、小猫？ 治療はどうしたんだ？」

「…………そ、それは」

小猫が部屋の扉を指しているの、俺がその前に立って聞き耳を立てると――

『それじゃあ、イツセー。聞かせてもらおうかしら。さつき小猫と話していた房中術とか、異種族との交配とか、悪影響とかを全部』

『イツセーさん、ちゃんと聞くまで寝るのはダメですからね』
『ち、違うんです部長！ アーシアも勘違いしている！ 俺は別に悪い意味で言ったつもりじゃ……！』

どうやら俺の不安は的中してしまったようだ。

取り敢えず小猫には、今後暫く房中術についての話題は一切触れないようにと注意しておいた。

☆

次の日。休日。

今日はイツセーと朱乃の遊園地デートする日だ。

二人が出掛けた後、リアス達が動き出したのは言うまでもない。それは当然、イツセーと朱乃の後を追う為だ。

この展開の後を考えた俺は――

「ふうつ。取り敢えず逃走成功つと……」

彼女達に気付かれないよう、コツソリと転移術を使つて逃げ出した。今は自宅から少し離れた裏路地にいる。

すると、リアス達のオーラを感じたから、俺はすぐに気配を消して隠れる。

「リアスお姉さま、リユースーお兄さまはどこへ行ったんでしよう？」

「どうせ、私達と同行するのが嫌で逃げたと思うわ」

「……こういう時のリユースー先輩は薄情です」

「ぼ、僕はリユースー先輩は用事があつてお出かけしたんじゃないかと思ひますが……」

「と言うか小猫ちゃん、どうして僕も一緒に来ないといけないの？」

イツセー先輩と朱乃さんのデートに、僕は関係ない筈じゃ……」

アーシア、リアス、小猫、裕斗、ギヤスパーがそれぞれ思った事を口にしながら、二人がいる遊園地へと向かっていた。

ってか何だあの変装は？ あからさまに怪しすぎるぞ。特に小猫とギヤスパーが。小猫はレスラーの覆面してて、ギヤスパーは紙袋かぶってるし。見ててあからさまに怪しいとしか言いようがない。裕斗は変装してないから問題無いが。

まあソレは別に、どうやら裕斗とギヤスパーは俺の代わりとして連れて来られたようだな。すまん二人とも。あと裕斗にはお詫びとして、俺が修行相手になるから。

取り敢えず今日は夕方まで家に戻らないで、どこか適当にブラブラする事にしよう。その時にはイツセーと朱乃のデートや、リアス達の追跡も終わってるだろうし。

そう考えた俺は、リアス達の気配が遠くなったのを確認した後、彼女達とは別方向の道へ行く事にした。

で、俺が来たのは――

「と言う訳で、逃げてきたって訳ですよ」

「あらまあ、リユースーちゃんも大変ねえ」

オカマのローズさんが経営してるオカマバーだった。ここ最近彼の店に来てなかったのが、久しぶりに来店してる。

平日は営業時間外だが、土日だと今の午前中には喫茶店扱いとして営業している。なので今のローズさんの格好は普通の格好だ。

「それにしても、イツセーちゃんはここ最近モテモテねえ。今までは全然そうじゃなかったのに」

イツセーとのデートの事を話していると、ローズさんは面白そうに聞きながらそう言った。

「ですなあ。俺達がリアス達がいるオカ研に入部して以降からでしょうか。アイツがそうだったのは」

今までのイツセーは、学校の女子から嫌われている変態だった。なのに今は駒王学園トップアイドルのリアスや朱乃、更にはアーシアや小猫にゼノヴィアにまで好かれている。他には冥界にいるレイヴェ

ルとか。勿論全員、イツセーを一人の異性として愛している。と言っても、彼女達は全員悪魔だけだな。

「ああ、そうそう。言い忘れてましたけど、イツセーは転生悪魔になって、漸くリアスの正式な眷族になりましたよ」

「ふうん。これでリアスちゃんも、堂々とイツセーちゃんを自分の眷族と言えるようになったのね」

「ええ。尤も、アイツにはもっと強くなってもらわないと困りますが」
いくら念願だったイツセーの眷族化したからって、それを満足されては困る。リアスには今後、イツセーの主として更に精進しないと。

「ところでリユースーちゃん。貴方、そろそろワタシに何か話す事があるんじゃないかしら？ それとも、まだ待った方が良いの？」

すると、ローズさんは急に真剣な顔になって俺に問う。彼の雰囲気を探した俺は、意を決して話そうとする。

ローズさんと出会って数年経ち、これまで数々の恩がある。彼の素性は知っていると言うのに、未だに自分の正体を話さないのは正直言ってフェアじゃない。

本当なら教えてはいけませんが、幸い彼は三大勢力の裏事情を知っている人間だ。どの道、遅かれ早かれ知ってしまう事になるから、俺の口から直接話しておいた方が良い。

「そうですね。既に三大勢力が和平を結び、そして……聖書の神の正体が公表された以上、もう貴方に隠す必要はありません」

席を立った俺は少し離れると、ローズさんの目の前で真の姿——聖書の神となる。

「御覧の通り、これが私の正体だ。我が名は聖書の神。嘗て天界を治めていた神だ……なくんてね。実は俺、人間に転生した元神なんですよ」

「あらあら、それがリユースーちゃんの本当の姿なの。まさかとは思っていたけど、本物の神さまだだったのねえ。可愛い人間のリユースーちゃんから超イケメンに大変身なんて……ワタシ、思わず惚れちやいそうだわあ♪」

「ハハハ。残念ですが、生憎と俺に男色趣味はありませんので」

初めて聖書の神を見たローズさんは惚れ惚れする様に言ってきたので、念の為に釘を刺しておいた。

にしてもローズさん、俺が正体をバラしたのに随分と冷静だな。普通、こういう時は簡単に受け入れるとは思えないんだが。と言うか、薄々感付いていた様子だ。

「当然よお。今まで神器を使わずに、あんな常識外れな力を見たら、誰だって疑うわよお」

「さり気無く心を読まないで下さいよ」

どうやら彼は俺が今まで見せた力を見て色々と疑問を抱いていたようだ。まあ、言われてみればそれは当然か。

この後、聖書の神は兵藤隆誠の姿に戻って、ローズさんにこれまでの事情を話し始めた。

第四話

「なるほど。イツセーちゃんバランス・ブレイカーが禁手手になれたのは、シャルバ・ベルゼブブの所為で……。話には聞いてたけど、旧魔王連中って本当に碌でもない連中なのね」

「全くですよ。と言っても既に瓦解してるので、後は残党共を片付けただけです。ローズさん、万が一ソイツ等と遭遇した時は始末してもらっていいですか？ 倒した後は教育しても構いませんので」

「あああ、嬉しいお知らせねえ♪ 良いわあ。もし来たら、ワタシがヌツポリ……じゃなくて、身体の隅々までジツクリ教育してあげるわあ♪ ウフフフフ♪」

「言い直したところで大して変わってませんよ？」

オカマバーで店長のローズさんに自分の事や、先日起きた事件の経緯を話すこと約数時間。彼は仕事をしながらも俺の話はずっと聞いてくれた。途中で昼食として、ローズさんお手製のランチセットも美味しく頂いた。勿論、金は後でちゃんと払う。

そして旧魔王派の残党処理を頼み、ローズさんが笑みを浮かべながら快く引き受けてくれたのを見て理解した。もしも残党共がローズさんと遭遇したら、死んだ方がマシだと思う奈落の底へ叩き落される事に。

「そう言えば話してる途中で思い出したんですけど、以前に其方で教育した墮天使は今どうしてるんですか？」

「ああ、ドーちゃんの事？ 今はもうすっかりウチの従業員で、立派に接客しているわあ。良かったら呼ぼうかしら？」

「…………え、遠慮しておきます」

ドーちゃんって……。アイツの名前はドーナシックで、嘗てはバカ娘こと墮天使レイナーレの配下だった男墮天使だ。

それが今や、洗脳と言う名のローズさんの教育によってオカマ化し、完全な男好きとなってるか。確か以前、イツセーの悪友の一人——元浜の尻を狙おうとしてたな。

後日、嘗て部下だったドーナシックの変わり果てた姿と現在を墮天

使総督アザゼルに報告すると――

『ドーナシーク？ 誰だソイツは？ 知らないなあ。こんなキモい奴を部下にした憶えはないし、見た事も無いなあ。ってか、写真見せるな。見るだけで目が腐りそうだ』

初めから知らないと言いつつ記憶消去されてしまった。部下を簡単に切り捨てるのは、アザゼルは随分と酷いもんだ。訴えられても知らないからな。

「おっと、もうこんな時間ですか。すいません、長々と居座ってしまつて」

時計を見ると午後二時を指していた。この店には午前十時前に入ったから、もう四時間以上経っていた。時間が経っている事で既に他の客、と言うよりオカマの客も少なからずいる。何かさつきから、ローズさんと話したそうな様子だ。

「リユースーちゃんは特別だから、何時間居ても構わないわよ？」

「ははは。これ以上ローズさんを独占したら、向こうのお客から文句を言われそうなんで退散します。はい、お代です」

そう言いながら俺は財布から千円札を二枚出して支払う。因みにランチセットとコーヒー数杯分の料金だ。俺の場合は何割か引いてくれているので、通常の料金より安くなっている。他の客と同様に通常料金で構わないんだけど、ローズさんは俺に恩があるからと言って必ず割引してるんだよな。

「ごちそうさまでした。また来ます。もし何かありましたら、連絡しまするので」

「いつでも来てねえ」

店を出た俺は、適当に歩きながらイツセーの闘オーラ気を探ってみた。他にも朱乃やリアス達のオーラも含めて。

え〜つと、イツセーと朱乃は……もう指定の遊園地にはいないが、未だにデート中みたいでずっと傍にいるか。リアス達は……あれ？ 何か二人から随分と離れているな。ついさつき確認した時は、憤怒のオーラを出しながらも一定の距離を保っていたのに。

リアスはイツセー関連で嫉妬してる時、必ずと言っていい程に怒り

のオーラを放つ癖がある。まあ表面上には出さないが、探知した時には禍々しいオーラを感じるんだよなあ。

直接は見えないから分からないが、リアス達はイツセーと朱乃を見失ったか、もしくは撒かれたか。後者だったら、間違いなく朱乃の仕業だろう。そろそろ本格的に二人っきりの時間になりたい、つてな感じで。

イツセーと朱乃のオーラが感じる方角は分かるが、何処にいるのかは分からないな。遊園地は場所を知ってたから特定出来たが、今イツ等はあんまり人気がない所にいるとしか分からない。

………これはあくまで俺の推測に過ぎない。まさか朱乃がこんな昼間っからイツセーとラブホテルに……いやいや、それは流石にないか。つてかアイツ等はまだ学生だから、そんな場所に入れる訳無いし。

いくらなんでも考え過ぎ……ん？ イツセーと朱乃のオーラの他に……つて、おいおい！ このオーラはまさか!?

覚えがある複数のオーラを感じ取った俺は、すぐに人目が付かない所へ隠れて、すぐにイツセー達がいる所へ向かおうと転移術を使った。

☆

ど、どうしよう。俺はどうすれば良いんだ!?

俺——兵藤一誠はさつきまで朱乃さんとのデートをしていた。陰から紅髪の追跡者さまご一行こと部長達のプレッシャーを感じながら。

年相応の可愛い女の子の服装になってる朱乃さんと遊園地で一通り楽しみそこから出てすぐに急に予定外な事が起きた。朱乃さんが俺の手を引っ張って走り出し、部長達を撒こうと。俺は逆らう訳もなく、一緒に走り出す事によって朱乃さんと一緒に撒く事になったのは言うまでもない。

そして、問題はその後だ。部長達を撒いたのは良いが、がむしやら

に走り回ったせいで、どこだか分からなくなつて周囲を確認すると……何とラブホテルばかりある場所だった！

部長達に知られたら大変な事になると思つた俺は、すぐに朱乃さんを連れて出ようとした。しかし、朱乃さんが顔を細田まで真っ赤にしながらかしく恥ずかしそうに呟いた。『イツセーが入りたいなら、いいよ』と。そして今に至る。

今の朱乃さんを見て断つてしまえば、男が廃るような気がしてならない！ だけど後になつて、部長に殺されてしまいそうで怖い！

俺の頭の中を支配して戦っている。このまま行くんだ！ ダメだ断るんだ！ と言う二つの考えが！

最大の決断を迫られる俺に、横から話しかける者がいた。

「まくつたく、こんな昼間つから、女を抱こうなどとやるではないか、イツセーよ」

ん？ 何か聞き覚えのある声だ。思わず振り向くと、そこには帽子をかぶつたラフな格好の爺さん。背後にガタイの良い男性とパンツスーツを着込んだ真面目そうな女の人だ。

つて！ この爺さんは！

「オーデインの爺さん!」

「ほっほっほ、久しいの、イツセー。北の国から遠路はるばる来たぞい」

何と目の前には北欧の主神である爺さんがいた！ デイオドラとの一戦以来じゃないか。

「ところでイツセーよ。ワシがこうして折角来たんじゃから、例の本を献上したらどうじゃ?」

「いやいや、そんな事より、何で爺さん達が此処に来てるんだ?」

兄貴やアザゼル先生から爺さんが来るなんて話は全く聞いてないぞ。と言うより、テロが活発な時期に来たら色々和不味い筈だろ?」

と思つていたら、ロスヴァイセさんが入ってくる。

「オーデインさまー! こ、このような場所をうろろとされては困ります! か、神さまなので、キチンとなさってください! 聖書の神であるリユーセーさんに知られたら呆れられますから!」

おおっ。また爺さんを怒り出したよ。この前冥界で会った時もこんな感じだったな。

「よく言うわい、ロスヴァイセ。元勇者じゃったりユーサーと別れる前に、ここに入りたかったと今でも未練がましくぼやいておったではないか」

「そ、それとこれとは別です！ 私より、オーデインさまはご自重なさってください！ あと、イツセーくんや貴女もです。ハイスクールの生徒なんだから、お家に戻って勉強なさい」

ああ、ロスヴァイセさんは未だ兄貴に未練があるんだ。ああ言ってるって事は、まだ新しい勇者^{かれし}が出来てないのか。

ってか話を逸らす為に、俺達に正論ぶって怒ってもなあ。今のロスヴァイセさんにはとても説得力が感じられない。

まあどの道、こんな空気がラブホテル入るか否かを決められないな……。

畜生っ！ 俺は心の中で慟哭していた！

と、横を見れば朱乃さんが爺さんの付き添いと思われるガタイの良い男性に詰め寄られていた。

「……あ、あなたは」

朱乃さんはその人を見た途端に目を見開いて、驚いている。ひよつとして見覚えのある人か？ それにこの人のオーラは、何か朱乃さんと感じが似ている。

「朱乃、これはどういうことだ？」

男性の方はキレ気味だ。声音を聞くだけで怒気が含まれているのが分かる。すっげえ迫力だ。

「……あ、あなたには関係ないでしょ！ そ、それよりもどうしてここにいるのよー！」

さつきまで可愛かった朱乃さんとは別人のように、目つきを鋭くして睨み付けていた。あの朱乃さんがここまで睨むなんて……もしかして、この人は。

「それは今どうでもいい！ とにかく、ここを離れる。まだ学生のお前にはまだ早い」

男性は朱乃さんの腕を掴み、強引にどこかへ連れて行こうとする。

「いや！ 離して！」

朱乃さんが必死に抵抗していた。

男性は朱乃さんを知って、朱乃さんも男性を知っている。俺は何となくだけど分かった気がした。

「はいはい。そこまでにしような、お二人さん。こんな所でみつともない親子喧嘩なんかしないでくれ」

「へ？ あ、兄貴!？」

『!』

突然、転移して現れた兄貴が男性と朱乃さんの間に割り込んで止めた。

兄貴の登場に俺だけじゃなく、朱乃さんと男性は驚いている。

「おお、リユージェーではないか。お主も久しぶりじゃのう」

「りゅ、リユージェー、さん。お、お久しぶりです」

黙って見ていた爺さんは親しげに、ロスヴァイセさんは余所余所しい挨拶をする。

「ち、父上！ これは私と朱乃の問題で……!」

男性は兄貴に向かって父上と言った。端から見れば、中年男性が学生の少年である兄貴に向かってそう呼ぶのは無理があり過ぎる。

「だけど、俺はすぐに確信した。この男性は——」

「今のお前は墮天使組織グリゴリ幹部、バラキエルとして来ている筈だ。——朱乃の父親だからって、何をしても許されるって訳じゃないぞ?」

「ぐっ……」

——やっぱり朱乃さんのお父さんだった。

兄貴の言い分が効いたのか、男性——バラキエルさんは掴んでいた朱乃さんの腕を離れた。

何とか事無きを終えたと思った直後、

「リユージェー!」

「へ？ おわっ!」

突如、いきなり現れた誰かが、そのまま兄貴に猛スピードで接近し

て抱き着いた。兄貴は何とか倒れずに踏ん張ると、抱き着いてきた誰かを見た途端に驚愕を露わにする。

兄貴だけじゃなく、この場にいる面々も驚いた様子だ。

「またお前か、フレイヤ！ いい加減、急に抱き着くのは止めろ！」
「だってえ、リユースーに会いたかつたんだも〜ん！」

兄貴に抱き着いたのは、亜麻色の長髪をした超美人——女神フレイヤさんだった。

久しぶりに見たけど、この女神様は相変わらず兄貴の事が大好きだなあ。兄貴は少し迷惑がつてるけど。

「やれやれ、フレイヤ。勝手にいなくなつたかと思えば、リユースーが来た途端に現れおつて……」

「ふ、フレイヤさま！ 貴女もオーディンさまと同じ神さまなんですから、リユースーさんにはしたない真似は……！」

フレイヤさんの登場に、オーディンの爺さんとロスヴァイセさんは窘めようとしている。

何かこの後、とんでもない事が起きそうな気がするな。

第五話

「ほっほっほ、というわけで訪日したぞい」

兵藤家の最上階に設けたVIPルームでオーデイン殿が、訪日した理由を話しながら楽しそうに笑っていた。

日本に用事があるついでとして、この町へ来たんだと。まあこの町は悪魔、天使、墮天使、三大勢力の協力体制が強いから安全だからな。家には俺やグレモリー眷族全員集合している。アザゼルもオーデインが来訪したのを聞いて、久しぶりに顔を出していた。

言うまでもなく、イツセーと朱乃のデートは中断だ。あの後はりアス達と合流し、そのまま家にオーデイン達を連れて帰って来た。その際に朱乃はバラキエルと会った事により、ずっと不機嫌のままだ。俺が間に入ってる事もあって、今は何とか落ち着いている。

前にアザゼルから話は聞いたが、バラキエルと朱乃の確執は相当根深いようだ。朱乃はバラキエルと視線を交わさないどころか、完全に無視状態になっている。

バラキエルとは久々に会ったけど、今も大して変わってないな。武人気質で堅物なところが。実力に関してもアザゼルと肩を並べるほどだ。一撃の攻撃力に関しては墮天使随一でもある。以前にイツセーが戦ったコカビエルは、自身が最強の墮天使と豪語していたが、バラキエルに比べれば程遠い。

「どうぞ、お茶です」

リアスが笑顔でオーデインに対応していた。ついでと言つちやなんだが、つい先程にイツセーの頬を思いつきり抓っていた。その後はゆっくりとお話があるんだと。イツセー、生きろよ……。

まあ俺も俺で、それとは別の理由で逃げたいんだよな。さつきからフレイヤの奴が、座っている俺に抱き着いたままだから。北欧で名高い女神フレイヤが俺に抱き着いてるのを見たリアス達は、物凄く驚いていたよ。ゼノヴィアとイリナは相手が女神だからか、強く出れないでいる。

「構わんでいいぞい。しかし、相変わらずデカいのう。そつちもデカ

いのう」

リアスと朱乃の胸を交互に見るオーデイン。もう完全にエロジジイの顔だな。

あとイツセー、文句言っても構わんが、家の中で暴れるのだけは勘弁してくれよ。

「もう！ オーデインさまったら、いやらしい目線を送っちゃダメです！ こちらは魔王ルシファアさまの妹君なのですよ！ それとフレイヤさま、そろそろリユースーさんから離れたらどうですか!？」

ヴァルキリーのロスヴァイセがオーデインの頭をハリセンで叩くと、次にフレイヤへ抗議する。

オーデインは頭をさすりながら半眼になっていた。オーデインとロスヴァイセのやり取りは相変わらずだな。

「まったく、相変わらず堅いのお。サーゼクスの妹と言えば別嬪さんでグラマーじゃからな、そりゃ、ワシだって乳ぐらいまた見たくもなるわい」

「ほんと、堅物なんだから、ロスヴァイセは。私はリユースーと久しぶりに会ったんだから、抱擁したくなるのはしょうがないでしょ」

文句を言うオーデインとフレイヤ。こういう時の二人は息が合うんだよなあ。

すると、彼女についてオーデインがリアス達に紹介しようとする。

「こやつはワシのお付きヴァルキリーじゃ。名は——」

「ロスヴァイセと申します。日本にいる間、お世話になります。以後、お見知りおきを」

オーデインからの紹介でロスヴァイセが挨拶をした。以前と違い鎧は着ていなく、パンツスーツを着込んでいる。流石に人間界、と言うより日本で鎧のまま着たら、コスプレと勘違いされるからな。

今のロスヴァイセの見た目は、クールビューティーで仕事ができる雰囲気だな。

因みにフレイヤはリアスや朱乃と似たような服装だった。少し裾が短めの赤と白を合わせたワンピースで、如何にも俺と同年だと思わせる可愛い女の子風の服だ。

「以前リューサーが彼氏じゃったが、今はフラれて新しい彼氏募集中の生娘ヴァルキリーじゃ」

「そして私フレイヤがリューサーの恋人でくす」
『ええ!?!』

オーデインとフレイヤが余計な追加情報をくれた所為で、狼狽しだしてるロスヴァイセだけじゃなく、(イツセーを除く)悪魔のリアス達+イリナが酷く驚いていた。

「そ、そ、そんな事を言わなくていいじゃないですかあああつ！ わ、私だって、ずっとリューサーさんの彼女でいたかったんですよっ！
リューサーさんが嫌いだからフツたんじゃありませんから
ねええええ！ あのままりューサーさんがヴァルハラにいてくれたらあああ！」

その場にくずおれて、床を叩き出したロスヴァイセ。

別れ際は俺に新しい勇者かれしを作るって意気込んでいたのに……
結局はまだ引き摺ってたんじゃないか。 って事は、未だ新しい勇者かれしに
目星がついてないのね。

つたく。さっきまでのクールビューティーだったイメージが一気に崩れたよ。

リアス達は俺に訊きたそうな顔をしてるが、流石にオーデイン達の前ではやらないようだ。でも、後で問い質す雰囲気を感じるが。

「まあ、戦乙女の業界も厳しいんじゃないよ。器量良しでも中々芽吹かない者も多いからのお。それに最近では英雄や勇者の数も減ったもんでな、経費削減でヴァルキリー部署が縮小傾向での、リューサーからの提案で独り身となったこやつをワシのお付きにさせて職場の隅にいたのじゃよ」

「それにウチのヴァルキリー達って、奥手で夢見がちなのよね。理想の相手ばかり追いかけてるから、あんなんじゃないや勇者かれしなんて絶対出来ないわ。ま、私の理想の彼氏はリューサーだけどね」

オーデインとフレイヤはうんうんと頷きながらそう言う。以前俺とイツセーがヴァルハラへ訪れた時、オーデインからヴァルキリー事情を聞いて、世知辛い時代になったと気の毒に思ったよ。思わず人間

界の現代社会と大して変わんないじゃないかと。フレイヤの発言は敢えて無視させてもらうが。

アザゼルがやり取りに苦笑しながらも口を開く。

「爺さん達が日本にいる間、俺達で護衛する事になる。バラキエルは墮天使側のバックアップ要因だ。俺も最近忙しくて、此処にいられるのも限られているからな。その間、俺の代わりとしてバラキエルが見てくれる」

「よろしく頼む。それと聖書の神、御挨拶が遅れてしまいましたがお久しぶりです」

言葉少なにバラキエルが挨拶をして、俺にも息子としての挨拶もする。

「あゝ、バラキエル。出来れば俺の事はアザゼルみたく、名前で呼んで構わない。堅苦しい喋り方もなくなっていいから」

「そう言われても……。むう、では隆誠殿……と、お呼びしても宜しいですか？」

「ああ、今はそれで良いよ」

見た目中年男性のバラキエルから、父上と呼ばれるのは正直言つて抵抗があった。聖書の神の時は問題無いが、兵藤隆誠に向かつて父呼ばわりされると、周囲から見れば色々突つ込みどころ満載だからな。

それはそうと、俺達がオーデイン達の護衛か。特にフレイヤが面倒だ。

「ところで爺さん、来日するにはちよつと早過ぎたんじやないか？」

俺やリユースーが聞いていた日程はもう少し先だった筈だが」

「全くですよ、オーデイン殿。事前に来ると連絡してくれれば、こんなバタバタせずに済んだんですから。それに来日目的は日本の神々と話をつけたいからでしょう？ ミカエルとサーゼクスが仲介で、アザゼルが会談に同席する予定だと」

「言っておくが聖書の神も俺と同席だぞ。三大勢力の助っ人なんだからよ」

クソっ。アザゼルの奴め、俺だけ楽しさせないと釘を刺しやがって！

助っ人だからって、何でもかんでも頼ろうとするなよ！

「まあ。それと我が国の内情で少々厄介事……というよりも厄介なものにワシのやり方を批難されておつてな。以前ヴァルハラへ来たリユージェーには話したじやろう？ 頭の固い奴等や、あの阿呆も含めて」

……ああ、言われてみれば確かに。特に俺とイツセーがヴァルハラへ訪れた時、一番嫌悪感を抱いていたのは北欧の悪神——ロキだった。アイツは俺達と会った瞬間、殺す勢いで追い出そうとしたんだよな。『ここは貴様等のような人間が踏み入る場所ではない！』と。まあオーデインがいた事によって事無きは得たがな。

「成程。オーデイン殿は奴等に妨害されないよう、先手を打とうと早めに行動したという訳ですか」

「その通りじゃ。なので日本の神々といくつか話をしておきたいんじゃないよ。今まで閉鎖的にやっとして交流すらなかったからのお」

オーデインは長い白髭を擦りながら嘆息していた。知ってはいたけど、どこの勢力も厄介事があるのは当たり前か。

「厄介事って、ヴァン神族に狙われたクチか？ まさか聖書の神とイツセーがヴァルハラへ来たのが原因じゃねえだろうな？ 頼むから『神々の黄昏』を勝手に起こさないでくれよ、爺さん」

アザゼルは皮肉気に笑う。

失礼な。俺とイツセーはヴァン神族と事を起こしてなければ、接触もしてないっての。

「ヴァン神族はどうでもいいし、リユージェー達とも一切関係無いわい」
「ならいいがな。そーういや聖書の神、何でイツセーと一緒にヴァルハラへ行ったんだ？」

「ああ、以前にイツセーを連れて修行の旅で北欧を訪れた際、ヴァルハラへ行く機会があつてな。その時に当時まだ見習いヴァルキリ―だったロスヴァイセが——」

「りゅ、リユージェーさん！ そこは細かく説明しなくていいですから！」

俺が説明しようとする所を、ロスヴァイセが顔を赤くしながら待つ

たを掛けた。

「どうやら彼女にとっては話して欲しくない内容みたいなので、俺は一部分を省略しながら、彼女を通してヴァルハラへ訪れた事を話す事にする。ロスヴァイセが自分の事を話さないかハラハラしながら聞いている中、イツセーは苦笑しながら見ていたけど。」

「あれ？　なあ兄貴、トップ会谈やる前までは自分の正体隠してたのに、何で爺さん達には話したんだ？」

「ああ、それね。俺がヴァルハラで能力ちからを使ったのを見たオーデイン殿が疑問を抱いて、その後問い詰められたんだ。身内のお前や三大勢力に口外しない条件として、教えざるを得なかったんだよ」

「ほっほっほ。ワシに見られたのが運の尽きじゃったな、リユースーよ」

「してやったりと得意気に言い放つオーデイン。」

「まさかりユースーがそんなドジを踏んだとはな。嘗て完璧主義者だった聖書おやじの神とは思えねえ致命的なミスじゃねえか」

「アザゼルも合点がいったと納得した顔をしている。」

「仕方なかったんだよ。あの時は運悪く、聖書わたしの神が抑えてた能力ちからが暴走しかけたんだから。それにオーデイン殿が俺の能力ちからの暴走を抑える為の術を使ってくれなかったら危ういところだったし」

「まあそう言う事じゃ。ワシは言わば恩人と言ったところかのお」

「場合によっては死んでたかもな、と此処で言うのは止めておこう。イツセー達を無駄に心配させるだけだ。」

「オーデインにも余計な事を言わないよう目を配らせると、察したように小さく頷いている。」

「そうだったのか。じゃあそのフレイヤさんが、兄貴を好きになつてるのは前に言ってた一目惚れじゃなく、元は神さまだからか？」

「違うわよ、イツセーくん。私はヴァルハラで初めて会ったリユースーに一目惚れしたの。神とか人間とか関係無くね♪」

「その所為で俺はお前の兄——フレイヤから敵視される破目になったがな」

「イツセーに嘘を言っていないと答えるフレイヤに、俺は物凄く嫌そう

に言う。

あの時は本当に戸惑ったよ。ヴァルハラから少し離れた草原でイツセーと軽い組手をしてる最中、いきなり北欧の美女神フレイヤが俺の目の前に現れた直後——

『私、貴方の戦う姿を見て一目惚れしたわ！ だから私の恋人になって！』

——と言う告白をされたぞ。余りの展開に俺だけじゃなく、組手をしてたイツセーですら目が点になってたからな。

それからというものの、兄フレイの目を掻い潜っては俺に会って抱き着いてくるのがお決まりとなった。その所為でオーデインに茶化されるわ、フレイの他にフレイヤを慕ってる男神共に嫉妬されまくって散々な目に遭った。

今の俺はロスヴァイセの勇エインヘリヤル者だと言っても、フレイヤは全然諦めようとしなエインヘリヤルい。勇者の期間が終わった後も、こうして今に至るって訳だ。

俺がフレイヤに惚れられてる理由を聞いていたリアス達は、少し気の毒そうな目で俺を見ていた。恐らく、俺に今も熱烈な恋愛感情を抱いているエリーの事を思い出してるんだらう。

「ま、それよりアザゼル坊。どうも『禍カオス・ブリゲードの団』は禁手バランス・ブレイク化出来る使い手を増やしているようじゃな。怖いのお。あれは稀有な現象と嘗てリユセーから聞いたんじゃが？」

突然、重要な話になった事でリアスたち眷族は驚いて顔を見合わせていた。

どうやらアザゼルも俺と同じ考えだったようだな。英雄派の連中が度重なる襲撃を仕掛けた目的を。

「ああ、レアだぜ。だが、どつかのバカが手っ取り早く、それでいて怖ろしく分かり易い強引な方法でレアな現象を乱発させようとしているのさ。神セイクリッド・ギア器に詳しい者なら誰でも一度は思いつくが、それを実

行するとなると各方面から批判される為にやれなかった事だ。成功しようが失敗しようが大批判は確定だからな」

「なんですか、その方法って」

イツセーの問いかけに、アザゼルは答えようとする。

「聖書の神からの報告で概ね合っている。下手な鉄砲も数打ちや当たる作戦だよ。先ず、世界中から神器を持つ人間を無理矢理かき集める。そして、洗脳。その途中で恐らく、セイクリッド・ギア 神器を生み出した存在——聖書の神に対する憎しみを募らせたんだろう。次に強者が集う場所として、超常の存在が住まう重要拠点にセイクリッド・ギア 神器所有者を送る。それを禁 手に至る者が出るまで続ける事さ。もし至れば、強制的に魔法陣で帰還させる。リアス達の対峙した影使いが逃げたのもバランス・ブレイカー 禁 手に至ったか、至りかけたからだろうな。尤も、聖書の神が戦った連中は全員 セイクリッド・ギア 神器を使わせる前に倒したが」

やはりな。洗脳で聖書の神を諸悪の根源扱いさせてたのか。道理で襲撃者の中に、同じ罵倒内容しか叫ばない訳だ。『お前の所為で不幸になった』、『許さない、殺してやる』、『人生を返せ』、『全部お前が悪い』と。まるでそう言う風に言えみたいな感じで、さっきの台詞を何回も何回も同じ事を言ってたんだよな。最初は奴等の罵倒で精神的に参ってたが、イツセーのお陰で心が晴れた後には考える余裕が出た。アイツ等の言動は何かおかしいと。

そう考えてるとアザゼルは続ける。

「これらの事はどこの勢力も、思い付いたところで実際にやろうとはしない。仮に協定を結ぶ前の俺が悪魔と天使の拠点に向かって同じ事をすれば、批判を受けると共に戦争開始の秒読み段階に発展する。俺は元からそんな事を望んじやいない。だが、奴等はテロリストだからこそ、それをやりやがったのさ。人間に転生した聖書の神を憎しみの標的にすれば猶更に好都合だとな」

『禍カオス・ブリゲードの団』は各勢力を恨んでいる連中なので、憎しみの対象である聖書の神もいるから問題無いと言ったところか。その憎しみを利用するなんて、あの腐れ外道共は本当にいい度胸してるよ。

すると、アザゼルの説明を聞いていたイツセーが急に疑問を抱いた顔になって俺を見る。

「ちよつと待て、俺はアザゼル先生が言った内容で禁 手に至ったんだけど？」

「今更な質問だな。お前が強くなりたいて言ったから、俺はそれに応えたんだぞ。才能が無かったお前を強くさせようと考えに考え抜いた結果、強い相手と実戦形式でやらせるしかないってな。まあ主に俺との実戦形式で何度も死に掛けたが」

「……………覚えてるよ、バカ兄貴。いつか必ずぶつ飛ばしてやる」

「ははは。楽しみに待ってるよ」

恨み言を吐くイツセーに、俺は軽く流した。

「まあどちらにしろ、人間をそんな方法で拉致、洗脳して禁手バランス・ブレイカーにさせるってのはテロリスト集団『禍の団』カオス・ブリゲードならではの行動って訳だ」
「確かそれをやっている連中は兄貴も知ってるよな？」

イツセーの問いに俺は答える。

「ああ。英雄派の主なメンバーは伝説の勇者や英雄の子孫が集まっているよ。身体能力に関してには天使や悪魔にも引けは取らない。セイクリッド・ギア神器や伝説の武器を所有してる。更には神器が禁手セイクリッド・ギアに至っている上に、神滅具持ちもいるときた。とまあこんなところだ」
「何だそりゃ？ そんな奴等が非人道的な事をしてるのかよ。つか、本当に英雄や勇者の集まりなのか？」

お、イツセーが良い所に気付いた。

「その内会って戦った際に分かる、とだけ言っておく」

実は英雄の本質を全く理解してない、英雄気取りの悪ガキ共だって事をな。

「それよりも連中が禁手バランス・ブレイカー使いを増やして何を仕出かすか、問題じゃの」

オーデインは深刻な顔をする事もなく、普通に茶を飲んでいた。相変わらずマイペースだな、この老神は。

「まあ、今はまだ調査中の事柄だ。ここでもうこう言っても始まらない。それで爺さん、どこか行きたいところはあるか？」

アザゼルがオーデインに訊くと、彼はいやらしい顔つきとなって両手の五指をわしゃわしゃさせた。

「おっぱいパブに行きたいのお！ 前にイツセーから貰った本の広告に載ってたのを見て、是非とも行きたいと思ってたんじゃ！」

「ハツハツ、やはり見るところが違いますな、主神どのは！ よつしや、いつちよそこまで行きますか！ 俺ん所の若い娘っ子共がこの町でVIP用の店を最近開いたんだよ。そこに招待しちやうぜ！」

急に卑猥な話になった事で、俺は途中で聞く気にならなかつた。

盛り上がっている二人は、部屋を早々と退室した。アレが世界を守ろうとする首脳陣とは、世も末だな。

さつきまで話を真剣に聞いていたリアスなんか、額に手をやって眉を顰めてるし。

「オーデインさま！ わ、私もついていきます」

あ、ロスヴァイセが律儀に追っていった。

「お前は残つとれ。アザゼルがいれば問題あるまい。この家で待機しておれ。どうせなら久しぶりに会ったリユースーとゆつくり話し合つたらどうじゃ？ 寄りを戻す為の」

「そ、そんなのオーデインさまには関係ありませんから！」

「ちよつとオーデイン！ リユースーはもう私のよ！ ロスヴァイセには渡さないんだから！」

「フレイヤさまはちよつと黙つてて下さい！」

おお、フレイヤに口答えするとは。ロスヴァイセは成長したんだな。

と言うやり取りをしつつも、彼女はそのまま付いていったようだ。本当に仕事熱心な事だ。

部屋に残された俺とグレモリー眷族、そしてバラキエルは同時に溜息を吐いていた。

そして――

「ねえリユースー、今夜は一緒に寝ない？ あと出来たらリユースーの部屋で過ごしたいんだけど」

「却下だ。そんな事をあの超シスコンバカなフレイに知られたら後で殺される」

フレイヤもマイペースなので、俺は更に溜息を吐いた。

幕間

「なあ朱乃、父親のバラキエルと話し合う気はないのか？」

「……あの人は、私の父なんかじゃありません」

オーデインとアザゼルが風俗店へ向かった後、俺は朱乃と二人で話をしようと五階の廊下にいる。フレイヤには朱乃と大事な話があるから離れるよう言っており、今も最上階のVIPルームにいる。

因みに俺が朱乃を連れて行くのを見たバラキエルが後を追おうとしていたが、来ないように言っておいた。このまま付いて来たら絶対に話し合いにならないのが分かっていたので。

朱乃は俺からの問いに冷たく鋭い声で否定する。不機嫌極まりないと言わんばかりの表情で。

「どんなに否定した所で、バラキエルはお前の父親だよ。それにアイツもあの時、お前を父として心配を——」

バラキエルをフォロウする為に言いかけるが、途端に朱乃は言い放った。

「断じて父親じゃないわっ！　もしそうなら、あのとき来てくれた筈よ!?!　母さまを見殺しになんてしないわ!」

「……………」

どうやら思っていた以上に朱乃とバラキエルの確執は深いようだ。と言うより、朱乃が一方的に嫌っているか。

何とか話をしようとするバラキエルに、朱乃が頭ごなしに何もかも否定している。これじゃ和解なんて無理だな。まあバラキエルも堅物で口下手な為、今もこうして和解しないのも問題だが。

因みに俺は二人が不仲な理由を既にアザゼルから聞いている。本当なら親子間の話に首を突っ込みたくはないが、バラキエルが今後俺達と会う事があるので、事情を知っておく必要があった。

「二つ訊こう、朱乃。バラキエルが母親を見殺しにしたと、本気でそう思ってるのか？　アイツがそんな薄情者じゃないって事は、娘のお前が一番に分かっている筈だが」

「……………」

俺の台詞に朱乃は戸惑いの様子を見せる。

「即座に否定しないのは、分かっているみたいだな。なら良い。急に呼び出して悪かったな」

「……………え？」

確認した俺は話を終えて去ろうとすると、朱乃は次に素っ頓狂な声を出した。

「あ、あの、リユースーくん……………」

「ん？」

「話はもう、終わりなの？」

「ああ、終わりだよ。こんな場所でお前にああだこうだと追求する気は無いし、偉そうに説教する気も無い。後はお前自身がどうにかする事だ」

余りにも予想外過ぎると言う感じの朱乃に、俺は振り返らずに思ったままの事を口にする。

自分から話を振っておいて、それはどうかと思われるだろう。俺が土足で踏み込むようにズケズケと言ったところで、却って朱乃の心を傷付けるだけだ。それどころか、余計にバラキエルとの関係が拗れてしまう。

なので俺は、朱乃がバラキエルの事をどう思っているかの確認だけで済ませた。その結果、口で否定しても、内心ではバラキエルを父親と見ている事に俺は気付いた。なので後は、朱乃が動いてくれるのを待つだけだ。

「まあ敢えて言うなら……………そろそろ重い腰を上げて、一步進んでみたらどうだ？ その先ですつとお前を待ち続けている奴の為にもさ」

「え？」

「俺からは……………までだ。そんなじゃ」

遠回しな言い方だが、朱乃は理解してる筈だ。俺の言いたい事を。

朱乃と別れた俺は廊下を突き進んだ後に左へ曲がると――

「盗み聞きとは感心しないな、イツセー」

「何だよ、やっぱ気付いてたのか」

そこには隠れるように立ち止まっているイツセーがいた。向こう

にいる朱乃は未だ立ち止まっているが、こちらには気付いていない様子だ。

「これでも闘気を消してただけだな……」

「完全には消えてなかったぞ。気付いてないから言っておくが、今のお前は今も闘気が垂れ流し状態になってるぞ」

「え、マジ？」

「ああ、マジだ」

俺からの指摘に、驚いた顔をするイツセー。

知つての通り、イツセーは悪魔に転生した事で身体能力の他に闘気も上がっている。特に闘気は人間の時と比べると、かなり上昇している。

その為に今まで通り抑えても、上昇した分の闘気まで抑える事が出来なかったって訳だ。

どうやらイツセーには、闘気の調節と制御の修行をもう一度やらせる必要があるな。こんな不安定のまましていると、下手をしたら暴走してしまう恐れがある。

まあ、それは後でやるからいいとしてだ。今は――

「それはそうとイツセー、いきなりで悪いがこのまま朱乃と鉢合わせで、少しの間だけ話し相手になってくれないか？」

「え？……まあ、それ位なら良いけど」

「頼んだぞ」

朱乃にはイツセーで慰めて貰うとしよう。

そして俺の言う通りに動くイツセーは、偶然を装って朱乃と会って話をしようとする。

向こうに気付かれないよう盗み見ると、その先には朱乃がイツセーを抱きしめていた。突然の抱擁に戸惑うイツセーだが、何かを察したようにそのまま優しく抱こうとしている。

確認した俺は即座に去り、VIPルームにいるバラキエルやリアス達には適当に誤魔化していた。

第六話

次の日、俺を含めたイツセーたちグレモリー眷族はグレモリー家主
催で冥界のイベントに参加していた。因みにフレイヤも付いて行こ
うとしてたが、そこはロスヴァイセに頼んで引き留めて貰っている。

今回のイベントに俺は参加してない。何故なら『ファイタードラゴ
ン』の出演者——イツセー達の握手とサイン会がメインだから。今は
少し離れた場所で見守っているだけだ。

参加している『ファイタードラゴン』役のイツセーは勿論のこと、
『アリス姫』のリアスの他にもいる。

祐斗は番組内で敵役の『ダークナイト・プリンス』となっていた。格
好は凛々しい鎧姿とマントを羽織っている。とある国の王子で、宿敵
ファイタードラゴンのライバルと言う設定だ。

王子に相応しい容姿端麗な事もあって、殆どの女性ファンが祐斗の
ところに並んでいる。ほんの一瞬だったが、イツセーが羨ましそうに
見ていたし。因みにイツセーは殆ど男の子ばかりの子供たちだ。

更に小猫も『デビルンキャットちゃん』としてファイタードラゴン
の味方役になっていた。嫌がらず丁寧に応対している小猫は流石だ
よ。

今のところイツセーは子供人気ナンバーワン、祐斗は女性人気ナン
バーワン、リアスと小猫は中間、と言ったところか。

ファン層を確認した俺は一旦楽屋テントに戻る事にした。
すると、スタッフの一人が近づいてくる。

「どうでしたか、リニューセーさま？」

確認してきたのはライザーの妹——レイヴェル・フェニックスだっ
た。

「もう少しで終わると思うから、そろそろ片付けの準備をしておくよ
うにスタッフ達に言っといてくれ」

「わかりましたわ」

彼女はグレモリー眷族達が冥界でイベントをすると聞き、アシスタ
ントとして協力してくれていた。

「それにしても、まさかお嬢様の君が自分からアシスタントを志願するとはねえ。まあこうでもしないと、イツセーに会える口実が作れないからな」

「な、何を言ってるんですの！ これはあくまで修行の一環ですわ！
べ、別にイツセーさまに会いたい為って訳じゃありませんわ！」

「はいはい、そうでしたね」

ちよつと苦しい言い訳をするレイヴェルに、俺は一先ずそう言う事にしておこうと聞き流す。

だってコイツ、イベント開始前にイツセーを見た途端、凄く嬉しそうな表情をしてたんだよな。さっきの言い訳をされても、全然説得力が感じられない。

そう思いながらレイヴェルと話していると、懐に入れてるケータイが振動する。気付いた俺は取り出して見ると、グレモリー夫妻と会う予定の時間前のアラームだと思い出す。

「レイヴェル。グレモリー夫妻に会う予定の時間になったから、俺はこのまま抜けさせてもらおう。すまないが後の事は頼むよ。それとイツセーが戻ってきたら、人間界に帰還する準備をしておくよう伝えておいてくれ」

「あ、はい。わかりましたわ」

グレモリー夫妻に今回の件について話し終えて人間界に戻った後、オーデインとフレイヤの護衛をしなければならなかった。

あのエロ爺ときたら、来日してからどうしようもない注文ばかりしてるんだよな。風俗店に行くわ、道端歩いてる女性をナンパしたりでやりたい放題だ。

それにフレイヤもフレイヤで、俺とデートしようと言って町へ無理矢理行かせようとしたり、一緒にお風呂に入ろうとしたり、更には俺の部屋に忍び込んで一緒に寝ようとしたりで。思わずヴァルハラに滞在した頃を思い出したよ。

フレイヤを止めるのはオーデインの役目なんだが、今回はそれを全くやらないエロ爺と化している。どっちもやりたい放題してる所為で、ロスヴァイセの心労が絶えない状態だ。

「おつ、そうだレイヴェル。もし人間界へ来る予定があつたら家に遊びに来な。その時に君の事を両親に紹介するからさ」

「わかりまし……へ？」

言うべき事を言った俺は楽屋テントから出た直後、レイヴェルが顔を真っ赤にして物凄く慌てふためいていたのは言うまでもなかった。

☆

冥界でのイベントやグレモリー夫妻との話を終え、オーデインとフレイヤの日本観光に付き合わされた後、俺はグレモリー眷族の男性陣を連れて修行の相手をしていた。

ギイイイインツ！ ギインツ！ ギインツ！

現在は久しぶりに祐斗の相手をしている最中だ。

神速で動きながら聖魔剣を振るっている祐斗に、俺は一步も動かずにオーラを纏った木刀で全て防御している。

自身の身体能力を向上している祐斗は、『騎士』^{ナイト}の特性も加えて相当なスピードを見せていた。バランス、ブレイカー 禁 手となったイツセーにも引けをとらない程だ。

未だ攻撃が当たらない事に祐斗は一旦距離を取った。その直後には僅かに息が上がっている様子が見える。

俺が一步も動かずに防御態勢を取り続けて、もうかなりの時間が経っていた。その間に祐斗は数え切れないほどの攻撃を仕掛けるも、俺に当てる事が出来ないどころか、一步も動かせる事が出来ていない。

端から見て、余りにも差が歴然としてる光景と思われるだろう。けれど、俺は俺で防御に集中しなければ不味いと思う程の状態になっていた。

初めて会った頃の祐斗は、駒の特性と自身の能力に頼り過ぎている『宝の持ち腐れ』状態だった。その為に大して本気を出す必要もなく、

ある程度は気を抜いても問題無かった。

しかし、今は違う。あの頃と比較したら、もう明らかに別人じゃないかと思う程に急成長している。俺やアザゼルが課した修行によって、今の祐斗はイツセーと同様に並みの上級悪魔を圧倒出来る実力者となっっている。

たった数カ月の間にここまで強くなるのは本当に驚きだ。人間だった頃のイツセーを強くさせるのには相応の時間を要したんだが……。悪魔だから、もしくは祐斗が持っている才能、と言うべきかもしれない。

因みに祐斗だけでなく、リアスたちグレモリー眷族も当然大きく成長している。攻撃力だけで言うなら、新人悪魔達の中でもトップクラスだ。

さて、それはそうとしてだ。そろそろ俺も仕掛けさせてもらうとするか。

格段に上がった祐斗の攻撃力と技量、そしてスピードは充分に見させてもらった。今度は攻撃に対する防御と回避、もしくはカウンターを見せてもらうか。

そう考えた俺が攻撃の構えに移った直後、それを見た祐斗は即座に防御の姿勢に移る。

ガギイイイインツ！

「ぐっー！」

「ほう」

少し力を込めた俺の斬撃を、祐斗は聖魔剣で防いだ。

だがそれは束の間で、俺は更に仕掛ける。一撃、二撃、三撃と、速さと重さを兼ねた斬撃を振るう。

対して祐斗も負けじと俺の斬撃を防ぎ、躲し、更にはカウンターを打ってこようとする。剣の柄頭をボーリングの球のように膨れ上がらせ、俺の頭を横殴りしようとする。

ふむふむ。手加減してるとは言え、俺相手でもカウンターを仕掛け

る程の腕前になったようだな。と言っても、俺やアザゼルから見たらほんの牽制程度に過ぎないが。

だが、祐斗のカウンターは近距離戦メインの相手には有効だ。イツセーとゼノヴィアがそれに該当する。

膨らんだ柄頭を空いてる片手で受け止めながら軌道をずらした俺は、無防備状態となった祐斗に回し蹴りを喰らわす。

「がっー！」

腹部に直撃した祐斗は吹っ飛ぶも、即座に体勢を立て直す。

「剣だけに意識を向けるな。俺の攻撃は剣以外の攻撃もする事を分かっている筈だ」

「……は、はいっ！ もう一度、お願いします！」

俺の指摘に祐斗は力強く返事をした後、もう一度戦おうと構えようとする。

どうやら身体も結構タフになっているようだ。さっきの回し蹴りは加減しても、並みの上級悪魔が受けたら確実に悶絶している。なのに祐斗は、そうならないどころか力強く立っていた。打たれ強くなつて何よりだ。

「せ、先輩たちい！ そこまでですう！ と言うかもうとつくに制限時間が過ぎてますよお！」

「おい祐斗、早く俺に代われ！ どんだけ待たせりや気が済むんだよ!?!」

びよんびよん跳ねてベルを持って叫ぶギヤスパーと、変われと祐斗に催促してくるイツセー。

それを聞いた俺と祐斗はすぐに構えを解いた。

今回の修行は模擬戦として制限時間を設けている。どうやら予定していた時間をかなり過ぎていたようだ。

祐斗はまだ続けたかったのか、少し不満そうな顔をしながらもイツセーと交代しようとする。

さて、お次の相手はイツセーか。おっと、その前に結界の強度を上げておかないとな。

第七話

「イツセーくんの修行は、もう模擬戦じゃなくて実戦そのものですね」「アイツはお前等と違って才能が無いからな。それを埋める為に多くの戦闘経験を積みさせてるんだ」

イツセーとの修行後、スポーツ飲料をあおりながら裕斗はそう苦笑していた。

今は俺が各々に自主トレをやるよう課している。

裕斗はさつきまで俺とイツセーの修行を観戦したせいかな、急に疲れが出て休憩中。ギヤスパーは空中を飛び回る小型ロボットを目で止める練習。あれはアザゼルが作ったギヤスパー専用の練習アイテムだ。

イツセーは闘気を解除し、自身の力をコントロールする為の瞑想をしている。俺のちょっとした重い枷を付けた状態のまま。

バランス・ブレイカー
禁 手に至り、更に転生悪魔となったイツセーは、身体能力の他に闘気も急激に上昇している。それによってイツセーはここ最近、力が少し暴走気味になっていた。

今までは俺の修行で長い時間を掛けて闘気を高めていたが、それがいきなり急上昇した。その為、今までコントロール出来た物が急に出来なくなっている。

その証拠の一つとして、この前に俺が朱乃と話している時にイツセーが隠れていた時だ。アイツは気配と闘気を消していたと言っていたが、消してないどころか駄々洩れだった。消していたのは人間だった頃の闘気までで、悪魔となって急上昇した闘気は全く消せていなかった。

このままでは不味いと思った俺は、イツセーに再度瞑想の修行をさせる事にした。自身の闘気の量を理解すると同時に、力に溺れて暴走させない為の瞑想を。

知つての通り、転生悪魔となった者の中には、急激な力を得た事で制御出来なくなつて暴走する事例がある。力に溺れた転生悪魔は拳の果てに、主を殺して『はぐれ悪魔』となつた後、理性を失つた異

形の怪物となる。

弟がはぐれ悪魔となる事は絶対に無いが、急上昇した闘気^{オーラ}を抑えきれずに暴走してしまう恐れがある。それを防ぐ為の対策として、再び瞑想をさせているという訳だ。

もしも悪魔になって強くなつたと慢心し、『今なら兄貴に勝てるかもしれないな』とイツセーがほざいた瞬間、力の差を徹底的に教えてやろうと一から矯正する予定だった。ま、それは杞憂に済んだがな。「けど、お前も相当腕を上げたじゃないか。スピードやテクニクは、イツセーより上だぞ」

俺がそう言うと、祐斗は首を横に振る。

「イツセーくんが超スピードの瞬間的なダッシュをするのを考えれば、僕に引けを取らないと思いますか」

「いや、アレって凄そうに見えても実は直線での移動しか出来ないんだ。だからお前はさっき俺の超スピードに反応していたじゃないか。それに加えて、俺との模擬戦で縦横に高速移動しながら攻撃をするのはイツセーには出来ない。そう考えれば、祐斗もイツセーに負けてはいないって事だ」

「あくまでスピードやテクニクに関してです。パワーでは僕を圧倒的に上回っていますし。それに赤龍帝を相手にすると考えるだけで相当なプレッシャーです。イツセーくんがリユースー先輩との修行で繰り出した強烈なパンチが自分に飛んでくるのを考えるだけで肝が冷えます。命がいくつあっても足りませんよ」

ふむ、祐斗はイツセーに対する戦闘評価は相当高いようだな。俺からすれば、祐斗も充分に戦えると思うんだが。

それとは別だが、俺達はアザゼルとサーゼクスが作ってくれた頑丈なバトルフィールドで修行している。冥界グレモリー領のとある地下に作ったものだ。

俺はともかくとして、イツセーと祐斗とギヤスパーは能力上の関係で、普通の場所では思いつきり修行する事が出来ない。イツセーが本気になれば簡単に風景を吹っ飛ばし、祐斗は周囲を剣だらけにしてしまう。

人間界で修行してる時は俺が結界を張っているが、それでも時々周囲に僅かな影響を及ぼしてしまう事がある。特に俺とイツセーが全力のガチンコバトルする時は、な。

修行をやる場所が物凄く限られて難儀してる中、あの二人からプレゼントを頂いたって事だ。

イツセー達がディオドラの件で活躍した褒美と、聖書の神の身内を危険に晒したお詫びを兼ねている。

家からは専用の魔法陣でジャンプして、この場所へ来ている。特殊な作りである上に、聖書の神も一手間加えておいたので、テロリストに気取られる事はない。

レーティングゲームに参戦する常連の上級悪魔は似たような場所を持つているが、若手悪魔のイツセー達は特例という形で頂いていた。因みに聖書の神名義で、このバトルフィールドの管理者となっている。普通なら制作したアザゼルかサーゼクスの筈だが、修行場所に関しては聖書の神に一任して欲しいんだと。

まあ俺としては冥界にも世話になっっている身なので、ああだこうだと言えない。それにバトルフィールドの管理者ぐらいなら請け負っても問題ないからな。

因みにこの特例は他にもいる。それは若手悪魔のサイラオーグ率いるバアル眷族達だ。特に主のサイラオーグは時間に空きがあったら、真っ先にバトルフィールドへ向かって修行してるようだ。イツセーと戦う為に備えて。

他のグレモリー眷族達も当然利用しているが、今回は男組だけしかない。ゼノヴィアも参加したがっていたが、アイツは後日に俺とマンツーマンの特訓に付き合う予定だ。それを聞いた祐斗が、少しばかり面白くなさそうな顔をしていたがな。

「あの、リユウセー先輩。今更ですけど、僕達は強くなっていますよね……？」

いつもの祐斗らしくない少し弱気な質問だった。

「勿論だ。こう言うっては大変失礼だが、イツセーは当然としてお前もリアスと朱乃の力を疾うに超えている。並みの上級悪魔より遥かに

上だ。祐斗は大丈夫だろうが、強くなつたからって油断はするなよ」
「分かっています。僕やイツセーくんの能力は広く知られているから、対処されやすいんですね？」

「その通りだ」

祐斗の言葉に俺は頷いた。

イツセー達の力は既にレーティングゲームの全冥界放送で広く知れ渡っている。なので他の上級悪魔は対処と言うより、倒す為の戦術を組み込んでくる。以前のシトリー戦では、ソーナがイツセーに真っ向勝負では勝てないと理解し、ルールを利用して倒したのがソレだ。

対処だけじゃなく、コイツ等にも弱点は当然ある。

イツセーは直情型な為、シトリー戦のように特殊ルールが設けられたら、そこを的確に突かれると負けてしまう。加えて強すぎる事もあつて、イツセーと真っ向勝負せずに敬遠されてしまう。倒すとすればならトラップかカウンター、もしくは龍殺しをメインにした攻撃を仕掛けるだろう。

祐斗は防御力の低さと脚だ。修行によつて防御力が多少高くなつたとはいえ、あくまで必要最低限のだ。イツセーと違って、闘気オーラを纏つての防御が出来ない。そして脚は長所であるが、短所でもある。もし脚を狙われれば、自慢のスピードを発揮出来ずにアウトだ。例えば、相手のスピードを遅くする神セイクリッド・ギア器所有者と遭遇したら場合とかな。

そしてギヤスパーは単独で戦える戦闘力はない。なので一人の時に狙われたら終わりだ。けど、単独では弱くてもサポートに適しているのから、誰かと組めばギヤスパーは真の力を発揮する。

「そーいや俺って悪魔になつたから、龍殺しの他に光関連も弱点になつちまつたんだよな。朝起きた時には、いつもよりダルく感じたし」

「ぼ、ぼ、ぼ、僕は弱くても皆さんの力になります……!」

俺が一通りの弱点を言つてると、聞いていたイツセーとギヤスパーが自主トレを一時止めて話に加わってきた。

「ギヤスパーはともかく、イツセーは瞑想以外に光対策の修行も必要

だ。今度の修行では最低でも聖書の神の光を簡単に耐えきれぬようにしないと」

「じよ、冗談じゃねえ！ 確か聞いた話じゃ、聖書の神の光は特別で、まともに喰らったら二度と治療できないそうじゃねえか！ 弟の俺を殺す気か!?!」

「大丈夫だ。そこは俺が上手くやるから心配するな♪」

「そんな笑顔で言われても全然説得力ねえ!」

「とは言っても、お前は普段修行で俺の攻撃をずっと受けてるから、他の転生悪魔と違って光の耐性はそれなりにあるぞ」

「……………え、マジ?」

追加の特訓内容にイツセーが物凄く嫌そうに叫ぶも、俺が補足した内容を聞いた途端に目が点になる。

「ああ。それに加えて、お前には今も聖書の神の加護が施されてるから、並みの天使や墮天使が放つ光を喰らってもダメージは殆ど無いぞ」

「……………もうイツセーくんは転生してるけど、悪魔に加護を施す神って……………」

「お、お二人が兄弟でも、そんなの見た事ないです……………」

俺の台詞に祐斗とギヤスパーが苦笑していた。

言われてみれば、確かにそうかもしれない。転生前の聖書の神は悪魔を嫌っていたから、転生悪魔となったイツセーに加護を施すなんて絶対にしないだろうな。

「本当に色々と変わったな、聖書の神。以前まではアレほど悪魔を毛嫌いしてたつてのに」

すると、第三者の声がした。俺達が振り返るとアザゼルだった。

「ほら、差し入れ。女子部員お手製のおにぎりだ。あとフレイヤから聖書の神にだど」

イツセー達が喜び、早速おにぎりを頬張っていた。フレイヤの差し入れは……………リアス達と同じおにぎりでも、かなり不格好な形をしていた。イツセー達と違って不安を抱きながら食べるも……………普通だった。具が入ってない塩気の強いおにぎりだけど、普通に美味しい。

「兄貴、アーシアの作ったおにぎりいらなら俺が全部食うぞ？」
「冗談じゃない！ 俺だって食べる！」

大事な可愛い妹分が作ったおにぎりを食べない訳ないだろうが！

そう思いながら、俺はアーシアお手製のおにぎりも頬張る。うむ。
フレイヤと違って優しい味で癒される。

休憩する俺達の傍にアザゼルも座って笑う。

「嘗て天界にいた頃とは別人だよな、聖書の神。もし此処にミカエル
達がいたら驚愕もんだぞ」

「だろうな。だが、もうあの時の聖書の神じゃない」

「それが今は家族思いな兵藤隆誠ってか？ サージェクスと同じシスコ
ン付きで」

「ほっとけ」

「シスコンは否定しないんだな、兄貴」

アザゼルと俺の会話に思わず突っ込みを入れるイツセー。

それはしようがないだろう。アーシアみたいな可愛い妹分がいた
らシスコンになってしまうんだからさ。と言うかそれ、イツセーも似
たようなものだろうが。

イツセーの突っ込みを聞いたアザゼルが、何か思い出したように訊
こうとする。

「そーいやイツセー、聞いたぜ。お前が将来リアスのもとから独り立
ちするときに来たら、アーシアとゼノヴィアを連れて行くんだって
？」

何？ それは初耳だぞ。イツセー、そういう話は前以て俺にも言っ
ておけ。お前のやる事に口出しはしないが、アーシアに関する事は
言って欲しい。

「ええ、まあ」

「やるじゃねえか。悪魔になったばかりなのに、もうそこまで先の事
を考えてるとはな」

「いや、なんていうか、アーシアとはずっと一緒にいるって約束しまし
たし。俺もアーシアも一緒にいたいんです。それにゼノヴィアとの

悪魔稼業も楽しいかなーって」

なくんだ。もう既にアーシアとそう決めていたのか。だったら猶更、俺が口出しする必要はないな。アーシアはイツセーの事が大好きだし。ゼノヴィアがイツセーに付いて行こうとする理由は分かんが。

返答を聞いたアザゼルが、イツセーの頭をくしゃくしゃ撫でていく。

「イツセー。お前が将来独立して『王』^{キング}になるのは分かった。だったらひとつ覚えなければいけない事があるぞ」

「……………犠牲、だろ？」

確認する様に答えるイツセーに、アザゼルは感心する。

「その通りだ、イツセー。ゲームのとき、手駒を見捨てなければいけないことが必ず起きる。その時、おまえはどう出るか。そこで『王』^{キング}としての資質が試されるんだよ」

ここから先はアザゼルと俺が、イツセーに『王』^{キング}としての在り方を一通り説明した。将来出来るであろう眷族を犠牲にする覚悟を。

まあその前に、今のイツセーには『王』^{キング}のリアスを勝たせる為の覚悟を持つてもらわない。ゲームの際、目の前で倒れた眷族を捨てる覚悟を。そして……………リアスを勝たせる為に自分を犠牲にする覚悟もな。

一通りの話を終わると、アザゼルはイツセーに別の確認をしようとする。

「なあイツセー、おまえがスケベなのは知ってるんだが……………もしも半裸の女が出てきたら、どうする？」

「眼福です！」

イツセーの即答にアザゼルと俺は肩を落とす。

「こりやダメだ。なあリユーセー、こいつすぐに負けるぞ？」

「どうやらお前には理性を保つ修行も課しておく必要があるな。『王』^{キング}になろうとするなら猶更に」

「何でだよ!？」

心外だと叫ぶイツセーだが、俺は本気で不安だった。

ここ最近では真面目に戦っていたイツセーだが、コイツは根っからの

ドスケベだ。ライザー戦ではドレスブレイクを使って、女性眷族を裸にさせた前科がある。

今後の修行について考えながらおにぎりを食べ終わると、一緒に食べ終えたイツセー達は気合を入れた。

「よし、兄貴！ もう一度、組手をやろうぜ！」

「ちよつとイツセーくん、今度は僕の番だよ」

「ぼ、僕も先輩と修行したいんですが……」

「うーん、順番的に考えてギヤスパーだから……。じゃあイツセーは裕斗と組手をやってもらおうか。実力が近い者同士の組手も良いもんだぞ」

俺の提案にイツセー達が驚いた顔をする。特に祐斗は予想外と言わんばかりの反応だ。

「祐斗が相手、か。確かに兄貴の言う通り、それも良いかもな。じゃあ祐斗、相手してくれるか？」

「う、うん。僕は構わないよ。でもイツセーくん……本当に僕で良いのかい？」

「おう。一度お前ともやってみたいと思ってたからな。少し付き合ってくれよ、親友」

「つ……うん！ 勿論だよ、イツセーくん！」

拳を突き出すイツセーに、祐斗もそれに倣ってイツセーの拳と突き合わせる。

……うーん。これは普通に男の友情と言える会話なんだが……この光景をクラスメイトの女子達が見たら、何故か変な方向に誤解するような気がする。だって祐斗がイツセーの台詞を聞いた途端、嬉しいのか少しばかり頬を赤らめてるし。

まあ祐斗にしては、同い年であるイツセーから名前呼び合える親友と認識されてるので猶更嬉しいんだろう。

そんな中、二人は俺達から少し離れた場所で組手を開始した。俺はギヤスパーの修行をやるうとしたら、アザゼルが手招きする。

「リユースー、ちよつといいか」

「どうした？」

「おまえさんが考案したスピノフ作品が採用されたぞ」
「何!？」

予想外の台詞に俺は思わず驚愕の声を上げる。

おいおい、ちよつと待て。アレは俺の悪ノリで考えた作品だぞ。絶対に採用されなれないと思つてたのに。

「リユースー先輩、スピノフ作品つて何ですか？」

「ああ、それは——」

「セラフオールが出演してる番組『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の外伝作品——『魔女っ子姉妹物語』だ」

ギヤスパアの問いに答える途中に、アザゼルが割つて入る様に答えた。

「アザゼル、人が答えてる最中に言うなよ」

「悪い悪い。つてか、随分と思ひ切つた作品を考えたな。セラフオールと対抗でもする気か？」

「別にそんな気は無い。以前にリアス達を幼児化した時に、こんな作品はどうだろうかと考案しただけだ。つて、そんな事はどうでもいい。問題は何で『魔女っ子姉妹物語』が採用されたかだ」

アレは二人の少女（モデルはミニリアスとミニソーナ）が魔女っ子になって、弱い悪の魔法生物から大好きな家族を守ろうとするだけの拙い内容だつてのに。

サーゼクスやセラフオールだつたら絶対に採用するだろうが、冥界側のテレビ局はすぐに認めない。

イツセー主演の『ファイタードラゴン』は、イツセーがレーティンゲームで子供達に大注目されていたから採用された。なので、次の作品を投稿したところでソレが必ず人気になるとは限らないから。

「ああ、それな。テレビ局のプロデューサーが、ホームドラマ的な番組を考案してたところ、偶然にリユースーが投稿した作品内容を見た途端に即効で採用したそうだ」

「本当に凄い偶然だな」

プロデューサーが偶然目にした途端に採用つて………どんだけの確立だよ。そんな展開は全然考えもしなかつたぞ。

「で、だ。これにはプロデューサーからちよつとした条件があつてな」
「どんな条件だ？」

「モデルにした小さいリアスとソーナを出演させるようリユースーに説得して欲しいんだと。あとそれを聞きつけたサーゼクスとセラフォルも二人の家族として出演させて欲しいときた」

「アイツ等も一枚噛んでるのか！」

道理で動きが早い訳だ。サーゼクスとセラフォルの事だから、この前に送ったミニリアスとミニソーナの写真を見て、今度は実物も見なくなつたんだらう。

アイツ等の事だから、可能な限りで魔王の権限を使ったと思う。そうでなきや、こんなに早く作品の採用なんかされはしない。

と言うかセラフォル、お前それで良いのか？ 悪ノリとは言え、俺はお前の主演番組を基にして考案したんだぞ。

「因みにリアスとソーナ以外の出演予定者はいないのか？」

「一応候補は出てるみたいだが、魔王さま達からの熱い要望があつてな」

「つまり、アイツ等以外は認めないって事か」

「そう言うことだ」

「つたく、あのシスコン共め。自分達が頼めないからつて俺に丸投げするなよ。」

「……………まあ良いだろう。魔王二人が動いている以上、作品が採用されたならやるしかない。」

「……………はあつ、分かつたよ。後で俺の方からリアスとソーナに掛け合つてみる」

「おう、頼むぜ」

「そんじやギヤスパ、待たせて悪かつたな。修行を再開しようか」

「は、はい！ お願ひします！」

了承した俺はギヤスパの修行を再開しようと、アザゼルから少し離れて始める事にした。

因みにイツセーと裕斗は――

「はははは！ やつぱりすげえじゃねえか、祐斗！」

「それは嬉しい台詞だよ、イツセーくん！」

互いに禁^{バランス・ブレイカー}手となつて、両者負けじと互角の戦いを繰り広げていた。それでも祐斗が少し押されているが。

ふむ。やはりイツセーにとつて、祐斗は丁度良い相手のようだ。ゼノヴィアも祐斗と同じく力を付けてるから、今度はイツセーと彼女を戦わせてみるでしょう。

ギヤスパアの修行をしながら、俺はイツセーの修行プランを考えていた。

後日、リアスとソーナに番組出演の交渉をするも――

「冗談じゃないわ！ どうして私がそんな恥ずかしい番組に出演しなければならぬの!?!」

「お断りします。お姉さま関連の番組に出演する気は毛頭ありませんので」

言うまでもなく速攻で断られた。

「まあまあそう言うなって、お二人さん。魔法少女と言っても――」

断られてもそう簡単に引かない俺は、あの手この手を使って必死に彼女達との交渉を続ける。

そして何とか交渉した結果、リアスとソーナは渋々と引き受けてくれた。大して人気が出なかつたら速攻で番組を降りると言う条件付きで。

俺も俺で、そこまで人気が出る番組じゃないと予想していたので、彼女達の条件を受け入れた。

だがしかし、俺やリアスとソーナはこの時に全く想像すらしなかつた。『魔女っ子姉妹物語』が、『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』と並ぶ人気作品になってしまう事を。

第八話

オーデインが来日して数日経ったある日の夜。

八本脚のある巨大な軍馬——スレイプニルの馬車に俺やグレモリー眷族、アザゼル、オーデイン、フレイヤ、ロスヴァイセが乗っていた。

現在は空を飛んでおり、広い夜空を移動中だ。

外には護衛として祐斗、ゼノヴィア、イリナ、そしてバラキエルが空を飛んでついてきていた。テロリストなどの襲撃者をいつでも迎撃出来るように。

「日本のヤマトナデシコはいいのお。ゲイシャガール最高じゃわい」

オーデインが満足げな表情で笑っていた。

更には——

「ねえねえリユースー、私は貴方のお部屋で二人つきりで過ごしたい。だからもう家に戻ろうよ」

フレイヤがずつと俺の腕に引っ付いて恋人みたいに甘えていた。

オーデインとフレイヤに言わせてくれ。お前等もういい加減にしろ！

と言うか、護衛として同行してる俺達の身にもなれ！ いくら日本の神々と会談をやる前だからって、キャバクラや遊園地に行ったり、寿司屋に行ったりと好き勝手やり過ぎだ。フレイヤはフレイヤで密かに俺をラブホテルに連れて行くこうとしてたし。

因みに俺達は未成年、高校生と言う事もあつて、場所によっては店内に入れず、入り口付近の待合室で待機してる事も多かった。

端から見てオーデインはエロ爺、フレイヤは色ボケ女だよ。これがかの有名な北欧の神々だと到底思えないだろう。

俺だけでなく、グレモリー眷族も全員疲れた表情だ。アーシアもイツセーの肩に頭を寄せて眠っちゃってるし。正直言って今すぐ彼女を家に連れてベッドで寝かせてあげたいよ。

朱乃は……心ここにあらずだな。話しかけるなつてオーラが全身から放ってるよ。ああなつてるのは言うまでもなく、バラキエルが

俺達と同行してるからだ。

フレイヤはともかく、問題はオーデインの相手だ。未成年お断りの店に入れない事で憎悪の念を抱いてるイツセーが怒ると、「耳が遠いから聞こえんぞい」とか「アザゼルさんや、おっぱいはまだかい？」とボケ老人みたいに惚けている。

本当なら懲らしめたいところだが、オーデインは大事な客である為に手が出せなかった。加えて会談を控えてる身だから、俺達の所為で台無しにする訳にはいかない。

なので、俺は会談後に実行する事にした。「帰国前にオトメ達がたくさんいる店に連れてつてあげます」と俺が言うと、オーデインは何の疑いもなく「それは楽しみじゃ」とニヤけながら了承してくれた。その返答を聞いて俺はほくそ笑みながら、その店にいる店主に連絡した。豪華プランの予約をする為に。因みに俺の近くで聞いていたイツセーは密かに、「爺さん、生きろよ……！」とオーデインに向けて合掌していた。

絶対に抗議してくると思うが、俺は一切嘘を吐いていないと惚けるつもりでいる。漢女達オトメがいる店を紹介しただけだと。

「オーデインさまにフレイヤさま！ もうすぐ日本の神々との会談なので、旅行気分はそろそろお収め下さい。このままでは、帰国した時に他の方々から怒られます」

ロスヴァイセはこの数日、必死に我慢しつつもクールに対処していた。けれどももう限界のようで、額に青筋を立ててぶちギレ寸前だ。

「まったく、おまえは遊び心の分からない女じゃな。もう少しリラックスしたらどうじゃ？ そんなだから新しい男が出来んのじゃよ」

「そうよそうよ。もう少し柔軟になりなさいよ。言っておくけど、リユースーはもう私のだから寄りを戻そうなんてしないでね」

「か、か、彼氏は関係無いでしょう！ す、好きで独り身やっっているわけじゃないんですからああ！ それにフレイヤ様はいつからリユースーさんの彼女気取りなんですかあああつ！ もういい加減に離れてくださいあい！」

ありやりや、また涙目になっちまった。つてか、俺に引っ付いてる

フレイヤを引きはがそうとしてるし。もう本当に面倒くさいわ、北欧勢は。そろそろ本気で帰りたくなって来たよ。

ガツクンツ！ ヒヒイイイイインツ！

そう思った直後、移動中の馬車が突然停まり、急停止の衝撃波が俺達を襲った。

不意の出来事によって、全員が態勢を崩していた。

「なあ兄貴、これってもうお決まりのアレだよな？」

「ああ、そうだな。碌でもない事が起こるパターンだ」

全員が慌てている中、俺たち兄弟は冷静に会話をしている。修行の旅で、こう言うのはよくあったからもう慣れてる。

スレイプニルの鳴き声を聞く限り、何か遭ったと言う事だ。

俺たち兄弟は顔を見合わせて頷いた後、速攻で馬車から出て飛翔する。外ではバラキエルを中心に裕斗とゼノヴィアとイリナがそれぞれ展開し、戦闘態勢になっていた。

因みにイツセーは悪魔になっているから、翼を出して空を飛ぶ事が出来る。が、既に人間の頃から飛翔術を使えるので翼は大して意味は無い。

外に出た俺とイツセーはいつでも迎撃出来るよう、用心の為にオーラをいつでも開放出来る状態にしていた。イツセーもその気になれば、バランス・ブレイカー禁手手になれる。

そして前方には男性らしき者が浮遊している。少々目つきが悪い端正な顔立ちをした奴だ。オーデインの正装と似た黒いローブを身に纏っている。

男性を確認した俺とイツセーは目を見開いた。何故なら目の前に奴は知っている奴だからだ。

こちらの反応を見た男性はマントをバツと広げると、口の端を吊り上げて高らかに喋り出す。

「はっじめまして、諸君！ そしてひっさしぶり、聖書の神に赤龍帝！

我こそは北欧の悪神！ ロキだ！」

男性——ロキの自己紹介に誰もが目元を引き攣らせている。

俺達の後から出てきたアザゼルが黒い翼を羽ばたかせ、俺の近くで

浮遊する。

「本当に久しぶりだな、ロキ。この前に俺とイツセーがヴァルハラへ訪れた以来だな。それで、一体何の御用かな？」

「ロキ殿、この馬車にはそちらの主神であるオーデイン殿が乗られている。それを承知の上での行動だろうか？」

俺とアザゼルが冷静に問いかけると、ロキは腕を組みながら口を開いた。

「いやなに、我等が主神殿や女神が、我等が神話体系を抜け出て、我等以外の神話体系に接触していくのが実に耐えがたい苦痛でね。我慢出来ずに邪魔をしに来たのだ。もうついでに、この町は以前我等の領域ヴァルハラに土足で踏み込んだ身の程知らずな兄弟の故郷なので、私の傷付いた心を癒す為の復讐を兼ねて来たのだよ」

悪意全開の宣言に加え、俺たち兄弟に対する復讐と言う名の仕返しだった。相変わらずな物言いだな。

それを聞いたアザゼルと俺は口調を変える。

「堂々と言ってくれるじゃねえか、ロキ」

「何が復讐だよ。俺たち兄弟と会って早々に自分勝手な言いがかりで喧嘩を吹っ掛けたのはお前じゃないか、ロキ。あの後にオーデイン殿に絞られたついでに、全然懲りてないようだな」

平和な日常が好きなアザゼルや俺にとって、それを乱そうとする奴は大嫌いだ。目の前で堂々と宣言したロキが特に。

アザゼルと俺の台詞を聞いて、ロキは楽しそうに笑う。

「それに自分の発言が矛盾してるって事に気付いてないのか？ お前だって今こうして他の神話体系に接触してるだろうが」

「他の神話体系を滅ぼすのならば良いのだ。和平をするのが納得出来ないのだよ。我々の領域に土足で踏み込み、そこへ聖書を広げた元凶

——聖書の神が特になー！」

「……そんな大昔の話を引っ張り出されても困るんだがな」

人間に転生した聖書の神はもう無関係、とは言わない。だからと言って、今の聖書の神ではもう、どうする事も出来ないのが現状だ。

「更に許しがたい事に聖書の神はあろう事か、人間に転生して兵藤隆

誠と言う名で赤龍帝を連れて、再びヴァルハラへ赴いた！ 貴様の所為で我等の主神殿が、こうして他の神話体系と接触してしまったのだからな！」

「何か人を元凶扱いみたいに言ってるな。ってか、例えオーデイン殿が聖書の神と会わなかった所で、どっちみち他の神々と交流する予定だったぞ。三大勢力が和平を結んだのを好機としてな」

「だとしても貴様が一番の切っ掛けである事に変わりはあるまい、聖書の神。そして主神オーディン自らが極東の神々と和議をするのも問題だ。これでは我等が迎えるべき『神々の黄昏』が成就出来ないではないか」

「どうやら今でも『神々の黄昏』を起こしたい考えのようだ。三大勢力だけじゃなく、人間側からみれば物凄く傍迷惑極まりない行為だ。そんな物が起きてしまえば最後、世界が滅ぼされてしまうから。」

すると、ロキの言い分を聞いていたアザゼルは指を突きつけて訊いた。

「ひとつ訊く！ おまえのこの行動は『禍の団』と繋がっているのか？ と言ったところで、それを律儀に答える悪神さまでもないか」

訊くだけ無駄かと思うアザゼルだったが、ロキは面白くなさそうに返す。

「あの愚者たるテロリストと我が想いを一緒にされるとは不快極まらないところだ。此処へ来たのは己の意思で参上している。オーフィスの意思はない」

予想外な返答にアザゼルは体の力が抜けていた。

「どうやらロキは何処ぞの墮天使達みたいに、独断で動いているみたいだな」

「一々俺を見ながら言うんじゃねえよ、リユースー」

意味深に言う俺に、アザゼルは鬱陶しそうに言う。

さぞかし耳が痛いだろうなあ。嘗てアザゼルの部下——女墮天使レイナーレと墮天使幹部コカビエルが独断で駒王町へやって、俺達に喧嘩を吹っ掛けてきたんだからな。

「つたく、『禍の団』じゃねえのかよ。だが、これはこれでまた厄介

な問題だ」

「そうだな。んで、オーデイン殿。貴方がこの前仰つてた問題の阿呆が来たんですか？」

俺が馬車の方へ顔を向けると、オーデインがフレイヤとロスヴァイセと引き攣れて馬車から出ていた。足元に魔法陣を展開して魔法陣ごと空中を移動していく。

オーデインは当然として、さっきまで俺の腕に引っ付いていたフレイヤも真剣な顔となってロキを睨んでいる。睨む、と言うより不快と言った方が正しいか。

「すまん、リユースー。まさかロキが自ら此処へ出向くほどの阿呆とは思わなくてのお」

「ロキ、私とリユースーのデートを邪魔するなんて……随分いい度胸してるじゃない」

オーデインが俺に謝罪しながら言っていると、フレイヤはロキに向かって不機嫌な表情で言い放つ。フレイヤって良い所で邪魔されると、こんな感じで怒るんだよなあ。

「ロキさま！ これは越権行為です！ 主神やフレイヤさまに牙を向くなどと！ 許されることはありません！ しかるべき公正な場で異を唱えるべきです！」

ロスヴァイセは瞬時にスーツ姿から鎧に変わり、ロキに物申ししていた。

だが、肝心のロキは聞く耳を持たないようだ。

「たかが一介の戦乙女ごときが我が邪魔をしないでくれたまえ。我はオーデインとフレイヤに訊いているのだ。まだこのような北歐神話を超えた行いを続けるおつもりなのか？ そして人間に転生した聖書の神と、転生悪魔になった元人間の赤龍帝とも交流を続けると？」

返答を迫られたオーデインは平然と答えた。

「そうじゃよ。少なくともお主よりもサーゼクスやアザゼルと話していた方が万倍も楽しいわい。聖書の神や赤龍帝との交流も含めてな。それに日本の神道を知りたくての。あちらもこちらのユグドラシルに興味を持ったようだな。和議を果たしたらお互いの大使を招いて、

異文化交流しようと思っただけじゃよ」

「私もオーデインと一緒よ。それに鎖国同然だったヴァルハラ我的生活に飽き飽きしてたの。ロキだって知ってたでしょ？ 私がずっと退屈な日々を送っていた事を。そんな時に日本からやってきたリユースーやイツセーくんとの出会いがなければ、私はずっとあのまま生きる屍も同然だった。だから、私はもう元の退屈極まりない生活に戻る気なんか無いわ。ロキが起こしたがつてる『神々の黄昏』なんて以ての外よ」

それを聞いたロキは苦笑した。

「……認識した。なんと愚か極まりないことか。——ならば元凶の聖書の神を殺し、ここで黄昏を行おうではないか」

その直後、ロキの全身から凄まじい程の敵意を丸出しにした。そして俺に対する殺意も含めて。

「それは、三大勢力や聖書の神に対する交戦の宣言と受け取っていいんだな？」

俺が最後の確認をしても、ロキは不敵に笑むだけだ。

「当然だ。特に聖書の神、貴様だけは絶対に我が手で殺してやる」

「……そうか、なら——」

ドガアアアアアアンツ！

俺が言ってる最中、ロキに凄まじい波動が襲い掛かった。

第九話

「おいおい。いきなり何をやってるんだよ、ゼノヴィア」

俺が少々呆れながら、デュランダルを振るったゼノヴィアへ向けながら言った。今も聖剣から大質量のオーラが立ち上っている。

「申し訳ありません。主……ではなく隆誠先輩を元凶扱いする暴言に我慢出来なく攻撃しました」

そう言い放つゼノヴィアに思わず苦笑する俺。

……まあ良いか。どの道、ロキと戦う事に変わりはないからな。それ——

「やはり、私の攻撃は効かないな。流星は北欧の神か」

ロキがアレくらいでやられる奴じゃないのは既に知っている。

ゼノヴィアの言う通り、攻撃を受けた筈のロキは何事もなかったように空に浮いていた。しかもダメージすら受けていない。

「聖剣か。確かにいい威力だが、神を相手にするにはまだまだ。そよ風に等しい」

ノーダメージ姿のロキを見た祐斗は聖魔剣を創り出し、イリナも光の剣を手に発生させていた。

「ふははっ！ 無駄だ！ その聖書の神と違って我は純粋な神なのでね、たかが悪魔や天使の攻撃ではな」

ロキが左手を前にゆっくりと突き出す。

その手からプレッシャーだけでなく、光り輝く粒子が集まろうとしている。圧倒的な力を圧縮された塊となつて。

「やらせるかよっ！」

『Welsh Dragon Barance Breaker!!!』

突然イツセーが気合の入った声を出した途端、ドライグの機械的な声も聞こえた。

その直後にはイツセーの体を赤い闘気が包み込み、髪が逆立って真紅に染まっていく。

僅かな時間だけで禁手となり、そのまま超スピードでロキ目掛けて突進する。

だが、それでも十分に凄い事だ。ロキはゼノヴィアの聖剣を受けても無傷だったのに対し、イツセーのドラゴン波では傷を負わせている。神を相手に傷を負わせるのは即ち、勝てる可能性があると言う事だ。尤も、あくまで可能性に過ぎないので、必ず勝てるという訳ではないがな。

そしてリアスや朱乃達も翼を広げて馬車から出てきた。特にリアスは滅びの爆裂弾ルイン・ザ・バーストボムをいつでも撃てるように、凄まじい程の紅いオーラを纏っている。ロキと対峙している者は全て臨戦態勢だ。

「その紅いオーラに紅い髪。グレモリー家……だったか？ 確か現魔王の血筋だったな。堕天使幹部が二人、天使が一匹、悪魔がたくさん、赤龍帝と聖書の神も付属。オーデインにフレイヤ、ただの護衛にしては嚴重だ」

「お主のような大馬鹿者が来たんじゃ。結果的に正解だったわい」
「それでロキ、この後どうするつもりなのかしら？ いくら貴方でも、これだけの人数をたった一人で勝てると思うほどバカじゃないわよね？」

オーデインとフレイヤの台詞にロキはうんうん頷き、不敵な笑みを一層深めた。

「確かに貴女の仰る通りだ。ならばここは援軍を呼ぶとしよう」

そう言って、マントを広げて高らかに叫ぶ。

「出てこいッ！ 我が愛しき息子よッッ！ そして、女神フレイヤの英雄よッッ！」

「ッ!？」

ロキの叫びに一拍空け、宙に歪みが生じる。フレイヤが聞き捨てならなかったのか、目を見開いている。

又ウツと空間のゆがみから姿を現したのは——灰色の狼と男だった。

十メートルはある巨大な灰色の狼に俺、と言うより聖書の神には見えがかった。

狼はこちらを見た瞬間、グレモリー眷族たち全員が全身を強張らせて震えていた。イツセーですら狼を見た瞬間に震えながらも警戒し

ている。

威嚇でもないのに、ただ視線だけでコイツ等を射抜くとは相変わらずだな。

無論、リアス達だけじゃない。俺とアザゼルですらも、奴の登場に緊張している。

「お、おい兄貴、あの狼つてまさか……!?!」

狼を警戒してか、イツセーはすぐに距離を取り、俺の隣に浮遊しながら確認してきた。

「ああ、あれは——神喰狼だ。しかも聖書の神を殺せる危険な魔物でもある」

俺の台詞に全員驚愕し、同時に納得していた。

「フェンリル！ まさか、こんなところに！」

「……確かにマズいわね」

フェンリルの危険性を理解してるのか、祐斗やリアスは完全な警戒態勢になっていた。

「イツセー。以前にも教えたが、アレは最悪最大の魔物の一匹だ。そして聖書の神や他の神々をも確実に殺せる牙を持っている。もし噛まれたりしたら、その強固な闘気を簡単に貫くから注意しろ」

「わあーってるよ。赤龍帝や聖書の神にとって最悪な相手だって事はもう理解してる」

更に警戒を高めるイツセーに、ロキがフェンリルを撫でながら言う。

「そうそう。気を付けたまえ。こいつは我が開発した魔物のなかでトップクラスに最悪の部類だ。何せ、こいつの牙はどの神でも殺せるって代物なのでね。試したことはないが、その聖書の神や他の神話体系の神仏でも有効だろう。上級悪魔でも伝説のドラゴンでも余裕で致命傷を与えられる。おっと、忘れるところだった。そこにいる奴も一応紹介しておこう」

フェンリルについて説明したロキは、次に現れた筋肉質の美丈夫を指す。

「コイツの名はオツタルと言ってな。嘗てフレイヤが多くの男妾を

抱えた中で最も愛した人間の男だ。以前まで魂だけの存在だったが、今は我が用意した仮初の肉体を与え、こうして復活した。どうかな、フレイヤ。貴女が嘗て愛した男と再会した気分は？」

まるで反応を楽しむように問うロキ。アイツは自分がとんでもない事を仕出かした事を分かってながらも訊いているな。本当に性格の悪い奴だ。

フレイヤは北欧の女神として、オーディンやロキに並ぶほどの有名な存在だ。伝承の中に、美と愛の女神としても知れ渡っている。

美と愛の女神などと聞こえは良いが、実際は色恋沙汰が絶えない問題だらけな女神だ。人間側から見れば『色ボケ女』と呼べる。嘗てのフレイヤは正にソレだった。

しかし、今のフレイヤはもう恋愛に興味を失って退屈な日々を送り続けていた。人間に転生した聖書の神と出会って再び恋愛に走るまでは。

「……………一応確認させて。ロキ、貴方がオツタルを連れて来ていると言う事は…………私の部屋に忍び込んだのかしら？」

「ああ、貴女がオーディンと一緒に冥界へ行ってる時にこっそり拝借させてもらったよ。帰ってきてても全然気付かなかったのは、それだけ聖書の神に夢中だったようだね」

フレイヤからの問いに、ロキは何の悪びれもせずにあっさりと答える。

その瞬間——フレイヤの全身から凄まじい殺気が放たれた。しかも怖い笑みを浮かべながら。イツセーやリアス達なんか、フェンリルとは違う意味でフレイヤに恐怖している。

「ふ、ふふ、ふふふふふふ……………随分と良い度胸してるじゃないのお、ロキい。私の大事なものを盗むなんて…………覚悟は出来てるわよね？」

「落ち着かんか、フレイヤ。逸る気持ちは分かるが、今は迂闊に動くでない。ロキの傍にはフェンリルがおるんじゃぞ」

今にも突撃しそうなフレイヤをオーディンが抑えようとしていた。非力そうに見えるが、外見とは裏腹に途轍もない力を持っている。

それはロキにも引けを取らないほどの力だ。

フレイヤの伝承には戦闘に関するものもあつた。途轍もない破壊の力を秘めており、世界に影響を及ぼしかねないほどだ。下手をすれば、ロキが望む『神々の黄昏』を引き起こす可能性だってある。

オーデインはそれを危惧してるから、早まった行動をさせないように宥めている。俺としても、ここでフレイヤに力を開放して欲しくない。

どうでも良いんだが、オツタルが現れてからずっと俺を凝視してる。一体どういうつもりだ？

「ロキよ、何故にそやつを手駒として連れてきたのじゃ？ お主には自慢の息子共がおるんじやから必要無いだろうに」

「確かに我も最初はそんなつもりなど毛頭無かつた。だが、この男から叶えたい願ひがあるからと懇願されてな。我はその願ひに応えてやったのだ」

「願ひじゃと？」

「そう。それはそこにいる——聖書の神だ」

「……………は？ 俺？」

いきなりの名指しに俺だけでなく、オーデイン達も不可解な表情をする。

ちよつと待て。俺はオツタルとの面識なんか無いぞ。当時の聖書の神は勿論のこと、転生した兵藤隆誠とも会ってなんかいない。全くの初対面だぞ。なのに何でオツタルが俺に用があるんだよ。

「この男は魂となつて保管されても、フレイヤに眺められているだけで満足な日々を送り続けていた。だが……そのフレイヤが急に見向きもされなくなった事に不安を抱いてな。それを我がコイツに理由を教えた途端、凄まじい憎悪と怨念が混じる色と変わり果てた。余りの事に流石の我も驚いたよ。愛する女との時間を奪われた嫉妬のみで変貌するとはな。余りにも滑稽だったが、笑わせてくれた褒美として願ひをかなえてやる事にしたのだよ。オツタルが聖書の神を殺す為に必要な仮の肉体を」

ロキの長つたらしい説明を聞いた俺は辟易してきた。オツタルの

ドゴンツ！

リアスの眼前に現れて神速で襲い掛かるフェンリルに、イツセーがフェンリルの横顔を思いつき殴り飛ばしていた。

多分イツセーの事だから、自分が物凄く恥ずかしい事を言ってる事に気付いてないだろうな。リアスは大事な女と聞いた瞬間、不謹慎ながらも顔を赤らめているし。

「イツセー……」

顔を赤らめているリアスはイツセーを見る。

「大丈夫ですか、部長？ ケガは？」

「い、いえ、だいじょうぶよ。イツセーが助けてくれたから」

その言葉を聞いたイツセーが安堵して息を吐いている。

「イツセー、リアスが狙われたからって焦り過ぎだ」

「わ、悪い、兄貴……」

俺の指摘にイツセーが申し訳なさそうに謝ってくる。

「取り敢えず、お前はリアスと一緒に下がってろ。もうついでに、咄嗟に躲したその傷をアーシアに治してもらえ」

「くっ……やっぱり分かってたか……」

すると、イツセーは急に腹部を手で押さえた。そこからはドクドクと血が流れ始めている。

「イツセー……」

「イツセーくん！」

リアスと朱乃が悲鳴のような声をあげていた。

イツセーが傷を負った原因は分かっている。そうなのはフェンリルがやったからだ。

その証拠に、フェンリルの左前足の爪先から血が付着している。奴はイツセーの攻撃を受けた後、咄嗟に爪を振るっていた。それに気付いたイツセーは何とか躲して致命傷を避けたが、それでも決して浅くはなかった。

だが、問題はそこじゃない。イツセーが禁^{バランス・ブレイカー}手となつて強固な

闘気を纏っている筈なのに、それを簡単に斬り裂いた。フェンリルの攻撃力は知ってはいたが、本当に途轍もないな。

イツセーは致命傷を避けて何とか浮遊しているも、あの出血を抑えなければ不味い。

「アーシア！ 早くイツセーの治療を頼む！」

「はい！ イツセーさん！ 早く！」

馬車で待機してる回復役のアーシアが涙交じりで叫んだ。

本当だったら俺も一緒に治療したいところだが――

ガギインツ！

「ちいつ！ お前に構ってる暇はないんだよ！」

「聖書の神、殺す……」

アーシアに指示した直後、オツタルが突進して仕掛けてきたから無理だった。オツタルの大剣を防ごうと、咄嗟に収納用異空間から槍――ホーリーランス聖槍を取り出している。

リアス達から馬車から少し離れると、奴は俺だけにしか興味がないように追撃してくる。

ってかオツタルが使ってる大剣……よく見ると『魔剣レヴァンティン』じゃないか！ ロキの奴、オツタルにとんでもない武器を持たせやがって！

オーデインから聞いた話だと、『魔剣レヴァンティン』は自身が抱いてる憎しみを糧にして威力が増す。その代償として、徐々に思考がまともに判断出来なくなる狂戦士バーサーカーと化してしまう。自身の意思で剣を手放さない限り。

だが、ロキから肉体を与えられているオツタルには関係無い。コイツは元から俺を殺す事だけしか考えてないので、代償なんか関係なく剣を振るい続ける。ハッキリ言ってラディガンより厄介な相手だ。

「ほう。我が貸し与えた武器をあそこまで使うとは、流星は嘗てフレイヤの英雄をやっていただけの事はあるな。これは予想外な展開だ」
オツタルの猛攻を見たロキが感心する様に言い放つ。

「今のところ聖書の神が防戦一方だから、この隙に赤龍帝を始末しておこうか。我に傷を負わせ、剩えフェンリルの動きに追いつくほどの実力を身に付けた以上、見過ごす事は出来ん」

あの野郎、やっぱリイツセーを警戒し始めていたか！

すぐに駆け付けたいが、オツタルの奴が思っていた以上に厄介で行けないし！

「ロキイイイイイツ！」

アザゼルとバラキエルが光の槍と雷光をロキ目掛けて大出力で放った。

「ふんっ。フェンリルを使わずとも、墮天使二人程度では私の相手は無理だ」

墮天使勢の最強格二人が放った攻撃を、ロキは北欧の術で魔法陣の盾を展開して容易に防いだ。

それを見たロスヴァイセが加勢しようと攻撃魔術を放ったが、ロキの防御魔法陣が上な為に通用しなかった。

アザゼル達を攻撃を防ぎながらも、ロキはイツセー達に狙いを定めている。更にはフェンリルも一緒に。

「いい加減にしろ、オツタル！ 貴様はロキの都合の良い操り人形にされてる事に気付いてないのか!？」

「……殺す、聖書の神。フレイヤ様を誑かした貴様を殺す……」

「くっ！ どうかやら既にまともな思考じゃないようだな……!」

今のオツタルは俺を殺す事だけしか考えていない人形同然みたいだ。恐らくロキは与えた肉体に、従順に動く為の細工を施したに違いない。

フレイヤには悪いが、コイツを――

『Half Dimension!』

グババババンツ！

すると、聞いた事のある声と音がした。

リアス達に襲い掛かろうとしていたフェンリルを中心に空間が大

きく歪んでいくのが見えた。フェンリル自身も空間の歪みにその身を捕らわれて、動きが封じられている。

そして――

「ダーリンにしては珍しいじゃない。こんな相手に梃子摺るなんて」

ドドドドドドオンッ！

「ッ！」

こちらでも聞き覚えのある声が出た直後、オツタルの背中に強烈な魔力弾が当たった。それを受けているオツタルは少しばかり顔を歪めている。

不利だと悟ったのか、一旦俺達から離れようと距離を取った。

俺とオツタルの間に一人の女性悪魔が降りてくる。

「はあい、ダーリン。久しぶりね♪」

「エリー……」

俺の目の前に現れたのは夢魔のエリーだった。嘗て冥界の元アルスランド家の次期当主――エリガン・アルスランド。

……まさかこの女が俺を助けるとはな。

リアス達の方を見ると、そこには予想通りと言うべきか、イツセーのライバルである白龍皇ヴァーリがいた。

ヴァーリ達の予想外な登場にロキが嬉々として笑むも、流石に不利だと思ったのか一時撤退をした。空間転移術でフェンリルとオツタルも一緒に。

第十話

「それで、一体どう言うつもりで俺達の前に現れたんだ？」

ロキ達の撤退を確認後、アーシアと小猫にイツセーの治療をするよう馬車の中へ移動させた。

その間に俺達は場所を変えようと、助太刀してくれた者達を連れて地上へ降りていた。今は駒王学園近くにある公園にいる。言うまでもなく一般人達が来ないよう、人除けの術は施し済みだ。

俺が問うと、白龍皇——ヴァーリは嘆息しながら苦笑する。

「随分な言い草じゃないか、聖書の神。そちらが不利な状況だったから助太刀したと言うのに」

「ああ、そこは大変感謝しているよ。本当だったら俺が個人的な礼をしたいところだ。けど生憎、今の俺は聖書の神としてアザゼル達と一緒にオーデイン殿やフレイヤの護衛をしているんだ。だから今はお前達を『禍カオスの団ブリゲード』に所属しているテロリスト共と見ざるを得ないんだ。それに——」

ヴァーリに今の俺は聖書の神が三大勢力の助っ人として動いている事を言いながら、チラリと視線を横に移す。その先には、ニツコリと笑みを浮かべているエリーがいる。

「君が何故か同行しているエリーの事もあって、思わず碌でもない事を企んでいるんじゃないかと思っただけ」

「ひどくいい。ダーリンが私をそんな風に見てたなんてショックだわ」

「何がショックだ、白々しい。今まで俺達の前に現れて碌な事しなかっただろうが」

ショックを受けたジェスチャーをするエリーに俺はバツサリと切り捨てるように言い放つ。

リアスたちグレモリー眷族も同感だと頷いているのか、揃ってエリーを殺気を出しながら睨んでいる。嘗てコカビエルと一緒に現れて俺達と敵対し、更にはアーシアを攫ったディオドラの手助けをした件があるから、エリーに対する警戒感が半端ない。

「エリガン・アルスランド。白龍皇と一緒にいるとは言え、よくも私たちの前に姿を現わせたわね」

「あら？ 随分と強気な発言ね、リアス・グレモリー。やっとイツセーくんを正式な眷族に出来たからって増長してるの？ 多少強くなつたところで、今も私の相手にすらならないと言うのに」

「ツー」

挑発するエリーに、リアスの身体から凄まじい魔力を放出しようとしている。下手をすればエリーに滅びの力をぶつける勢いだ。

リアスは短気な性格だが、エリーの言い方が問題だ。アイツは態と煽ってリアスの反応を楽しんでいる。

「止める、リアス。コイツはこういう女だって事を知ってる筈だろ？」

「……くっ」

「エリガン、向こうを刺激する発言は止めてもらおうか。俺達と同行してる間は指示に従う条件の筈だ」

「は〜い」

俺はリアスを宥め、ヴァーリがエリーを宥めた。

と言うかエリーの奴、今はヴァーリ側に付いているのか。てつきり、もう『禍カオス・ブリゲードの団』から抜けたと思っただが。

これは先日サーゼクスから聞いた話だが、どうやらエリーは死んだディオドラ・アスタロトの用心棒として雇われただけじゃなく、旧魔王派のシャルバ達とも繋がっていたらしい。嘗てアルスランド家はあの連中と懇意な関係だったと。恐らくエリーはその事もあって、シャルバ達に従わざるを得なかつたんだろう。

しかし、その旧魔王派は既に瓦解した。なので既にお役御免となつたエリーは『禍カオス・ブリゲードの団』と縁を切つたと思っていた。そして何れ一人で俺の前に姿を現わして戦いを挑もうと。

だと思っていたんだが、それが今も『禍カオス・ブリゲードの団』に残つてヴァーリ達と同行しているとはなあ。どういふつもりなのかは分からんが、何か理由がある筈だ。まあ、俺が問い詰めたところで教えないと思うがな。アイツは俺に嘘は言わないが、答えたくない事は秘密にしたがるし。

「まずは確認させてもらおうか、エリー。今回ヴァーリと一緒に来てまで俺達の前に現れたのは、何か良からぬ目的があるからか？」

「いいえ。私は久しぶりに愛しのダーリンと再会する為に、ヴァーリくん達に付いてきただけよ。今回は裏事情なんか一切無く、私個人の意思で動いているわ。信用出来ないなら、私の頭の中を探っても良いわ。勿論、そうしていいのはダーリンだけよ」

「あつそ。じゃあ俺達が今敵対しているロキとは密かな取引とかしてないだろうか？」

「そんな下らない事は一切してないと断言するわ」

「……………はあつ。分かった、信じよう」

「ちよつとリユースー、たったそれだけの質問だけで信じるの!？」

嘘を言っていないと判断した俺が信じた事に、リアスは正気なのかと問い詰める。

「コイツは普段から秘密主義な女だが、俺に一切嘘は言わん。過去に何度も戦った事はあるが、少なくとも俺を騙して陥れるような手段を取らないのは確かだ」

尤も、それは俺相手に限った話だがと付け加えた。

不本意だが、エリーは俺に（一方的な）恋慕の情を抱いている。なので俺を屈服させる為に、いつも正々堂々の真つ向勝負を仕掛けてきた。自分が勝つたら何でも言う事を聞いてもらうと。

リアスは俺の言い分に納得したのか、取り敢えずと言った感じで引き下がる。

「念の為に言っておくがエリー、リアス達に下らん事をしたらどうなるか覚悟しておけよ」

「分かっているわ。彼女達に一切手を出さないから安心して。だけど……………それとは別に、どうしても許せない事があるのよね」

すると、さつきまでニコニコしていたエリーが急に殺気立った。俺の腕に引っ付いているフレイヤを見ながら。

因みにフレイヤはエリーが『愛しのダーリン』と聞いた瞬間、いきなり俺に引っ付いてきた。エリーに見せ付ける様に。

それを見たのが原因なのか、エリーはもう我慢の限界が訪れたかの

ように殺気立ったと言う訳だ。

「その貴女、確か女神フレイヤだったかしら？ どうして私のダーリンにくっ付いてるの？ さっさと離れてくれない？」

「何が私のダーリンよ。リユースーは私の恋人なんだから、こうするのは当然じゃない。そう言う貴女こそ、私のリユースーに馴れ馴れしくダーリンなんて呼ばないで欲しいわね」

殺気立つエリーにフレイヤも負けじと睨む。

あとフレイヤ、俺はお前の恋人になった覚えはないからな。お前が勝手にそう思ってるだけだ。

しかし、エリーにはとても聞き捨てならない発言だったのか、フレイヤに対する殺気をもう一段階上げている。

「ふざけた事を言うわね。あのオツタルって言う愛人や多くの男達と関係を持っていたのに、今度はダーリンと恋人だなんて……本当に伝承通りの色ボケ女神だったのね。どうせ何れダーリンに飽きて、他の男と宜しくするつもりなんでしょう？」

「男を食い物にしている夢魔風情に言われたくないわ。聞いた話だと貴女、実の兄と肉体関係だったそうじゃない。いくら悪魔だからって、それは流石に引くわ。貴女みたいな変態夢魔サキユバスなんかリユースーは相応しくないわ」

「生憎だけど、それはもう昔の話よ。今はダーリンと純愛な関係を築こうとしてるの。軽い気持ちでダーリンに手を出そうとする貴女と違ってね」

「本当に失礼な夢魔サキユバスね。私はリユースーを運命の相手と見てるから、ずっと愛するって決めてるの。不純だらけな貴女と一緒にしないで」
「あらあら、言ってくれるじゃない。色ボケ女神サキユバスの分際で……！」
「こつちだって低能な変態夢魔サキユバスに言われたくないわ……！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！ ビキビキッ！

『……………』

……………お前等、喧嘩するのは勝手だが俺を巻き込まないで

くれ。

エリーとフレイヤの凄まじい殺気と怒気の所為で、周囲に張られている結界が罅割れようとしている。

二人からの巻き添えを喰らいたくないのか、アザゼルやオーティンにグレモリー眷族、そしてヴァーリ達がいつの間にか避難している。アイツ等、完全に俺を助ける気は無いようだ。薄情な奴等め。

すると、馬車の中から治療を終えたであろうイツセーが出てきた。

「……………え？ 何、この超重くて息苦しい空間は？」

事情を呑み込めていないイツセーは思わずそう呟く。しかし、俺の方を見た途端に納得して、声を掛けようとせずアザゼル達の方へと行っていた。

おいこらイツセー！ 無視してないで助ける！ 何でこう言う時だけ空気読んで逃げるんだ!?

そしてアザゼル達はエリーとフレイヤを俺に任せようとしたのか、向こうで話を勧めようとしていた。俺が抗議の視線を送るも、完全無視だよ。

俺が女二人の争いに巻き込まれてる中、ヴァーリはこう提案していた。

「今回の一戦、俺は兵藤一誠と共に戦つてもいい。あんな神如きに俺のライバルを横取りされては我慢ならんからな」

ロキと戦う為に自分達と手を組もうと。ヴァーリ達を除く、この場にいる全員が驚愕したのは言うまでもなかった。

……………どうでもいいけどさあ、俺を挟んで言い争っているエリーとフレイヤをどうにかしてくれないか？

第十一話

翌日、兵藤家の地下一階の大広間に全員集まっていた。

俺やグレモリー眷族にイリナ、アザゼル、バラキエル、シトリー眷族に……そして、ヴァーリチーム＋エリーと言う異様な面々が揃っている。

ヴァーリや美猴がいるのは別に良いんだが、問題はエリーだ。共闘するとは言え、正直色々と複雑な気分だよ。リアスも彼等やエリーの同席に最後まで反対していたが、俺やアザゼル、更にサーゼクスの意見を聞いて渋々承諾する事となった。

因みにエリーに関して俺が責任持つて対応する事となっている。もしも裏切り行為が発覚した瞬間、俺とイツセーが全力で倒す手筈だ。イツセーは領き、エリーも了承している。加えて、ヴァーリ達もエリーの事を完全に信用はしてないみたいで、もしもの時は自分達も対処すると言ってきた。

俺に惚れている事もあって一切嘘は吐いてないエリーだが、それでも油断は出来ない相手だ。色々な意味で、な。

まあエリーだけでなく、ヴァーリ達にも言える。ロキを屠るとか言つて共闘を持ちかけてくれたが、ライバルのイツセーを横取りされたくないと言う理由だけじゃない筈だ。何か別の目的もあると見るべきだろうな。

因みに北欧組のオーディンとロスヴァイセ、そしてフレイヤは別室で本国と連絡を取り合っている。どうやら向こうも、ロキが日本に来た事で相当大問題らしい。

ヴァルハラには他の神話体系と同盟を結ぶ事に反対する連中はいる。だが三大勢力と表立って敵対するだけの度胸はないから、オーディンは敢えて放置していた。ロキが俺達の前に姿を現わして敵対するまでは。

それはそうと、俺達はロキ対策について話し合いを始めていた。

今回の件については魔王サーゼクスも知っている。勿論、墮天使側や天界にも情報は伝達済みだ。

何としてでもオーデインの会談を成就させる為、三大勢力が協力して守る事が決定した。

協力と聞こえはいいが、協力態勢の強い此処にいるメンバーのみで力を合わせて何とかしろと言う意味だ。当然、三大勢力の助っ人である聖書の神も加わる事になっている。

早い話、ロキを俺達だけで退けろと言う事だ。

相手は人間に転生した聖書の神と違って純粹な神。だが、問題は奴が引き連れている魔物——神喰狼とフレイヤの英雄——オツタル。

フエンリルは生み出したロキを凌ぐ正真正銘の怪物。封じられる前の二天龍に匹敵するほどの力を持っているらしく、アザゼルやタンニーンでも単独では勝てない相手だ。

当然、未だ二天龍の力を完全に引き出せていない赤龍帝や白龍皇では歯が立たない。人間に転生した聖書の神も含めて。……尤も、それは能力に関しての話だが、ここでは敢えて省かせてもらう。

次にオツタルは嘗てフレイヤの英雄であり、その中でも最強の武人だったとフレイヤ本人が言っていた。聞いた話によると、オツタルは誰よりもフレイヤを深く敬愛しており、強大な魔物相手に一切怯まず戦い続けたようだ。人間の身でありながらも、神に匹敵するほどの力を持っているとか。

昨日に僅かな時間だったが、奴と手合わせした時に相当の実力者だと分かった。ロキに仮初の肉体と武器を与えられても、流石は武人と思わせるほどの力と剣筋だった。ああ言う奴とは、別の出会いで手合わせしてみたかったと思う程に。

しかし、今のアイツは俺を殺す事しか考えてないロキの操り人形だ。フレイヤを奪ったと勝手に思い込んだ逆恨みで。嘗て戦ったらデイガンと同じ理由だから嫌になるよ、本当に。

そんな厄介な存在達により、ロキとの一戦で残りのメンバーで死力を尽くせば勝てるんだが、それでも犠牲は出る。何名か戦死するのは確実だとアザゼルが真剣な顔で言う程に。……もしも本当にそうなる場合、聖書の神の命一つで何とか済ませたいがな。

だったら加勢を頼めば良いと思われるだろう。しかし、残念ながら

期待できない。しかもどの勢力からも、だ。理由は英雄派から
神セイクリッド・ギア器所有者を送り込んでくるテロ行為は未だ断続しており、各勢
力を混乱させているからだ。

その為に各重要拠点は警戒を最大にしており、戦力を避けない状態
だ。因みに天界にいるミカエルから――

『神よ、申し訳ありません……。本来であれば即座に我々が神をお守
りしなければならぬと言うのに、どうか不甲斐ない私を罰して下さい
い……！』

映像用の通信で聖書わの神を見て早々に頭を下げ、更には自分に対す
る罰を求めてきたよ。

一先ずは『全然気にしてないから』と言っておいた。アイツは天界
の長としてやるべき事をやっているから、罰しようなんて気は元から
無いので。

なので加勢が頼れない以上、出来るだけ犠牲を出さないようにして
勝つ方法を探っている。

「まず先に。ヴァーリ、お前が俺達と協力する理由はなんだ？」

ホワイトボードの前に立ったアザゼルが一番の疑問をヴァーリに
ぶつける。

俺達に協力する理由を、この場にいる誰もが気になっている事だ。

アザゼルからの問いに、ヴァーリは不敵に笑むと口を開く。

「ロキとフェンリル、そして英雄オツタルと戦ってみたいだけだ。美
猴たちも了承済みだ。あとは俺の得物ライバルを横取りされるのは我慢なら
ない。これらの理由では不服か？」

相変わらずヴァーリはイツセーに強いライバル意識を向けてるな。
それだけ以前の戦いで心に響いたと言う事か。理由を聞いたイツ
セーは少し嫌そうな顔をしているが。

それとは別に、アザゼルは怪訝そうに眉根を寄せている。

「まあ、不服だな。だが、戦力として欲しいのは確かだ。そのエリガ
ン・アルスランドも含めてな。今は英雄派のテロの影響で各勢力とも
こちらに戦力を避けない状況だ。英雄派の行動とお前らの行動が繋
がっているって見方もあるが……お前の性格上、英雄派と行動を共に

するわけないか」

「ああ、彼らとは基本的にお互い干渉しないことになっている。俺はそちらと組まなくてもロキ達と戦うつもりだ。——組まない場合は、そちらを巻き込んででも戦闘に介入する。更に聖書の神には、エリガンをぶつけさせる」

「私はダーリンと戦わせてくれるなら、全然問題無いわ♪」

……嫌な脅しだ。組むなら、俺達と共にロキを倒す。その逆なら、ロキを倒す為に俺達ごと攻撃する、か。更には（俺限定で）エリーからの妨害も含めて。

「サーゼクスも相当悩んでいる様子だったが、旧魔王たちの生き残りであるヴァーリからの申し出を無下に出来ないと言っていてな。本当に甘い魔王だが、おまえを野放しにするよりは協力してもらった方が賢明だと俺も感じている。エリガン・アルスランドに関しては、聖書の神おんがみに任せるしかないが」

「納得できないことのほうが多いけれどね」

リアスがアザゼルの意見にそう言う。文句はあるが、悪魔の王たる魔王が良しとするならば、リアスも強くは言えないからな。

ソーナもかなり不満のある表情だが、それでも了承している。特にエリーを睨んでいた。そうしているのは、アイツが以前にコカビエルと一緒に駒王学園を戦場にさせた件があるからだ。自分の愛する学園を勝手に戦場とさせた事に憤っていたし。

厄介なヴァーリやエリーが勝手に動かれるよりは、監視下に入ってもらった方が対処はしやすい。どちらも面倒な事には変わりはないが。

因みに素直なアシアはヴァーリに助けてもらった事もあって、大して疑問を持っていない様子だ。エリーに対してはディオドラの件もあって少し戸惑い気味だが。他の眷族達は彼女と違って文句ありそうだが、渋々応じている。エリーに対して少し殺気立っているが、そこも我慢してもらおう。

すると、アザゼルはヴァーリをジッと見ている。

「何か企んでいるだろうか」

「さてね」

「怪しい行動を取れば、誰でもお前を指せる事にしておけば問題ないだろうな。エリガンも含めて」

「そんな事をするつもりは毛頭無いが、かかってくるならば、ただでは刺されないさ」

「私もよ。ダーリンやイツセーくんはともかく、貴方達に殺される気なんか毛頭ないわ」

アザゼルの言葉にヴァーリは苦笑し、エリーは妖艶な笑みを浮かべて言い返す。

「……まあ、ヴァーリとエリガンに関しては一旦置いておく。さて、話はロキ対策のほうに移行する。オツタルに関しては後でフレイヤに確認するから、一先ずはロキとフェンリルの対策をとある者に訊く予定だ」

「ロキとフェンリルの対策を訊く？」

アザゼルがリアスの言葉に頷く。

「そう、あいつ等に詳しいのがいてな。そいつにご教授してもらおうさ」

「もしかして、あの惰眠ドラゴンの事か？」

俺からの質問にアザゼルは再度頷く。

「ああ。五大龍王の一匹、『スリーピング・ドラゴン終末の大龍』ミドガルズオルムだ」

やっぱりな。まあ確かにあのドラゴンなら知ってるだろう。

「まあ、順当だが、果たしてミドガルズオルムは俺達の声に応えるだろうか？」

ヴァーリの問いにアザゼルは答える。二天龍、龍王のファーブニルとブリトラ、そしてタンニーンドラゴン・ゲートの力で龍門を開き、そこからミドガルズオルムの意識だけを呼び寄せると。

確かにその方法なら、アイツと話せるかもしれない。当の本人は今も北欧の深海で眠りについてるから、以前と同じく直接会う時間なんて無いから無理だ。

聞いていた匙が戸惑うも、アザゼルは安心する様に待機しろと言っていた。その後には奴はバラキエルを連れて、大広間から出て行く。残されたオカルト研究部と生徒会。そしてヴァーリたち面々だ。

すると――

「ダーリン！」

「おわっ！」

エリーが俺に抱き着いてきた。

「い、いきなりなんだ!?! と言うか抱き着くな！ 離れろ！」

「何よ。あの女神は良くて、私はダメなの？」

何とか引っぺがすが俺だが、それでもまた抱き着いて来ようとするエリー。

いきなりの事にイツセー達はポカンとしている。

「お前、この前まで俺達と敵対してたろうが！」

「今は共闘してるんだから良いじゃない。それに……あの色ボケ女神とダーリンとの関係も聞きたくてね。どうしてあの女と恋人になつてるのかしら？」

「あれはフレイヤが勝手に言ってるだけだ。お前と同じく自分勝手な理由でな」

いきなり会って早々俺に熱烈な求愛をしてくるエリーも、フレイヤと全く同じだ。俺の事を好きになる女って、何でこんな自分勝手な性格なんだよ。

「私をあんな女と一緒にしないでよ。まあそれよりも、私をダーリンの部屋に案内して♪。そこで私とダーリンの子供を作りたいわ♪」
「どっちもやなことだ」

エリーとそんな事をする気など毛頭無いが、万が一にもそうなった場合には俺は間違いなく死ぬだろう。

知つての通り、エリーは夢魔^{サキユバス}。コイツの事だから、容赦なく俺の精根を吸い尽くす筈だ。仮に辛うじて生きていたとしても、俺はもう二度と子供を産めなくなると思う。

俺としては出来れば極普通の恋愛をして、自分が心から愛している女性と結婚して子供を作りたいと思ってる。なのでアブノーマルなエリーやフレイヤは断じてお断りだ。

「あ、あの、イツセーさん。リユセーお兄さまが……」

「良いんだ、アーシア。取り敢えずエリーの事は兄貴に任せとけ。ゼ

ノヴィアとイリナ、お前等もだぞ」

「くっ！ あの女、主である隆誠先輩にああも馴れ馴れしく……！」

「後でミカエル様に報告しておく必要があるわね……」

因みに俺とエリーのやり取りに、イツセー達は手を出さないでいた。

イツセー。前に言ったが、黙って見てないで少しは兄の俺をフォローしてくれ。もしフレイヤが戻ってきたら、また面倒な事が起きるんだからさ。

第十二話

エリーについては兄貴に任せた俺——兵藤一誠は、先生が帰って来た後に匙とヴァーリと一緒に転移魔法陣で兵藤家から飛んだ。

以前に兄貴と一緒に出会ったアイツを呼び寄せる為だ。どうやら特別に用意したところで意識を呼び寄せないとダメらしい。

着いた場所は白い空間だ。辺り一面真っ白な空間で何も無いかと思いきや、視界に入った先には大きなドラゴンが佇んでいた。

「先日以来だな、お前たち」

「タンニーンのおっさん!」

元五大龍王タンニーンのおっさんがいた。ミドガルズオルムを呼び出すのに各ドラゴンの力が必要だと言ってたから、ここにいるのは当然だ。

「…………ふむ、そちらがヴリトラか」

おっさんが匙を見る。その匙はおっさんを見た途端にビビッて全身を震わせていた。

「ド、ド、ドラゴン……龍王! 最上級悪魔の…………!」

見ただけで緊張と尊敬が混じってる様子が分かる。

「緊張し過ぎだぜ、匙。このおっさんは強面だけど、いいドラゴンなんだからよ」

「ば、バカ! 最上級悪魔のタンニーンさまだぞ! お、お、おっさんだなんて無礼にも程があるぞ!」

まあ確かに匙の言う通りだろうな。俺も最初におっさんと会った時はすぐえ緊張した。けどまあ、友好的なドラゴンだって分かっているから、畏まる事も無く普通に接してる。

すると、匙が俺に指を突きつけて説明しようとする。最上級悪魔について云々と。

冥界でも選ばれた者しかならず、更にはレーティングゲームの現トップ10内のランカーが全員最上級悪魔。冥界での貢献度、ゲームでの成績や能力、それら全て最高ランクの評価をもらって初めて得られる、悪魔にとって最上級の位だと。

嘗て兄貴と一緒に冥界で修行しに行った時に知ったが、匙からの説明に改めて認識した。

最上級悪魔か。何れ聖書の神を倒すには不十分な物だが、転生悪魔になったばかりの俺には辿らないといけない険しい道だな。そこは地道に頑張るしかないか。

「……白龍皇か。兵藤隆誠から聞いてはいるが、妙な真似をすればその時点で俺は躊躇いなく噛み砕くぞ」

睨みながら警告するおっさんに、ヴァーリは苦笑していた。

そんな中、先生は術式を展開し、専用の魔法陣を地面に描いていく。光が走って行き、独特の紋様を形作っている。

「しかし、あやつ、本当に来るのだろうか。俺も二、三度程度しか会った事がない」

嘆息しながら呟くタンニーンのおっさん。

「二天龍がいれば否でも応でも反応してくるだろうさ」

先生が魔法陣を描きながら言う。

「多分ですけど、俺の闘気を感じたら来てくれると思いますよ」

俺の台詞に先生やおっさんだけじゃなく、ヴァーリと匙もこちらに視線を向ける。

「それはどう言う事だ、兵藤一誠？」

「まさかとは思うが、ひよつとしてミドガルズオルムに会った事があるのか？」

「ええ。前に兄貴と一緒にヴァルハラへ来た時、オーデインの爺さんから許可貰って深海に行ったんですよ」

兄貴から海の中でも自由に移動出来る『潜水の加護』って術を施されてな。あの時は人魚気分で泳いでたから凄く楽しかったよ。まあ兄貴から『アホなことをやってないで、さっさと行くぞ』と窘められたけど。

「ミドガルズオルムと一通り話した後、機会があったらまた会おうって約束もしまして。兄貴から聞いてませんか？」

「初耳だ。出来ればそういう事は前以て話してくれ。つたく、リユージェーの奴……」

兄貴に対して悪態を吐く先生だが、それでも魔法陣を描いている手を止めていない。

「となると、兵藤一誠は知っているんだな？ あやつの怠け癖を」「ああ、最初は起こすのに俺や兄貴も苦勞したよ。聞いた話だと、アイツは世界の終わりまで深海で過ごすと言ってたけど、アレってマジなのか？ 俺はてつきり冗談かと思って聞き流していたけど」

「残念だがそれは本当だ。俺も数百年前に聞いたから間違いない」「ええ〜……」

あれはやっぱマジで言ったのか。一緒に聞いた兄貴が溜息を吐いていたのって、本当にやると思ってた物凄く呆れていたんだろうな。

「さて、魔法陣の基礎は出来た。あとは各員、指定された場所に立つてくれ」

先生に促され、俺達はそれぞれ、紋様が描かれたポイントに立った。それらの紋様には、二天龍、龍王を意味するんだと。

俺達が指定ポイントに立ったのを確認した先生は、手元の小さな魔法陣を操作して最中調整をしようとする。

すると、淡い光が下の魔法陣を走り出した。俺は赤く光り、ヴァーリは白く光る。先生は金色で、匙が黒、おっさんは紫色に光り輝く。この色って各ドラゴンの特徴を反映した色かな？ 俺の鬨^{オーラ}気の色は赤だし。

『その通りだ。相棒が察した通り、それぞれが各ドラゴンの特徴を反映した色となっている』

あ、やっぱり。補足説明あんがと、ドライグ。

因みに残りの五大龍王の色は？

『ティアマツトが青で、玉龍^{ウーロン}が緑だ』

へえー。あ、そういや思い出したけど、ドライグって五代龍王の中で会いたくないのはティアマツトだったな。何で会いたくないんだ？

『……そんな事よりも、魔法陣が発動したぞ。今はそつちに集中しておけ』

何だ？ ドライグが俺の質問に答えないって珍しいな。

集中しろと言われたが、数分間その場で立ち尽くすだけだった。

一先ず黙って見ていると、魔法陣から何かが投影され始めた。

立体映像が徐々に俺達の頭上に作られていくも、それはどんどん広がっていく。匙なんか驚いた顔をしている。

そして、俺達の眼前に映し出されたのは、この空間を埋め尽くす勢いの巨大な生物だった。

……………おおう。久しぶりに見たけど、相変わらずでけえな。

姿はでっかい蛇だが、頭部はおっさんと同様のドラゴンだ。長い体でとぐろを巻いている様子だった。

「なんつーか、以前に見たグレートレッドが小さく見えるな。それでも実力は向こうが断然上だけど」

「そうだな。大きさだけで言うならグレートレッドの五、六倍はあるだろう」

おっさんから改めて言われると、ミドガルズオルムは本当に怪獣の域を超えてるな。

色々な意味で驚いている中、俺の耳に特大に聞き覚えのある音が飛び込んできた。

『……………ぐごごごごごごおおおおおおおおおおおおおお……………』

あ、やっぱりいびきだった。

本当に寝てばかりだな、このドラゴンさんは……………。

「案の定、やはり寝ているな。おい、起きろ、ミドガルズオルム」

「おっ、起きてくれ、ミド」

タンニンのおっさんと俺が話しかけると、ミドガルズオルムはゆっくりと目を開いていく。

『……………懐かしい龍の波動だなあ。あとこの前聞いたばかりの声も聞こえる。ふああああああああ……………』

ミドガルズオルムが大きなあくびをする。でっけえ口だな。おっさんを余裕で丸のみ出来る大きさだ。

『おお、タンニンじゃないかあ。久しぶりだねえ。イツセーはこの

前会ったばかりだねえ』

相変わらずゆったりとした口調だ。

この前会ったとは言うけど、もう数年前の話だ。まあコイツからすれば短い時間だろうが。

因みに俺が呼んだミドと言うのは、ミドガルスオルムを略した名前だ。当人、じゃなくて当龍はその呼び方が気に入ったのか、今後はミドと呼んでくれと言われている。

ミドが俺達を見渡すと、少し不思議そうな顔をしている。

『……アルビオンまでいる。……ファーブニルと……ヴリトラも……？ ひよつとして、世界の終末なのかい？ そうなる前にイツセーとリューセーにまた今度会う約束した筈なんだけど、忘れられたのかなあ？』

「いや、違う。今日はおまえに訊きたい事があつてこの場に意識のみを呼び寄せた」

「つてかミド、お前に会うつて約束は俺や兄貴もちゃんと憶えてるから安心してくれ」

タンニーンのおっさんと俺がそう言うが……。

『あくそれを聞いて安心したよ……ぐ……ぐ……ぐ……ぐ……』

ミドは安堵した途端に再びいびきをかき始めた。

「寝るな！ 全く、おまえと玉龍ウーロンだけは怠け癖がついていて敵わん！」

「頼むから起きてくれミド！ こっちは非常事態なんだからさ！」

怒るおっさんと叫ぶ俺。ミドは大きな目を再び開けていた。

「……タンニーンはいつも怒ってるなあ。イツセーもせつちだねえ……。それで僕に訊きたいことってなんなのお？」

「おまえの兄弟と父について訊きたい」

おっさんが単刀直入に訊く。

ミドにそれを訊く理由は、目の前にいるドラゴンはロキによって作り出されたドラゴンだからだ。その為にロキがミドの父親で、ロキに作られたフェンリルは兄弟の関係だ。

これはオーデインの爺さんから聞いた話だが、ミドは強大な力を持つていながら、その巨体と怠け癖から北欧の神々も使い道が見い出

せず、海で眠る様に促したようだ。世界の終末が来た時にだけ何とかしろと言つて。当然、最終的な判断を下したのがオーデインの爺さんだ。

なのでミドはずっと深海で眠り続けている。『終末の大龍』スリーピング・ドラゴンと言う正に異名通りの龍つて訳だ。

『ダデイとワンワンのことかあ。いいよお。どうせ、ダデイもワンワンも僕にとってはどうでもいい存在だし……』

とても親子とは思えない発言だが、実際は本当にそうだ。もしもそうでなかったら、ロキはフェンリルだけじゃなくミドも連れてきてくる筈だ。アイツは最初からミドを当てにせず、戦力外扱いと言う名の放置をしている。

『あ、そうだイツセー。ちよつと聞かせてよお』

「なんだ？」

『アルビオンとの戦いはやらないのお？』

俺とヴァーリを交互に大きな目で見て問う。

「もう既にやつて一回負けたよ。今度やる時は絶対勝つ。けど今は訳あつて、共同戦線でロキとフェンリルをぶつ倒さなきゃいけないな」

「待て、兵藤一誠。何を勝手に——」

俺の返答にヴァーリが反論しようとするが、すぐに先生が止めた。

聞いたミドは笑つたような顔をする。

『へえ、おもしろいねえ……。二人が戦いもせずにならんでいるから不思議だつたけど、もう既に戦つて負けたのかあ。もし勝つたら僕にも教えてねえ』

ミドがそう言った後、改めておっさんからの質問に答えだした。

『知つてると思うけど、ワンワンはダデイよりも厄介だよお。牙で噛まれたら死んじやう事が多いからねえ。でも、弱点もあるよお。ドワーフが作った魔法の鎖——グレイプニルで捕らえる事が出来るよお。それで足は止められるねえ』

ワンワンは当然フェンリルを指してる。ミドから見れば、フェンリルは小さなワンワンか。

「それは既に認識済みだ。だが、北からの報告ではグレイプニルが効かなかったようだな。それでお前から更なる秘策を得ようと思つていたのだ」

「そういやフェンリルはその鎖が弱点とか言つてたな。トリックスターと呼ばれているロキの事だから、フェンリルの弱点对策を立てた上で俺達に戦いを挑んだんだろう。」

「……うーん、そうなるけどデイは、ワンワンを強化したかもしれないねえ。それなら、北欧のとある地方に住むダークエルフに相談してみなよお。確かあそこの長老がドワーフの加工品に宿った魔法を強化する術を知っているはず。長老が住む場所は以前リユースーに教えたけど、アルビオンの神セイクリッド・ギア器に転送するよお。なにセイツセーは戦いが専門だからねえ」

「ほっとけ！ 普段から寝てばっかりいるミドに言われたくねえよ！」

ミドの余計な発言で思わず突っ込む俺。

「つてかイツセー、そいつと随分仲良いんだな」

「俺としては、ミドなどと言う呼び方は初めて聞いたぞ」

ミドがヴァーリに情報を転送してる最中、先生とおっさんが苦笑しながら言ってくる。

「——把握した。アザゼル、立体映像で世界地図を展開してくれ」

情報を捉えたヴァーリが言うと、先生はケータイを取り出して操作した。すると、画面から世界地図が宙へ立体的に映写される。それを見たヴァーリは一部分を指す。先生は素早く、その情報を仲間へ送り出していた。

「……ほう。よくまあ、そんなことまで知っていたな。ずっと寝ているとばかり思っていたんだが」

おっさんが感心する様にミドに言った。

『まあねえ。地上に上がった時、色々とエルフやドワーフに世話になったからさあ』

それは俺と兄貴も前に聞いた。でも、俺としては今でも疑問に思う事がある。

その巨体でどうやって世話になったんだ？ 怪獣の域を超えたデカさだと、確実にエルフやドワーフの里で世話になれるとは思えないんだが……。

「で、ロキ対策はどうだ？」

おっさんは次にロキについて訊く。

『そうだねえ。ダデイにはミヨルニルでも撃ち込めば何とかかなるんじゃないかなあ』

ミドの話を聞いて、先生は顎に手をやった。

「つまり、基本は普通に攻撃するしかないわけか。オーデインのクソジジイが雷神ツールに頼めばミヨルニルを貸してくれるかどうか……」

「あれは神族が使用する武器の一つだからな。あのツールが簡単に貸すとは思えない」

先生の意見にヴァーリがそう言う。

『それだったら、さつき言ったドワーフとダークエルフに頼んでごらんよお。ミヨルニルのレプリカをオーデインから預かってたはずう』
「物知りで助かる、ミドガルズオルム」

先生は苦笑しながらミドに礼を口にした。

すると、ミドは再び俺に顔を向ける。

『そうそうイツセー、前から気になってたんだけどさあ。リユースーって一体何者なのお？ 初めて会った時にダデイみたいな神の波動を感じたから、普通の人間じゃないのは分かってただけだよ』

あ、ミドは知らなかったか。前に会った時の兄貴は三大勢力に知れないよう正体を隠していた時期だったからな。もう知れ渡ってるから、教えても問題無いだろう。

「兄貴の正体は『聖書の神』だ。何でもシステムって物を使って人間に転生したんだと」

『…………あのリユースーが聖書の神だったのかあ。これは驚いたよお』

「その割には大したリアクションじゃないな」

『何となくだけどそんな感じはしてたんだあ。でもそっかあ、彼があ

の聖書の神だったとはねえ……………噂じゃかなりのドラゴン嫌い
だって聞いたんだけどなあ』

「ん？ 何か言ったか、ミド？」

最後の部分がボソボソ言っていて聞こえなかったので確認するも、ミドはデカイ頭をフルフルと横に軽く振る。

『何でもないよお。イツセー、今度はリユースーを連れて深海に遊びに来てねえ。さーて、そろそろいいかな。僕はまた寝るよ。ふあああ
ああっ』

久々に喋って疲れてきたのか、ミドは大きな欠伸をする。更に少し
ずつ映像が途切れてきた。

「ああ、すまん」

おっさんの礼にミドは笑んだ。

『いいき。イツセーと楽しくおしゃべりできたからね。じゃあ、また
何かあったら起こして』

ミドがそう言い残すと、映像がぶれていき、ついには消えた。
久しぶりに会ったけど相変わらずだったな。

こうして龍王ミドガルズオルムからの情報を得た俺達は、動き出す
事となった。

のだが――

「その前に兵藤一誠、今後はミドガルズオルムに間違った情報を伝える
のは止めてもらいたい。あの時の勝負は俺が敗北したと言っている
だろうが」

「本当にしつこい奴だな、お前は。俺が負けたって事実を伝えただけ
だ。別に何も間違っちゃいねえよ」

「大間違いだ！ 大体キミは――！」

「それはお前が――！」

ヴァーリが異議を申し立ててきたので、再びあの時の勝負についての
議論をする破目になってしまった。

「……………一体何なのだ、この議論は？ 自分の負けを主張し合う二天
龍なんて初めて見たぞ」

「イツセーだけじゃなく、ヴァーリも相変わらず譲らないか。にして

も珍しいな。あのヴァーリが子供みたいに感情を露わにしてまで主張するとは」

「え？ え？ か、会長から聞いた話だと、兵藤と白龍皇の戦いつて相打ちだったんじゃないのか……？」

一方、兵藤家では――

「ちよつと変態夢魔^{サキュバス}！ 人が目を離してる間にリユースーに抱き着かないで！」

「色ボケ女神に言われる筋合いなんか無いわね。貴女こそ、勝手にダーリンと恋人扱いしないでもらいたいわ」

「…………お前等、いい加減にしないと俺も流石に本気で怒るぞ」
いつの間にか戻って来たフレイヤが隆誠に抱き着いてるエリーを見た途端に喧嘩を始めていた。二人がそれぞれ隆誠の片腕に引っ付きながら。

そろそろ我慢の限界が訪れようとしているのか、隆誠のこめかみから青筋が浮かんでおり、今にも怒りのオーラが爆発しそうだった。

第十三話

イツセー達がミドガルズオルムと話し終えた翌日の朝。

朝食を済ませた俺達は地下の大広間に集まっていた。俺——兵藤隆誠やグレモリー眷族、そしてシトリー眷族も今日は学校に行かない事になっている。と言つても、俺達を模した使い魔達が代わりに学校生活を送ってもらう予定だ。因みに俺は改良した影武者人形を使って学校に向かわせている。

ロキとの戦いが近づいている為、今回ばかりは休まないといけない。イツセー達は平穏な学園生活を送れない事に残念がっていた。言うまでもなく俺も同様だ。

特にソーナは生徒会長である事もあって、自分が学園に行けない事にもどかしさを感じている。「自分のいない間に何か起こらないか？」と落ち着かない様子だ。

すると、アザゼルが小言を呟きながら現れた。しかも顔が不機嫌極まりない様子で。

「オーデインの爺さんからのプレゼントだよ。ミヨルニルのレプリカだ。まったく、あのクソジジイ、マジでこれを隠してやがった……」
「本当に昔っから食えないねえ、あのご老神は」

「ところで兄貴、これが本当にミヨルニルなのか？俺はてつきり、ゲームでよく見るド派手な形をしたハンマーだと思ってたんだが」

アザゼルと俺の話之余所に、レプリカを見たイツセーが問う。

その疑問はある意味当然かもしれない。今、俺達の前にあるミヨルニルのレプリカの見え目が、日曜大工で使いそうな普通のハンマーだからな。一応、豪華な装飾や紋様が刻まれているが、それでも日常的な物に見えてしまう。

「まあゲームじゃ派手な形状をしてる武器ほど強いつて言うお決まりだけど、現実はそうでもない。これは真正銘、北欧の雷神トールが持つ伝説の武器のレプリカだ。見た目とは裏腹に、神の雷が宿っているぞ」

「へー、確かに言われてみりゃそのハンマーから凄え力を感じるな」

改めてミヨルニルのレプリカから感じる力を探知したイツセーは考えを改めていた。

「それでロスヴァイセ、これは誰が使っているんだ？」

「はい、オーデインさまよりこのミヨルニルのレプリカをイツセーくんにお貸しするそうです。どうぞ」

そう言つてロスヴァイセはイツセーにミヨルニルのレプリカ（以降はハンマー）を渡す。

「じゃあイツセー、試しに闘気を流してみろ。量は半分以下でいい」「おう」

俺の指示にイツセーは闘気をハンマーに流し込んだ。

直後、カツと一瞬の閃光が走った。その後にハンマーがぐんぐんと大きくなり――

「おわっ！ とととと……！」

ズドンッ！

既にイツセーの身の丈を越す巨大なハンマーとなつて、急な重さによつてイツセーがバランスを崩して大広間の床に落としてしまった。落下した衝撃により、大広間自体が大きく振動してしまっている。

「わ、悪い兄貴！ 半分以下に流し込んだつもりなんだが……！」

イツセーは謝りながら、巨大化したハンマーを力一杯持ち上げた。「ほう。たった半分以下の闘気で、そこまで大きくさせるとは凄じくないか」

「感心してる場合じゃねえだろうが。イツセー、もう少し闘気を抑えろ抑えろ」

俺の台詞にアザゼルが突っ込みながらも、イツセーに嘆息しながら言う。それを聞いたイツセーは言われた通り、更に闘気の量を抑えた途端、縮小し、両手で振るうに丁度いいサイズとなった。

「ったく。禁手でもないのに、よくもまあ軽々と持てるもんだ。それだけ聖書の神に鍛えられてるって証拠か」

「そう言う事だ。取り敢えずイツセー、もう止めていいぞ」

「了解つと」

アザゼルが少し呆れてる中、俺に言われたイツセーがハンマーから手を離す。すると、ハンマーは元のサイズに戻った。

どうでも良いんだが、ヴァーリの奴が面白そうに笑みを浮かんでい
る。何かまるで、『俺の宿敵ライバルだからこれ位は当然だ』みたいな感じで。
「つーか、これマジでレプリカなのか？ 本物じゃないかって思う程
に凄え力を感じたぞ」

ハンマー、と言うよりミヨルニルに対して認識を改めているイツ
セーが――

「かなり本物に近い力を持っているぞ。本来、神しか使えないんだが、
バラキエルの協力でこいつの使用を悪魔でも扱えるよう一時的に変
更した」

「先に言っておくが、無暗に振るうなよ？ もしお前が禁手バランス・ブレイカー状態
でそれを全力で振るったら、高エネルギーの雷でこの辺一帯どころ
か、駒王町その物があつと言う間に消え去るからな」

「マジか！ うわっ、怖い！」

アザゼルと俺の言葉を聞いて戦慄した。

取り敢えずイツセーにロキ対策の武器が用意出来たので良しとし
よう。

「ヴァーリ、どうせならおまえもオーティンの爺さんに強請つてみた
らどうだ？ いまなら特別に何かくれるかもしれないぞ」

アザゼルが愉快そうにそう言う。

しかし、当のヴァーリは不敵に笑いながら首を横に振った。

「そんな借り物の武器はいらないさ。俺は天龍の元々の力のみを極め
るつもりだ。兵藤一誠と再び戦う時に無粋な装備などいらない。そ
れに俺が欲しい物は他にあるんでね」

凄くどうでも良いように言ってるけど、イツセーを凄く意識してい
るようだ。それに気付いたのか、イツセーはジッとヴァーリを見てい
た。

ヴァーリはイツセーと戦う前まで大した事の無い相手としか見て
なかった。けれど、それが今やイツセーとの再戦による決着を心から

待ち望んでいる。

勿論、イツセーも同じ気持ちだ。だが生憎、イツセーは才能が無い為に、天龍以外の力も補わなければヴァーリと互角に戦う事が出来ない。本人としては自力で勝ちたいだろうが、それが無理だと理解してるから何も言わないでいる。

弟の心情を察してる最中、アザゼルが美猴に話しかけていた。初代孫悟空からの伝言を聞いた瞬間、顔中汗ダラダラ出して青褪めていた。

タンニーン相手に勇猛果敢に挑んでいた奴は、どうやら初代相手に形無しのようなだ。因みにタンニーンは決戦日に来る予定で、今は冥界で待機中となっている。

すると、美猴と話し終えたアザゼルが俺に視線を向ける。

「そーいやリユースー。そっちの方はどうなんだ？ 俺達がミドガルズオルムに会ってる最中、フレイヤからオツタル対策について訊いたんだろ」

「まあな。と言つても殆どはオツタルの戦い方と実績ばかりだったが」

取り敢えず俺はアザゼル達に昨日の内容を説明する。

「昨日も聞いた通り、オツタルはフレイヤが抱えていた英雄の中で最強と呼べる武人だ。当時の奴はフレイヤより授かった伝説の武器や防具で、どんな相手でも勇猛果敢に挑んで数々の偉業を成し遂げ、多くの神々からも称賛される程らしい。戦い方は至ってシンプル。力をメインとした剣技に加え、鍛えられた肉体と怪力による格闘戦法。小細工など一切使わずに正々堂々な戦いを好む生粋の武人だ。イツセーやヴァーリなら、そう言う相手は大歓迎だろ？」

俺の問いにイツセーとヴァーリはコクンと頷く。真つ向勝負が好きな二人なら、オツタルと気が合うだろう。

「だが今のオツタルはロキの操り人形で、俺を執拗に狙う殺人鬼同然の狂戦士バーサーカーになっている。奴が愛用していた武器と防具はないが、ロキから仮初の肉体と『魔剣レヴァンティン』を与えられている。ほんの僅かだったが、戦闘能力は当時の頃と全く衰えてないとフレイヤが見

解したらしい。あとこれは予測だが、オツタルにはフレイヤを認識出来ないよう仮初の肉体に細工を施しているかもしれない。フレイヤ曰く、主の自分を見ても何の反応もしないのは絶対におかしいってな。俺がオツタルと戦ってる最中に止めろと何度も叫んでいたが、当の本人は完全無視……と言うより本当に聞こえてないかもしれないと言った。確かに考えてみれば、フレイヤに関する対策を施さないとオツタルは戦力にならないどころか、却って邪魔な存在になってしまふからな。早い話、今のオツタルにフレイヤをぶつけても無駄な事だ。なので俺がアイツと戦うしか方法はない」

俺からの説明にアザゼルやイツセー達は揃って眉を顰めていた。ただでさえロキやフェンリル相手に梃子摺るのに、ここで聖書の神と言う最大戦力の一つがオツタルの方に割かなければいけない事を認識したから。

「やれやれ、やっぱりそうなるか。本当なら聖書の神にはロキの相手をさせたかったが」

心底残念そうに言うアザゼルに俺は苦笑する。

元神とは言え、聖書の神ならばロキと対抗出来るとアザゼルは思っていたんだろう。確かに俺が聖書の神の姿で戦えばロキと対抗出来るだろう。

しかし、そうするにはフェンリルをどうにかしないとイケない。神殺しの牙を持つてるフェンリルに噛まれたら殺されてしまうので。

俺からオツタルの話を聞いたアザゼルが咳払いして、俺たち全員に言う。

「それじゃあ、作戦の確認だ。先ず、会談の会場で奴が来るのを待ち、そこからシトリー眷族の力でお前達をロキとフェンリル、そしてオツタルごと違う場所に転移させる。転移先はとある採石場跡地だ。広く頑丈だから存分に暴れても問題無い。ロキ対策の主軸はイツセーとヴァーリ。二天龍で相対する。オツタルの相手はリユースーとヴァーリチームのエリガン。最後にフェンリルの相手は他のメンバー——グレモリー眷族とヴァーリのチームで鎖を使い、捕縛。そのあと撃破してもらう。分かっているだろうが、絶対にフェンリルをオ―

デインのもとに行かせるわけにはいかない。あの狼の牙は神を砕く代物だ。主神オーデインと言えど、聖書おやじの神と同様あの牙に噛まれれば死ぬ。なんとしても未然に防ぐ」

作戦の内容に誰もが頷く。俺としてはオツタル戦でイツセーをパートナーにしたかった。けれど、ロキ対策用のハンマーを所持しているので無理だ。久しぶりの兄弟コンビプレーが出来なくて残念だが、二天龍のヴァーリなら大丈夫だ。宿敵ライバルとは言え、イツセーと組んで戦う事にヴァーリは何の異論もないので。

エリーが俺の方へ回ったのは、『ダーリンがオツタルと戦うなら私もそっち側に行く』と言ったからだ。その発言に誰もが文句を言わなかった。不本意だが、ヴァーリと同様に何を考えているのか分からない。エリーは俺の傍に置かせた方が良いとアザゼルが了承している。エリーはリアス達だけでなく、ヴァーリチームのメンバーからも余り信用されてないから、俺に回るにはある意味当然かもしれない。まあ戦闘面に関して、それなりに信用出来る相手だ。過去に何度も戦つてる事もあつて、エリーの戦い方を理解している。

因みにそのエリーだが、今はこの場にいない。あの後にフレイヤと言いつ争っていたので、我慢の限界に達した俺は二人纏めて、聖書わたくしの神の能力ちからで作った光の鎖で拘束させた。

『ちよつとリニューセー！　いくらなんでも女神の私に対して酷過ぎない!?!』

フレイヤは文句を言ったが、俺は気にせずオーデインに引き渡した。

そして――

『ああ、私の身体がダーリンに縛られてる……。緊縛プレイも良いかもしれないわあ♪』

エリーは俺が拘束した事で変なスイッチが入ったのか、恍惚な表情となつて悶えていた。その場にいた面々がドン引きする程に。

その後は別室に放り込み、更には俺が施した結界に閉じ込めている。その際、『今度は放置プレイ……これも良いわあ♪』とか言っていたが無視した。

言っておくが、俺はフレイヤとエリーに卑猥な拘束なんかしてない。ミノムシみたたくグルグル巻きにしただけだ。

「さーて、鎖の方もダークエルフの長老に任せているから、完成を待つとして、後は……。リユースー、匙の方だが」

「それはお前に任せるよ」

確認してくるアザゼルに俺がそう言うと、名前を呼ばれた匙が反応した。

「あの、俺が何ですか？」

「おまえも作戦で重要だ。ヴリトラの神セイクリッド・ギア 器あるしな」

「今回は匙にも存分に働いてもらおうぞ」

アザゼルと俺の一言に匙は目玉が出るほど驚いていた。

「ちよ、ちよつと待って下さいよ二人とも！ お、俺、兵藤や白龍皇みたいなバカげた力なんてないっすよ!!? とてもじゃないけど、神様やフエンリル相手に戦うのは無理です！ て、てつきり会長たちと一緒に皆を転移させるだけだと思ってきましたよ！」

自分は戦力外だと必死に言ってくる匙に、俺とアザゼルは嘆息した。

「勘違いしてるようだから言っとくが、何も前線で戦えとは言っていない。お前には味方のサポートをやってもらいたいんだ」

「さ、サポートっすか？」

「リユースーの言う通りだ。お前が持つてるヴリトラの力は、最前線で戦うイツセーとヴァーリのサポートに必要なんだよ」

そう言っアザゼルは更に付け加える。

「だが、その為にはちよつとばかすトレーニングが必要だな。試したい事もある。ソーナ、少しの間こいつを借りるぞ」

ソーナに確認を取るアザゼル。

「それはよろしいですが、一体どちらへ？」

「転移魔法陣で冥界の墮天使領——グリゴリの研究施設まで連れて行く」

楽しげな顔をするアザゼルに、俺はすぐに察した。

コイツの事だから、恐らく地獄とも思えるトレーニング内容を面白

可笑しく匙にやらせようとするだろう。

「なあ兄貴、先生があんな顔するって事は地獄行き確定のしごきだろ」
「よくわかったな、その通りだ」

コツソリと訊いてくるイツセーの問いに答える俺。その直後に
イツセーは匙に憐憫の眼差しを送っていた。

「匙、先に言っとく。多分だけど先生のしごきは地獄だ。無事に生きて帰って来いよ」

匙の肩に手を置いたイツセーは凄く気の毒そうに言った。それを聞いた匙は更に尻込みする。

「はっはっはー。じゃあ行くぞ匙」

笑みを浮かべて言うアザゼルは嫌がる匙の襟首を掴み、そのまま魔法陣を展開した。

「い、嫌だあああつ！ 助けてえええええつ！ 兵藤おおおつ！ 会長おおおつ！」

魔法陣が光り輝き、泣き叫ぶ匙を包んでいく。

アザゼルと匙の姿が消えると、イツセーは敬礼をする。勿論それは匙に対するものだ。

「つーか、匙に俺達のサポートをさせるって、どうするつもりなんだ？」

「アザゼルの話だと、イツセーとの一戦で匙の内に眠るヴリトラが反応し始めていたようだ。ドライグもそう感じているんだろう？」

『ああ。俺もヴリトラが反応したのを確認した。間違いない』

俺の問いにドライグが全員に聞こえる様に答えた。

すると、イツセーが何か思い出した顔をしてドライグに話しかける。

「そういや、ドライグ。久しぶりに会ったアルビオンとは何か話さないのか？」

『いや、別に話す事もないが……。なあ、白いの』

そう言ってドライグが話しかけると――

『ふんっ、赤いのと話す事などない。拳龍帝などと言う腑抜けた奴は断じて私の宿敵ではないからな』

久しぶりに聞いたアルビオンの声は随分と辛辣だった。と言うより、アルビオンが何か剥れてるような気がする。

『おいおい、随分な言い草じゃないか。拳龍帝と呼ばれているのは宿主の兵藤一誠だぞ』

ドライグは何か察したのか、大して気を悪くせず言い返した。

『誇り高き二天龍だった筈なのに、それが今や多くの小さな子供に好かれていてはないか。これを腑抜けと呼ばずして何と呼ぶ、赤いの。テレビで宿敵を模した「ファイタードラゴン」などというヒーロー番組を見た時に、私は情けない気持ちでいっぱいだったぞ』

『そう言うな、白いの。これでも俺は結構気に入ってるんだ。白いのもやってみれば、俺と同じく気に入るかもしれないぞ』

『世迷言を。私がそんな低俗な物に現を抜かす訳が——』

二天龍の会話に、ヴァーリが不可解そうな表情となっている。

「アルビオン、前と言ってる事が違ってないか？ 兵藤一誠を模したテレビ番組を見ていた時、ドライグに対して矢鱈と羨ましがっている発言をしていたと言うのに」

『よ、余計な事を言うなヴァーリ！ 大体私がいつそんな事を言った!?!』

ああ、そう言うこと。ヒーローと称されて大人気となってるドライグに嫉妬して、辛辣な毒を吐いていたのか。

既に察したドライグは気付いていながらも、アルビオンの発言を軽く聞き流していたって訳ね。

「兵藤一誠。俺はこういう時、アルビオンになんて言うべきだろうか？」

「知るか。んなこと俺に訊くな」

ヴァーリからの問いに、イツセーが即座に突っぱねたのは言うまでもない。

一先ず二天龍の事は後回しだ。俺達が今やるべき事は、対ロキ戦の為に備えて準備を進める事なので。

第十四話

準備を進めていく中、俺は作業部屋でイツセーにミヨルニルの使の方のレクチャーをしていた。

「……なあ兄貴、ちよつと訊きたいんだが」

レクチャーを受けているイツセーが、急に真面目な顔になって俺に問おうとする。

「何だ？」

「朱乃さんについてなんだが、何であの人はお父さんと仲が悪いんだ？俺、バラキエルさんがそこまで悪いお父さんには見えないんだが……」

その問いに俺は判断に迷った。教えても良いかダメかと。

けれど、イツセーの疑問は至極当然だった。この数日の間、朱乃のバラキエルに対する態度が余りにも辛辣だったから。対してバラキエルは朱乃に話しかけようとするも、向こうが無視するから結局諦めている。

そんな場面を何度も見ていたから、イツセーが気にならない訳がない。俺だってアザゼルから聞いてなければ、一体あの親子に何があったのかと気になって調べようとするだろう。

本当なら俺じゃなくリアス、もしくは朱乃本人に訊いて欲しいが……当の二人は別件対応中だ。それにとても話せる雰囲気じゃない。状況が状況なので、ここは俺が教える事にした。

「……聞いた話だと、母親の死が原因らしい」

イツセーにミヨルニルをしまうように言った後、アザゼルから聞いた話をそのまま説明しようとする。

朱乃の母親は日本のとある有名な寺の巫女だった。

名は姫島朱璃しゅり。だから朱乃は母方の姓を名乗っている。

姫島朱璃が寺の近くにある日、敵勢力に襲撃されて重傷を負ったバラキエルが飛来する。彼女は傷付いたその墮天使の幹部を救い、手厚く看病した。彼女はその時バラキエルは親しい関係になった後、その身に子供を宿したそうだ。

「なんつーか、ファンタジー系の恋愛ドラマとかでよくあるパターンだな」

イツセーのツツコミに俺は特に否定せず、話を続ける。

「バラキエルは朱乃の母親と生まれたばかりの朱乃を置いていくわけにもいかず、近くで居を構え、そこから墮天使の幹部として動いていたらしい。その時の三人は慎ましい生活でありながらも、とても充実して幸せな日常を送っていた。……だが」

その幸せは長く続かなかった。

母親の親類は何を勘違いしたのか、墮天使の幹部に娘が洗脳されて手籠めにされたと思い込み、とある高名な術者達をけしかけたようだ。

言うまでもなく、バラキエルの力で退かれていた。しかし、術者の中にはバラキエルにやられて恨みを持つ者も現れた。

「何だそりゃ？ 自分達から勝手に仕掛けといて、バラキエルさんを恨むなんざ筋違いじゃねえか」

「墮天使に負けた事で相当プライドが傷付いたんだろうな。そしてその連中は墮天使と敵対している者達へ、バラキエルが住まう場所を教えただと」

ここまで言っただイツセーは何となく分かった表情となる。

「運悪く、その日は偶然にバラキエルが家を空けていたんだ。アザゼルからの呼び出しを受けてな。敵対勢力は朱乃と母親が住まう家を躊躇せずに襲撃した。バラキエルが危険を察知して駆け付けた時には……。朱乃は母親が命懸けで庇ったおかげで助かった。だが、母親は残念ながら……」

俺が人間に転生し、イツセーを連れて各国を旅して、墮天使の幹部が他の勢力に恨みを抱かれているのを知った。朱乃の母親を殺した敵対勢力も、さぞかし墮天使勢を恨んでいたんだろう。

「それが原因で、朱乃は墮天使に対する憎しみが募ったようだ。そして殺された母親の無念を抱き、父親のバラキエルに心を閉ざしたんだと」

朱乃とバラキエルが険悪になった理由を知ったイツセーは言葉を

失っている様子だ。

今はリアスの眷族となっていて、彼女に会うまでの朱乃は天涯孤
独な身となつて各地を放浪していたらしい。

「とまあ、そう言う事があつたつて訳だ」

「……………話は分かつた。けど、一つだけ納得出来ねえところがある」

そう言つてくるイツセーに、俺はどこら辺が納得出来ないのかと尋
ねた。

「バラキエルさん呼び出したアザゼル先生についてだ。あの人は
知つてた筈だろ？ バラキエルさんや朱乃さん達が敵に狙われて
るつて事を。そんな状況の中、どうして先生はバラキエルさん呼び
出したんだ？」

「……………」

アザゼルの咎める感じで言うイツセーに俺は無言になつた。

「あんまり言いたくないが、朱乃さんのお母さんが殺されたのは——」

「——そう。原因を作つた俺が全部悪いのさ」

「!」

イツセーが言つてる最中、第三者の声が聞こえた。

俺たち兄弟が振り返つた先には、いつの間にか部屋に入っているア
ザゼルが佇んでいる。

「先生……………」

「どうした、アザゼル。VIPルームで作業してたんじゃないのかつたの
か？」

また前みたいに勝手に入室してきたので咎めようとしたが、少し悲
痛な表情だつたので敢えて何も指摘しなかつた。

「一段落ついたので、お前らの様子を見に来たんだ。入ろうとした矢
先に、朱乃の過去話が聞こえちまつてな」

「……………それで先生、自分が悪いつてどういふ事ですか？」

イツセーはアザゼルの返答が気になつたのか、理由を尋ねた。その
事にアザゼルは説明しようとする。

「あの日、確かにバラキエルを招集したのは俺だ。イツセーの言う通
り、バラキエル達が狙われてるつて事も知つていた。けれど、どうし

ても奴じやないところなせない仕事があつたんだ。だから、無理を言つて呼び寄せたんだよ。そのわずかな間に……。俺が朱乃とバラキエルから、母と妻を奪つたんだ」

「……先生。だから朱乃さんのこと、バラキエルさんの代わりにみようと？」

「……………」

再び尋ねるイツセーにアザゼルは何も答えなかつた。それを察したのか、イツセーはもう訊こうとしない様子だ。

すると、部屋の扉からノックがした。俺がどうぞと入室許可を出すと、扉が開いて誰かが入ってきた。

「失礼する、聖書の神。アザゼル、ここにいたのか」

入つて来たのはヴァーリだった。

「ああ、おまえか。どうだ？」

アザゼルの問いかけにヴァーリは手を前に突き出し、小さな魔法陣を宙で展開した。

ほう、これは北欧の術式じゃないか。もう使えるようになったんだな。

「北欧の術式はそこそこ覚えた。ロキの攻撃にいくらか対抗出来るはずだ」

思つた通りの返答だった。流石はヴァーリ、お見逸れした。

習得出来たのは、今もヴァーリが手にしている本をずっと読んでいたからだ。

こう言うのは悪いが、イツセーは魔術に関する知識はあつても、それを実行出来る才能はない。

魔術と言うのは簡単に習得できるモノじゃない。魔術その物の理論を完全に理解し、それを魔力に変換させる為の演算能力を必要とする。なので魔術は頭脳などの知力を求められるから、それが大してないイツセーには無理だ。

ヴァーリからの返答を聞いたアザゼルはそれを確認して頷いていた。

「分かった。……さて、邪魔しちまつたな聖書の神。俺は少し休んで

くる」

そう言つてアザゼルは部屋を出て行つた。

此処にいるのは俺とイツセー、そして——ヴァーリ。ライバルがいるからか、イツセーは少しばかり警戒している様子だ。

「聖書の神、少しばかり此処にいて良いか？ 勿論、そちらのやつてる事に邪魔をするつもりはない」

「どうぞ自由だ。そこにあるソファにでも座つて寛いでいいぞ」

俺が許可を出すと、ヴァーリは言われた通り俺が指したソファに座つた。そのまま例の本を読み返している。

ヴァーリは必要のない時は、美猴達と外に出ていた。勿論俺と一緒にいたがつてるエリーも連れてだ。当の本人は外へ行く度に物凄く嫌がつているが、ヴァーリの指示に渋々従っている。

「いいのか、兄貴？ ヴァーリを居させて。ここは兄貴の作業部屋なんだろう？」

「構わん。今は見られて困るような物は置いてない」

少し休憩するかと言うとイツセーも領き、ヴァーリから少し離れる。作業部屋に置いてある冷蔵庫を空け、冷たいジュースを二本出して、一本をイツセーに渡す。

「で、この後はどうするんだ？ まだ続けるのか？」

「そうだな。ここでいくら学んだところで実際に使いこなさないと意味が無いから……いつそ実戦形式でやってみるのも良いかもな」

俺が実戦形式と言つた瞬間、本を読んでいるヴァーリがピクリと反応した。俺は気付いているが、一先ず気にしない事にする。

「お、いいねえ。そっちの方が俺としては分かりやすく助かる。相手は兄貴か？」

「ああ、俺の事を悪神ロキと思つてやるといい。神の姿になったら、更に緊張感が持てるだろう？」

「今更そんなモノなんかねえよ。こちとら元神さまの弟だ」

「それもそうか」

こりや一本取られたと笑いながらジュースを飲む俺。

確かにイツセーは俺が修行の旅に連れて行つた事によって、未知の

経験をしまくった事で肝が据わっている。更には多くの知識と経験も積んで。

加えて、嘗てヴァルハラに訪れて多くの神達と対面した事もあるから、今更神相手に怖気づいたりしない。後はもう勝つか負けるかだ。「しかしまあ、今度は本気でロキと戦う事になるとはな。つてかあの悪神、何であそこまで邪魔してくるんだ？ 今の兄貴みたいに平和を満喫しようって気はねえのか？」

「そんな気はゼロだと断言出来る程に無い。奴は今も『神々の黄昏』の成就こそが全てだから、俺やお前にとつての平和は非常に耐えがたい苦痛なモノとしか見ていない。それは当然、ロキみたいに平和が嫌いな連中もいる筈だ」

神と言う存在は人間や悪魔以上に長く生き過ぎている為、娯楽や刺激を求めてしまう。それが例え滅びの道を辿る事になっても。

俺の話を聞いて何か思うところがあつたのか、イツセーは本を読んでいるヴァーリに話しかけようとする。

「おいヴァーリ、本を読んでいながら聞いてたろ。おまえはどうなんだ？ 今の世界は苦痛か？」

ヴァーリは本を閉じて、真っ直ぐとイツセーの方へと顔を向けて答えようとする。

「苦痛と言うより、退屈なだけだ。だから、今回の共同戦線は楽しくて仕方がない」

如何にもヴァーリらしい返答だった。口元が怖いぐらいに吊り上がってるし。

イツセーとは違って根っからの戦闘狂だ。呆れるほどに。

「だが俺から言わせれば、キミを羨ましく思うよ。平和を満喫しておきながらも、聖書の神のおかげで常に実戦の日々を送っているんだからな」

確かにヴァーリからすればそうだろうな。倒したい相手である聖書の神が、弟の赤龍帝を強くさせようとキツイ修行をさせている。強い相手を求めているヴァーリからすれば、羨ましがるのは当然か。

予想外な返答だったのか、イツセーは虚を突かれたように少し困惑

気味だった。

「今だから言えるが、最初はキミのことを大した才能が無くて、聖書の神に鍛えられても俺以上に強くなる事はないと思っていた。だが、キミは俺の予想を裏切っただけでなく、いままでの赤龍帝とは違う成長をしている。聖書の神の助力だけでなく、ドライグと対話しながら、赤龍帝の力を使いこなそうとする者は歴代の中で初めてだろう」

「え？ そうなのか、ドライグ？」

イツセーが自分の左手に向かって言うと、手の甲が光り出した。

『その通りだ。以前も言っただろう？ 聖書の神に言われたとは別に、おまえは歴代のなかで一番俺と対話する宿主だ。更には俺の力に溺れず、過信せず、赤龍帝の力を使いこなそうとしている。尤も、相棒が聖書の神に鍛えられてる時点で、そんな心配は微塵もなかったがな』

確かにイツセーが思い上がった行動をすれば、俺が即座に矯正する事となる。

俺が内心頷いてると、ヴァーリが続く。

「今まではただ思うがままにその強力で凶悪な力を振るう宿主ばかりだった。最終的にドライグの力に溺れ、戦いで散っていった」

『おまえは歴代で一番才能の無い赤龍帝だが、それを分かっているながらも聖書の神からの指導で強くなるうとしている。——同時に』

「歴代で一番力の使い方を覚えようとしている赤龍帝だ」

ドライグとヴァーリにそう言われたイツセーは少し照れた様子を見せる。

「随分と期待されてるじゃないか、イツセー。兄の俺としては鼻が高いぞ」

「うっせ……」

憎まれ口を叩くイツセーだが、俺は大して気にしない。それどころか愉快そうに笑みを浮かべる。

「もし実現出来るのであれば、将来、俺のチームとキミのチームでレーティングゲームみたいな戦いをやってみたいものだ。最後は当然、俺とキミでの大将戦を」

「へえ、それはいいかもしれないな。つっても、今の俺は『兵士』^{ポーン}になつたばかりだし、俺に付いてきてくれるのはまだ二人で当分先の話だ」
「もう既に二人いるとは、随分と幸先がいいな。もしやグレモリー眷族の誰かなのか？」

「ああ、お前もよく知ってる二人——アールシアとゼノヴィアだ」

ほほう。アールシアは当然として、まさかゼノヴィアもイツセーに付いて行く予定だったとは。それだけイツセーに惹かれたと言う証拠なんだろうな。

嘗て神に敵対する者は嫌悪感丸出しのガチガチな信徒だったのに、今は転生悪魔となったイツセーと一緒にいたがるとは。随分と大きく変わったもんだ。勿論良い意味で。

「元聖女と聖剣使い、か。キミの事だから、他にも既に目をつけている相手がいるんじゃないのか？」

「いねえよ。いくらなんでも買いかぶり過ぎだ」

いや、イツセーは気付いていないが実はもう一人いるんだよな。ソイツは冥界にいるご令嬢——レイヴェル・フェニックスだ。

知つての通り、彼女もイツセーに惚れている。更には弟の力になりたいと言っていたので、イツセーがチームに入ってくれと勧誘したら喜んで受け入れるだろう。そうなったらアールシアと同じく『僧侶』^{ビショップ}枠だ。

既にイツセーは『僧侶』^{ビショップ}二人、『騎士』^{ナイト}一人を確保済みである。残つた枠は果たして誰になるのか非常に楽しみだよ。

「うむうむ。いいのう。青春だのお」

「つて、オーデインの爺さん……！」

「ねえねえリユースー、私達も青春しよう」

「お前は相変わらずブレないな、フレイヤ」

俺たち兄弟とヴァーリの間にオーデインが現れ、更にはフレイヤが俺の腕に引っ付いてきた。

「今回の赤白は、実に個性的じゃい。昔のはみーんなただの暴れん坊でな。各地で好き勝手に大暴れして、色んなものを壊しながら死におつた。実に迷惑極まりなかったわい」

「そうそう。ヴァルハラにも勝手に土足で上がり込んだ挙句、私が好きだった風景も吹っ飛ばしたのよね」

ため息混じりにオーデインとフレイヤはそう語った。

二人に付いてきていたロスヴァイセも言う。

「確かに片方は卑猥なドラゴンで、片方はテロリストという危険極まりない組み合わせですけど、意外に冷静ですね。出会ったら即対決が二天龍だと思っていました」

ロスヴァイセの言ってる事は間違ってる。嘗ての二天龍はその通りの事をしていた。

だと言うのに、イツセーとヴァーリは戦わないどころか仲良く話している。それ自体が異様な光景とも言えよう。

「ところで白龍皇。お主は……どこが好きじゃ？」

オーデインがいやらしい目つきでヴァーリに訊く。……おいおい、まさかヴァーリ相手に猥談か？

「なんのことだ？」

ヴァーリは意味が分からなかったのか、首を傾げながら聞き返す。それを聞いたオーデインはロスヴァイセの胸、尻、太腿を指している。

「女の体の好きな部分じゃよ。因みに赤龍帝のイツセーは乳じゃ。白龍皇のお主も何かそういうのがあるんじゃないかと思うてな」

「生憎、俺はそういう関連に興味などない」

「まあまあ、お主も男じゃ。女の身体で好きな部分ぐらいあるじゃろう」

再度訊いてくるオーデインに、ヴァーリは付き合いきれない雰囲気を見せるが、それでも答えようとする。

「……しいて言うなら、ヒップか。腰からヒップにかけてのラインは女性を表す象徴的などころだと思いが」

何気なく答えたヴァーリ。

「……なるほどのお。ケツか。イツセーとは対照的じゃのう。ついでにリユースー、お主はどうなんじゃ？」

「それは前に言った筈ですが？」

ヴァルハラに来た時、オーディンから猥談をされた事があつた。その時にイツセーは『おっぱいが好きです!』と答えていたがな。

『好きな女が出来れば関係無い』などと言う模範的な回答なんぞ却下じゃ。ほれ、白龍皇も答えたんじやから、お主も思い切つて言えい!」
「あ、それは私も知りたい。ねえねえリユーセー、どこが好きなのか教えてよ」

「ふ、フレイヤさま! そのような事を知つてどうするおつもりなんですか!」

フレイヤがオーディンに便乗して尋ねてくる事で、ロスヴァイセが咎めるように言った。けれど、彼女もチラチラと気になるような目で俺を見ている。イツセーとヴァーリも同様に。

どう答えようかと悩んだ結果――

「……敢えて言うなら、髪ですかね。綺麗な髪をしている女性を魅力的に感じますので。髪は女の命とも言いますし」

「……お主、髪フェチじゃったのか。神なだけに」

無難な答えを出すも、オーディンは意外そうな顔をして言った。イツセー達も同様の反応をしている。

別に神だから髪が好きと言う訳じゃない。あとダジャレで言ったつもりは毛頭無い。

「因みに兄貴が魅力的な髪だと思つてる女性は?」

「ノーコメント」

「え〜〜!?!? そこが重要な所なんだから教えてよお!」

イツセーの問いに答えないと、フレイヤがすぐに抗議してきた。

フレイヤとこの場にはいないエリーは綺麗な髪をしてるが、一方的に想いをぶつけてくる女は論外だ。

もし答えるとしたら……今のところはロスヴァイセだ。個人的に彼女の流れるような長い銀髪は綺麗に思っている。尤も、それを口にしたらフレイヤとエリーが何を仕出かすか分からないので答えるつもりはない。

「……か、髪の手入れは、重点的にやっておく必要がありそうですね」

聞いていたロスヴァイセが何やら髪を意識しているようだが、俺は
敢えて気にしないでおく事にした。

その後もちよつとした話が続く。すると、オーデインとロスヴァイ
セは別の用事を思い出したのか、嫌がるフレイヤを無理矢理連れて部
屋から出て行った。

第十五話

「イツセー、また闘オーラ気が昂おこってる。もう一回深呼吸をして全身を落ち着かせろ」

「お、おう……すううう……はあああ……」

ミヨルニルを使つての実戦形式をやるうと思つていた俺だが、急遽変更する事となった。理由は勿論ある。闘オーラ気の制コントロール御を改めてやる必要が出来たから。

イツセーがミヨルニルに闘オーラ気を流し込むと、上手く調節できない為に不安定な形となる。ロキと戦うと言うのに、そんな状態で挑むのは不味いと危惧した俺は、ミヨルニルのレクチャーを後回しせざるを得なかったと言う訳である。

そして現在。空いてる部屋でイツセーは上半身はTシャツ、下はハーフパンツと言う軽装で座禅を組ませている。自身の闘オーラ気を抑える為の瞑想だ。

因みに俺も同じ軽装姿で、一緒に瞑想をしている。戦いに備える為には何事も準備が必要なので、俺自身もやっておこうと思つたので。瞑想を始めて約一時間経つと、イツセーの昂おこってる闘オーラ気が漸く安定しかかっているのを感じ取つた。

「今日はここまでだ。もう崩しても良いぞ」

「——っ。はあああ……」

俺の台詞を聞いた瞬間にイツセーは座禅を崩し、そのまま大の字となつて倒れた。俺は座禅を崩さないまま、首だけ動かしてイツセーの方を見ている。

「何かいつもと違って疲れたあ。自分で言うのもなんだけど、俺の闘オーラ気あそつてあそこまで暴れない筈なんだけど……」

「そりゃ悪魔になつた事で、お前の闘オーラ気が急激に上昇したからな」

人間だった時のイツセーは俺の修行でコツコツと上昇させていた。しかし、今は転生悪魔化によつて順序を吹っ飛ばすかのように闘オーラ気が上昇したから、簡単に制御出来ないのは当然と言える。

やはり瞑想をしておいて正解だったと、俺は改めて確信した。もし

瞑想をやらせずにロキと戦ったら、イツセーは自身の闘気を制御出来ずに暴走する恐れがある。そうなってしまえばロキに隙を突かれて負けるどころか殺されてしまう。

ミヨルニルのレクチャーも大事だが、それを使おうとするイツセー自身が先ず己の力を制御しなければ話にならない。そう考えた俺は、ロキとの決戦前に可能な限り瞑想を重点的にやらせようと決意する。「イツセー、決戦前に必ず闘気をコントロール出来るようにしておけ」「分かってる。こんな暴れ馬状態でロキに挑んだらあっさり負けちゃうのが目に見えてる」

天井を見ながら言うイツセーは、どうやら分かっていたようだ。闘気をコントロール出来ないままではロキに勝つ事は出来ない。

余計なお節介だったかと思つてると、突然ガチャッと部屋のドアが不意に開いた。

俺とイツセーは誰が入ってきたのかを視線を向けると——白装束姿の朱乃が入ってきた。しかも思い詰めたような表情で。

「あれ？ 朱乃さん？」

「どうしたんだ、朱乃？ 俺達に何か用か？」

「……………」

俺たち兄弟が問うも、朱乃は答えようとしない。そのまま此方へ近づいて、片手で俺の左手を軽く掴んでくる。

「リユースーくん、ちょっとよろしいですか？」

「ああ、いいけど」

「？」

頷きながらすぐに立ち上がると、朱乃は左手を掴んで俺を連れて移動する。と言つても、イツセーから少し離れた程度だが。

イツセーが首を傾げてる中、朱乃は急に小声で俺に話しかける。

「すみませんが、イツセーくんと二人つきりにさせてもらえませんか？」

「え？」

朱乃からのお願いに俺は疑問に思った。

イツセーの腕に溜まったドラゴンの力を吸い出す行為はこの前

やったばかりだから、それをまたやるにしてはまだ早い。何より、イツセー本人も今のところ大丈夫なので必要無い筈だ。

それが目的じゃないとすれば――

「……朱乃、お前まさか」

「……………」

俺がもしやと思って確認するように言ってみると、案の定と言うか朱乃は顔を真っ赤にしていた。

……はあつ、やっぱりそう言う事か。

本当なら俺が今すぐ止めるように説得すべきだろう。

『バラキエル父親と過去むかしの事を一時的に忘れたいが為にイツセーと性行為したところで、何の解決にもならないぞ』

そう言つて止めれば、凶星を突かれた朱乃は逃げ出すように部屋から出て行くだろう。尤も、その後は俺がいない隙を狙つてイツセーに迫ろうとするだろうが。

だけど、今の俺にはそれが言えなかった。深刻に思い詰めた表情をしている朱乃を見ているから。

それに加えて、あの朱乃が恥を忍んでまで俺に頼み込んでくると言う事は、それだけ覚悟を決めたと言う証拠だ。

ここは何れ義妹いもつとになるであろう朱乃の意を汲むか。そしてイツセーに思い詰めた朱乃を任せようと。

無責任に思われるかもしれないが、イツセーなら朱乃を何とかしてくれるかもしれないと俺は思っている。俺やアザゼル、そしてバラキエルでは出来ない事をイツセーは必ずやってくれると。

「……はあつ。リアス達には黙つといてやるから、好きにしな。ついでにカギは閉めておけよ」

「はい。ありがとうございます」

俺が了承の返事を聞いた朱乃は顔を赤らめながらも礼を言ってきた。

「イツセー、今日の修行はここまでだ。俺はもう部屋に戻って寝るか」

「え？ あ、ああ、わかった」

言うべき事を言った俺が部屋から出てドアを閉めた直後、カチツとカギを閉める音がした。

やっぱり俺の思った通り、朱乃はイツセーと……って、これ以上は無粋だから止めておくか。

後はイツセーがどうにかしてくるだろうと思いつながら自分の部屋へ戻っていると――

「ダーリン♪」

「それ以上近付いたら光の槍をぶつ放すぞ」

辿り着いた瞬間、どこからか現れたエリーが俺に近付きながら抱き付こうとしていたので、俺はすぐに警告をした。

俺が本気だと分かったのか、エリーは諦めたように足を止める。

「ちよつとく、あの色ボケ女神は良くて私はダメって差別よ」

「お前、以前まで俺達と敵対してた事を綺麗さっぱり忘れてるだろ」

エリーの事を信用してると言ったが、警戒を緩めたりはしない。いくら俺に対して嘘は吐かないと分かってても、この得体の知れない女は色々な秘密を抱えているので。

「そんな事ないわよ。だけど、それで私のダーリンに対する愛は全く変わらないから♪」

「……あ、そう。それで、俺に一体何の用だ？ ヴァーリ達の監視下に置かれてるお前が、一人で勝手に動かれるのはこちらとしては非常に困るんだが」

この前は光の鎖でグルグル巻きにして結界付きの部屋に閉じ込めていたが、美猴達が外に出る時に同行させる必要があったので解除していた。

だと言うのに、こんな堂々と単独で動いてリアス達と遭遇したら、確実に面倒事が起きてしまう。

「あの鬱陶しい色ボケ女神がいないから、ダーリンとちよつとばかりお話ししようと思ってね。あ、信用出来ないなら鎖で縛ってもいいわよ。それはそれで興奮するから♪」

「……………はあっ。付いてこい」

自ら縛られてもいいとエリーの発言に内心呆れつつ、一先ずは気に

しないでおく事にした。

お前と話す事は無いとヴァーリの所へ送り返したいところだが、そう簡単に諦めない性格なのは分かっていたので、俺の部屋へ招こうとする。

許可を貰えた嬉しげに入るエリーは、部屋に入って早々に周囲を見渡す。

「へえ、ここがダーリンの部屋なのね。何だか彼氏の部屋に入ってるみたいで緊張するわ」

「誰が彼氏だ」

まるで恋人気分を味わってるエリーの発言に俺はしかめっ面で言い放った。

「でも、案内されるならダーリンの寝室にして欲しかったわ。二人つきりで話すには——」

「それ以上ふざけた事を言うと、マジで追い出すぞ」

「——OK。ここは部屋を案内してくれた事で妥協するわ」

俺を怒らせると不味いと思ったのか、エリーは両手を上げて降参のポーズをとった。

一先ずは部屋にあるソファアームに座らせるよう促した後、飲み物を用意しようとする。

「何かリクエストはあるか？」

「ダーリンが用意してくれるなら何でも良いわ」

「そうかい」

エリーは嘗てリアスと同じ貴族悪魔だったので、ここは紅茶を用意しておくか。

そう思いながら紅茶セットを出してすぐ、電気ポットに入ってるお湯を使って紅茶を淹れる。

「ほれ、紅茶のストレートだ」

「あら嬉しい。私の好きな紅茶を用意してくれるなんて」

紅茶が入ったカップを渡すと、エリーは嬉しそうに受け取ってすぐに飲み始める。

「はあっ……。今まで飲んだ紅茶の中で格別に美味しいわ」

「そうか？ 俺は普通に淹れただけな上に、お前からしたら安物の紅茶だぞ」

「ダーリンが淹れるから美味しいのよ。うふふ、悪魔の私がダーリンの淹れてくれた紅茶を飲んだと天使達が知ったら、果たしてどんな面白い反応をするかしら♪」

「アイツ等がそんな些細な事で反応する訳ないだろうが」

いくら未だに俺を父と慕ってるからって、悪魔に紅茶を飲ませた程度で怒るほど狭量な天使達むすこじゃない。

馬鹿馬鹿しいと思いつつも、エリーの向かいにあるソファに座りながら自分の淹れた紅茶を飲む。

「まあそんな事は如何でもいいとしてだ。俺に話って一体何だ？」

「もう、ちよつとくらいは余韻に浸せてよね。折角ダーリンのお部屋に入って紅茶を頂いてるのに」

「リアスが敵対してるお前に対して神経尖らせてるんだ。それ位は察しろ」

アイツは今もエリーをこの家から追い出したいのを我慢している。俺としてもこれ以上リアスのストレスを溜めて欲しくないから、さつさと用件を済ませようと思っている。

すると、俺の台詞を聞いたエリーはクスクスと笑い始める。

「あらあら、あんな家柄しか取り柄こむすめのない弱者に気を遣うなんて。ダーリンってば本当に優しいのね」

「その小娘の温情によって、この家に滞在出来てる事を忘れないで貰おうか？」

「むう……」

少しばかり調子に乗った発言をするエリーに俺が牽制すると、言い返せなくなつたのか再びカップに口を付けて紅茶を飲む。

「それじゃ、本題に入るわ。今度の戦いで私とダーリンが相手をするフレイヤの元英雄——オツタルについてなんだけど……ダーリンはどうするつもりなのかしら？」

「どういう意味だ？」

質問を質問で返す俺にエリーは気を悪くする事なく答えようとす

る。

「オツタルを殺すか殺さないのかって事よ。敵になつたとは言え、オツタルは元々フレイヤの所有物。ダーリンはそれを考慮して、殺さずに捕らえるんじゃないかと私は思ったの」

「……………」

「アレでも一応は嘗てフレイヤの為に仕え、ヴァルハラ神々からも称賛された英雄の一人。万が一に殺した際、魂までも滅ぼしたら確実に面倒な事になるとダーリンは考えた筈よ」

確かにエリーの言う通り、俺もそれは考えた。オツタルを大事にしていたフレイヤの事を考慮し、肉体は滅ぼしても魂だけは必ず返そうと。

しかし、今のオツタルはロキによって改造されている上に、手加減して勝てる相手だと微塵も思っていない。そんな事をすれば殺されてしまう。

「安心しろ。フレイヤからちゃんと許可を貰っている。オツタルが俺達と敵対している以上は仕方ないってな」

「へえ、あの色ボケ女神にしては随分と思いつた決断をしたのね。てつきりダーリンにお願いして、『絶対に殺さないでね』って我儘を言うかと思つてたのに」

「今回やる会談を必ず成功させようと、アイツもそれだけ覚悟を決めたって事だ。そう言う訳で、お前が気にする必要は一切無い」

エリーの事だから、戦闘中に俺が足手纏いになるのではないかと危惧していたんだろう。もし的中したら、自分だけでオツタルの相手をする為に、コイツなりの気遣いで俺を外そうと考えていたに違いない。

「と言う事は、ダーリンも初めからオツタルを殺すつもりでやるって思つていいのかしら?」

「ああ。元からそのつもりだ」

「ふうん、それを聞いて安心したわ」

俺の返答を聞いて満足したのか、エリーはカップに残っている紅茶を一気に飲み干す。

「お代わり頼んでも良い？」

「一杯だけで充分だと思っただが」

「だって会談はもうすぐだし、ロキとの戦いが終われば暫くダーリンと会えないだろうから、今の内に飲めるだけ飲んでおきたいのよ。ダーリンの淹れる紅茶は凄く美味しいから」

「はいはい」

空になったカップを受け取った俺は席を立ち、再び紅茶を淹れた。今度は少し多めに入れたカップを渡すと、エリーはまた味わって飲むもうとする。

……俺の淹れた紅茶って他と比べて本当に美味しいのか？ ローズさんに比べたら大した事はない筈なんだが。

不可解に思いながら自分の淹れた紅茶を飲む俺だが、エリーが思うほどにそこまで美味しいとは思えない。

あ、そう言えばこっちもエリーに訊きたい事があるんだった。

「おいエリー、今度は俺から質問させてもらいたいんだが」

「ん？ 何かしら？」

美味しそうに紅茶を飲んでるエリーが一旦止めて、俺の方へと視線を向ける。

「お前、^{サキユバス}魔形態からもう一段階変身出来るそうだな。それがお前の真の姿なんだろ？」

「！」

先程までニコニコとしていたのが打って変わり、驚愕の表情となった。その直後、俺に途轍もない殺気をぶつけてくる。

「……………どうしてダーリンがそれを知っているのかしら？ その情報はアルスランド家だけしか知らない筈よ」

「前に戦ったラディガンの奴が口を滑らせてな。まだ未熟で暴走するそうだが、それでもアイツより実力は上だとも言ってたぞ」

戦闘中にラディガンが言ってた事を教えると、エリーは物凄く不愉快そうに表情を歪めている。

「あの男、よりにもよってダーリンにペラペラ喋る何て余計な真似を…………… もうあんな屑^{クズ}を私の兄だなんて微塵も思いたくないわ……………

！」

この瞬間、エリーは完全に兄のラデイガンを目まわしき存在と認識してみたのだ。

とても嘗て兄を愛していた妹とは思えない罵倒に、俺は僅かばかり死んだラデイガンに同情した。もし聞いていたら、あの男は間違いなく絶望の表情を浮かべながら慟哭しているだろうと。ま、俺にとつては非常に如何でも良い事だが。

しかし、まさかあのエリーが此処まで毒を吐くとはな。それだけコイツの真の姿は俺に知られなくなかったと言う証拠か。

「先に言っておくが、俺はお前の真の姿を見たいだなんて微塵も思っていないから安心しろ」

「……思つてなくても、それを知られた時点で嫌なのよ。ダーリンにだけは絶対知られなくなかったのに……！」

うわっ、いつものエリーじゃない。これマジでショック受けてるぞ。

「一応これも確認したいんだが、もしオツタルと戦つて不利な状況になつたらどうするんだ？ やむを得ず、真の姿になるのか？」

「嫌、絶対に嫌……！！ イッセーくんならまだしも、ダーリンには見せたくない。あんな醜い姿は絶対に……！」

どうやら自身が死になつても、俺がいる限りは絶対真の姿にならないようだ。

エリーは人間形態だけでなく、サキュバス 魔形態でも絶世の美女と呼べる端正な容姿だと言うのに、そこまで酷くなるものなのか？ 俺にはとてもそうは思えないんだが、まあ本人が醜いと言つてる以上は相当酷いんだろう。

「……あゝ、その、悪かったな。嫌な事を訊いて」
「……………」

俺が謝つてもエリーは何の反応もせず顔に俯かせている。

いつもの調子だったら――

『全くよ。私の乙女心を深く傷付けたダーリンには責任を持って一緒に寝てもらおうわ』

——とか何とか言っている筈だ。

なのに今のエリーからそう言った返しが一切ない。これは本当に重傷モノだ。

不味いな。ロキとの戦い前なのにエリーをこんな状態で戦わせたから、却って足を引つ張られてしまいかねない。

しかも今回は俺が原因を作ってしまった。これでロキ達との戦いで負けてしまったら、間違いなく俺は糾弾されるだろう。主に冥界の貴族悪魔共がこれを機に、色々な責任を押し付けてくるのが容易に想像出来る。

……はあつ、仕方ない。エリーをこんな状態にしたんだから、ここは俺が責任を持って何とかするしかないな。

そう思った俺はカップをテーブルの上に置き、傷心状態となっているエリーに近付く。

「おいエリー。お詫びって訳じゃないが、今夜は俺と一緒に寝るか？」
「……………え？」

思いも寄らない台詞だったのか、エリーはゆつくりと顔を上げる。
「但し、キスや性行為の他に精気を吸うとかは一切無しで、ただ俺を抱きしめるだけだ。それを了承するなら、俺と一緒に寝てもいい。どうする？」

「……………ほ、本当に、良いの？ 私、ダーリンと一緒に寝ても…………」

「ああ。お前の知られたくない秘密の棚を、俺が引つ張り出してしまったからな。それ位の責任は取るよ」

「……………ダーリン!!」

「おわっ！」

責任を取ると聞いたエリーは途端に涙目となり、そのまま俺に勢いよく抱き着いてくる。

「ダーリンからそんな事言われるなんて、私……………凄く嬉しくて甘えたくなっちゃう！」

「……………言っておくが今回限りだからな。それを忘れるなよ？」

念を押す俺にエリーは何度も頷く。

その後、寝る準備をした俺は寝室に向かうも——

「お前……その格好で俺と寝るつもりか？」

「だって、これが私の寝間着なんだもん」

思わず突っ込みを入れた。ってか、もんって言うな。

今のエリーはブラやパンツなどの下着を一切つけず、殆ど透けてる薄いネグリジエを纏っているだけ。ぶっちゃけ素っ裸も同然だ。

俺が少しばかり後悔していると、エリーは気にせず俺のベッドに入っ
てそのまま抱き着いてくる。

「ふふふ♪ 夢にまで見たダーリンとの添い寝。こうしてるだけで身
体が疼いて、このままエッチしたく——」

「おっとエリー、あんまり調子に乗るなよ」

抱き付きながらも、俺の股間に触ろうとしてきたので咄嗟にエリー
の首を掴んで阻止した。

「言った筈だぞ。そう言う行為は一切無しだつてな」

「……は〜い」

警告を聞いて漸く諦めたのか、エリーは俺を抱き枕のように少し強
めに抱き着く。それによつて、エリーの肌が直に密着した。

せめてもの抵抗なのか、大きくて柔らかい胸の感触を強調するよう
に強く当てている。だがしかし、俺にはそう言った色仕掛けは通用し
ないので、単に柔らかい物が当たってる程度にしか思っていない。

別に俺は不能と言う訳ではない。嘗て長い時を生きた聖書わたくしの神の
記憶と経験がある事で、そう簡単に興奮して性行為に走ろうとしない
だけだ。それを知ったイツセーからは『実は爺さんみたいに枯れてる
んじゃないか？』と本気で心配されたが。

とは言え、いつまでもエリーを放置してたら俺の約束を破りそう
だったのだから——

「おいエリー、ちよつとこっちを見ろ」

「ん？」

俺の呼び声に反応したエリーが見上げた瞬間、頬に軽いキスをして
やった。

「え？ え？ え？」

「今夜はこれで我慢しろ」

俺にキスされた事が凄く意外だったのか、エリーは惚けた顔になるも――

「~~~~~ツ!!」

一気に顔を真っ赤にさせて、そのまま顔を俺の胸に埋めた。

何だコイツ？ サキュバスの癖に、随分と初心な反応してるんだが

……これが本当に何度も俺に性行為を迫ろうとしていた奴なのか？

全くの別人としか思えん。

まあ取り敢えずコイツの色仕掛けがやっと止めてくれたから、このまま寝るとしよう。

「……………ダーリンのバカ。いきなりキスするなんて反則よ。これじゃ今まで迫ってた私がバカみたいじゃない……………！ どうしよう、このままだと本当に本気で……………あのお方に背いちやうじゃない……………！」

幕間

「おっぱいメイド喫茶希望です!」

「それでリアス、ウチの愚弟がこんな卑猥な希望を出してるがどうなんだ?」

「訊くまでもなく却下よ」

イツセーが希望した内容を確認する俺に、リアスは嘆息しながら否定する。

今日の部活動は、学園祭で催す出し物について話し合っていた。ロキ戦の前に何を悠長な事をしてると思われるだろうが、平穏な日常生活も大事なので、今日だけは学園に通える事になっていた。

そんな中、イツセーが卑猥なメイド喫茶を希望していた。どうせこの愚弟の事だから、リアスと朱乃を筆頭に胸を強調した喫茶店をやれば、学園祭の売り上げトップを狙えると思ったんだろう。

「二つ言っておく。もしそうなったら、他の男子達にリアスと朱乃の胸を見られる事になるんだぞ」

「リユースー先輩の言う通りだよ、イツセーくん。本当にそれで良いのかい?」

「——っ!」

俺と裕斗の意見にイツセーが衝撃を受けたような顔になった。

学園の二大お姉さまと称されているリアスと朱乃の胸は、この学園の男子達なら誰だっけって見たいだろう。しかし、今その二人の胸を独占しているのはイツセーだけだ。そんな美味しい思いをしてる愚弟が、他の男子達に見せる訳がない。

事の重大性を漸く理解したみたいで、イツセーは悔しそうに断念する。

「……くっ、無念だ。これじゃ、おっぱいお化け屋敷も無理か……」

「当たり前だ」

「……そんなことを考えていたんですか、どスケベ先輩」

イツセーの失意の言葉に俺が呆れながら突っ込み、小猫も同様に呆れていた。

非常に残念がるイツセーにリアスが溜息混じりに言う。

「あのね、イツセー。エッチなのは確かに高いポイントを取れそうだし。けれど、生徒会が許さないでしょうし、教員の方々も却下するでしょうね」

そりやそうだ。と言うか、常識的に考えて、んなもん絶対やらせる訳にはいかない。

因みに俺がリアスに去年と同じにするのかと聞いてみたが、リアスとしては「同じ事を連続でしたくない」との事で却下なんだと。

加えて、メイド喫茶は他の所でもやろうとしているそうだし。尤も、オカ研がやれば同じ喫茶店でも勝てる。理由は至極簡単。一言でいえば、ここにいる女子のレベルが高いからだ。

更には他と同じ事をしたくないリアスはそれもダメだと言ってるので、

リアスが一人一人に案を訊いても、これと言って斬新なものができなかった。

「リユセー、貴方からは何かないかしら？」

「うーん、そうだなあ」

最後となった俺は少し考える仕草をする。

他の所と同じ内容はダメと同時に、イツセーが考えてる卑猥なものもNG。

「じゃあ『脱出ゲーム』ってのはどうだ？」

「『脱出ゲーム』？」

俺が出した案にリアスが分からなそうな表情で顰顰返しをした。他の部員も分からないのか、彼女と同様の反応だ。

「あ、それ知ってる。ゲームやバラエティ番組とかでやってた、閉じ込められた所から制限時間内に脱出するアレだろ？」

「そうだ」

イツセーが簡単に説明しながら訊いてきたので、俺はすぐに頷いた。

「内容としては、『各部屋に設置してある迷路やクイズ、ミニゲーム等を制限時間内にクリアして脱出できれば成功。もし出来なければそ

の場で即失格。そして脱出に成功した挑戦者には、オカルト研究部が用意した賞品を進呈』。とまあ、この場で咄嗟に考えたルールだが、部長のリアスとしてはどうだ？」

「中々面白そうね。それは是非とも候補の一つに入れさせてもらわ」

リアスにとっては嬉しい案だったみたいで、何の文句一つ言う事なく候補となった。

他の所と同じでない上に卑猥なものでもないから、部員達からも反対意見がない様子だ。

「……どスケベ先輩と違って、リユースー先輩の案は凄くまともですね」

「うぐっ！」

ボソツと呟く小猫の台詞に、何かが刺さったように苦しそうな声を出すイツセー。

小猫は相変わらず、卑猥関連になると辛辣だな。それでも嫌ったりはせず、今も甘えるように弟の膝イツセーの上に乗っているが。

すると、少し居心地が悪くなっているだろうイツセーが苦し紛れの提案を言おうとしている。

「……オカルト研究部の女子、誰が一番人気者か、とかはどうかな？」
小声で言ったイツセーの呟きに、女子全員が反応して顔を見合わせる。

俺と裕斗も興味深そうにイツセーを見ている。

「それも良いかもしれないが、生憎このオカ研にはリアスと朱乃がいるからなあ。事実上二人だけの勝負にしかならない」

「だとしても、一大お姉さまのどちらが人気か気になりますう」

俺が苦笑しながら言っていると、ずつと静かだったギヤスパーがぼろつと漏らした事に、リアスも朱乃と顔を見合わせていた。

「私が一番に決まってるわ」

リアスと朱乃の声が重なった直後、睨み合いを始めた。二人は笑顔だが、どちらも怖いオーラを漂わせている。

「あら、部長。何か仰いました？」

「朱乃こそ、聞き捨てならない事を口にしなかつたかしら？」

うくむ、朱乃の調子がだいぶ戻っているようだな。あの時の深刻そうな表情とは大違いだ。

俺がエリーと一緒に寝た翌日、朱乃に確認をした。余りにも無粋だと言う事は重々承知しているが、それでも少しは気が晴れたかの確認をしたかった。

朱乃は頬を赤らめながらも、二人つきりになった後の事がある程度話してくれた。性行為に迫ろうとしたが、『同情的なもので抱きたくない』と拒否された後、自分を優しく抱きしめてくれたそうだ。

普段スケベな事ばかり考えているあの愚弟が、珍しく誠実な対応をしたんだなあと内心思った。てつきり朱乃の誘惑に負けて、あつさりと性行為に走ると思ってた。

……と言うのは勿論冗談だ。イツセーは朱乃がここ最近思い詰めていたのを知っている。だから俺は必ず止めてくれるだろうと既に予想していた。もしイツセーが相手の心情を一切気にしないで性行為に走り出すゲス野郎だったら、俺の方でとつくに阻止している。

過ちが起きなかつたのは取り敢えず良かったが、それでも朱乃とバラキエルの親子関係が未だ拗れてる事には変わりはない。どうにかあの親子のどつちかが歩み寄って……と言うより、朱乃の方から踏み出してくれなければ始まらないか。

そう考えている中、リアスと朱乃の口喧嘩が始まった事により、会議はご破算だ。催し物決定の会議は後日に持ち越しとなったのは言うまでもない。

出来れば、イツセーたち二年の修学旅行前までに決まって欲しいもんだ。

それとは別に、オカ研の顧問であるアザゼルはさつきから部室の隅で茶を飲んでいる。いつもなら俺達の会議を見ながら面白そうに口出しするが、今回は珍しく静観していた。それどころか窓から外の夕暮れを見て、ぼそりと呟く。

「……黄昏か」

それを聞いた瞬間、俺を含めた此処にいる全員が真剣な面持ちになった。何しろ、この後に俺達はロキと決戦だから。

そして部活終了時間のチャイムが学園中に鳴り響く。

「今の時代に神々の黄昏が不要だ。ついでにバカな事を仕出かそうと
している愚神にきつちりと教えないとなあ、アザゼル」

「ああ、そうだな」

「お前達も教えてやれ。俺達の大事な平穏をぶち壊そうとする、あの
大馬鹿者にな」

『はい!』

聖書の神の言葉として受け取ったのか、イツセー達は力強い返事を
した。そして決戦の時を迎えようと、俺達は行動を開始する。

第十六話

決戦の時刻。今はもう既に夜となっている。

俺達はオーデインや日本の神々が会談する予定である、都内のとある高層高級ホテルの屋上にいた。

高層ビルだけあって、風が激しく吹き荒れている。

此処ではない周囲のビルの屋上にはシトリー眷族が各々配置され、既に待機していた。遠目で見なくても、彼女達が発してゐるオーラで人数も把握済みだ。

だが、その数の中に匙のオーラは感じられない。この場にはいないと言う事になるが、彼は遅れると事前に聞かされていた。どんな特訓をやらされているのかは知らんが、戦闘終了後に登場は流石に勘弁して欲しい。

アザゼルも同様にいなく、会談での仲介役を担う為にオーデインやフレイヤの傍にいます。本当だったら俺も一緒に仲介役になっていたが、オツタルの件もあって、今回はイツセー達と同じく戦闘側に参加している。その為、俺がアザゼルの代理として総大将になったのは言うまでもない。尤も、それは名ばかりに過ぎないが。

戦闘に不参加であるアザゼルの代理として、バラキエルがこの場で待機。ロスヴァイセも北欧側の代表として戦闘に参加しており、以前に見た鎧姿で待機中だ。

そして遙か上空にはタンニンもいる。流石に巨大なドラゴンの姿を人目に付けば大騒ぎになるのは確実なので、悪魔側の方で一般人に視認出来ない術を施している。

少し離れた所にいるエリーやヴァーリ達も待っている。

「——時間ね」

リアスが腕時計を見ながら呟いた。

それは会談が始まった時間だ。今頃ホテルの一室で大切な会談が始まっているだろう。

アザゼルやオーデインなら問題無く成功すると確信している。フレイヤは少しばかり性格的に問題あるが、重要な会談に関して真面目

にやるから大丈夫だ。念の為に俺が『会談に成功したら俺と二人っきりのデートでもどうだ?』と言った瞬間、フレイヤは今まで以上に物凄いやる気を見せていたので。因みにエリーが知ったら百パーセント面倒事になるので伏せている。別に付き合ってもいけないのに、何でこんな事をしなければならんだか。

まあそれはそうと、残すは奴が来るのを待つだけだ。

ロキの性格から考えて――

「――兄貴」

「ああ、来たな」

どうやって来るかを考えてると、隣にいるイツセーが声を掛けてきた。それに反応した俺は上空を見上げる。

「小細工なしか。恐れ入る」

ヴァーリが苦笑しながらも、俺と一緒に上空を見ていた。

バチッ！ バチッ！

突如ホテル上空の空間が歪み、大きな穴が開いていく。

そこから出てきたのは当然――悪神ロキと神喰狼^{フェンリル}、そしてオツタルだ。

思った通り、やはり正面から堂々と来たようだ。

「バラキエル」

「承知。――目標確認。作戦開始」

俺が呼ぶと、バラキエルは耳に付けていた小型通信機に指示を送った。その直後、ホテル一帯を包むように巨大な結界魔法陣が展開していく。

ソーナを始めとしたシトリ―眷族が俺達とロキとフェンリル、オツタルを戦場に転移させる為、大型魔法陣を発動させたのだ。

当然ロキも感知してる筈だが、向こうはただ不敵に笑みだけで無抵抗の姿勢だった。まるでこうなる事を初めから分かっていたように。

そして、魔法陣に包まれた俺達は――大きく開けた土地へと転移された。

既に使われていない古い採石場跡地で、周囲は岩肌だらけとなっている。此処がロキ達との決戦の場だ。

隣のイツセーや後方のアーシア、リアスと眷族を確認。イリナやバラキエルにロスヴァイセも同様。

エリーも含めたヴァーリ達も少し離れた場所に転移していた。

対して、前方にはロキとフェンリルとオツタル。特にオツタルの奴は、今か今かと俺に襲い掛かりそうで、途轍もない殺気をぶつけている。

「トリックスターと呼ばれるお前が何もせず見守っていたのは、こうなる事を既に予想していたのか？」

俺の問いにロキは笑う。

「その通り。どうせ抵抗してくるのだから、ここで始末してその上でのホテルに戻ればいいだけだ。遅いか早いかの違いでしかない。会談をしてもしなくてもオーディン達には退場して頂く」

「けどその前に、ヴァルハラに来た元凶と言う理由で聖書の神を殺すんだらう？ そうなれば、三大勢力の戦争を再開出来る口実になるからな」

『！』

「ほう。やはりそこまで見抜いていたか」

リアス達が驚愕しているのを余所に、ロキは全く動じないどころか更に笑みを深めていた。

「いくら『神々の黄昏』を成就させたいと言っても、ロキ一人だけで三大勢力や各神話体系を相手にするのは無理だ。そこでお前は考えた。人間に転生した聖書の神を殺して全世界に宣言すれば、例えどんな結果であっても、各勢力は以前と違って必ず何かしらの行動を起こすとな。特に反応を示すのは三大勢力側の天使勢だ。そこをロキが情報操作すれば、聖書の神の天使達はお前の操り人形の如く掌の上で踊らせる事が出来る筈だと。そうなれば三大勢力の足並みが乱れるどころか折角締結された同盟も決裂し、再び三大勢力の戦争が起きて、更には『神々の黄昏』も成就出来ると言う非常に都合な展開にもなる。例えオーディン達の始末に失敗しても聖書の神さえ殺せば、世界は必

ず再び混乱するとな。以上が俺の推測だ。どこか間違いがあれば遠慮なく指摘してくれ」

「ふはははははははは！ 大正解だ！ どうやら腐っても聖書の神のようだな！」

一切否定せず、愉快だと言わんばかりに大笑いをする悪神ロキ。

「しかし、見抜いていながら何故私の前に姿を現すと言う愚を犯している？ それは自ら死に足を踏み入れているも同然だぞ。本来であれば、聖書の神もオーデイン達と一緒に会談をすべきだったであろうに」

そう。奴の言う通り、聖書の神がこの場にいるのは最も危険だった。もし俺が死んだ時点でゲームオーバーになってしまう。何もかもが、な。

因みにこの推測をアザゼル達に話した際、俺が戦う事を真つ先に反対した者達がいた。教会出身のゼノヴィアとイリナ、そして妹分のアールシアが。当然リアス達も参加しないべきだと言っている。

だが、それでも俺は参加すると皆の反対を押し切った。ロキ側にはオツタルと言う非常に厄介な相手がいるに加え、自分だけ安全な場所へ隠れて皆に任せる訳にはいかない。

万が一に俺が危険な状態に陥った際、アザゼルよりある物を貰っている。この場から強制的に避難させる為のアイテムを。それを身に付けない限り、参戦は許可しないってな。自分だけ逃げる対策を立てられるのは非常に気が乗らないが、それでもイツセー達と戦えるならと敢えて承諾してる。

「聖書の神より、自分を心配したらどうだ？ この後に敗北する自分を、な」

「よかろう。人間の身になり墮落した元神には、先ずは墮落した英雄と殺し合ってもらおうか。どうやら我慢の限界が訪れてるのでな」

「ウウウウウウウ……!!」

そう言いながらロキはオツタルの方を見ると、もう暴れる寸前に陥っている。あと数秒したら、ロキの命令を無視して俺に襲い掛かっ

第十七話

「イツセー、ロキは任せたぞ」

「ちよつとダーリン、私にも言つてよ〜!」

兄貴は俺——兵藤一誠にそう言つた直後に上空へ飛翔すると、オツタルも追いかけるように飛んでいく。

その後、少し離れた所からエリーが不満そうに言いながら二人に続いて飛翔した。

本当は俺も行きたかつたけど、戦う相手がロキなので、取り敢えずオツタルの方は兄貴達に任せるしかない。

さて、やるか。昇格+禁手化だ!

『Welsh Dragon Barance Breaker!!!』

赤い閃光を放ちながら、俺の体に赤龍帝の力が闘気となって包み込み、髪が逆立つて真紅に染まっていく。よし。前の時と違う!

転生悪魔となつて初の禁手化だった為、力が思うように振るえなかつた。闘気が完全に制御出来なかつた為。

けど、ロキとの戦いに備えて昂る闘気を抑える為の瞑想を続けた結果、前回と違つて以前のように制御出来ている。

『Vanishing Dragon Barance Breaker!!!』

ヴァーリは俺と違つて、以前見た時の白い全身鎧に身を包んだ。禁手化が完了した俺とヴァーリが同時にロキの前に出る。

それを見た事に、ロキが歓喜した。

「これは何と素晴らしい! 二天龍がこのロキを倒すべく共同するといふのか! 特に赤龍帝! 前に会つた時より、また更に腕を上げたではないか! これほどまで胸が高鳴る事はないぞッ!」

直後、ヴァーリが仕掛けた。空中で光の軌道をジグザグに生み出しながら、高速でロキに近付いていく。

俺はそれと違い、構えながらも身体を少し屈ませた瞬間、ロキ目掛けて高速の低空飛行をする。

空中からヴァーリ、地上から俺がそれぞれ突っ込む!

「赤と白の競演ッ！　こんな戦いが出来るのは恐らく我が初めてだろうッ！」

嬉々としたまま、ロキは全身を覆うように広範囲の防御式魔法陣を展開させた。

と、思いきや、その魔法陣から魔術の光が幾重もの帯となり、俺達に放たれる。

見た感じ、追尾性の高い攻撃だ。空中を飛び回るヴァーリ目掛けて、幾重もの光の帯が向かっていく。

同時に俺の方も何十もの攻撃が前方から放たれてきた。

チラリと見た程度だがヴァーリは問題無いだろう。空中で曲芸みたいに飛び回っていたのが視界に入ったので。

対して俺は——このまま突貫だ！　避ける必要なんかねえ！

キインツ！　キイインツ！！

俺の体に魔術の攻撃が当たる瞬間、包んでいる紅い闘オーラ気が全て弾いていた。ヴァーリとは違うが、この闘オーラ気も出力が高いほど強固な鎧となる。

！
右拳に力を込め、ロキ目掛けて低空飛行のまま最大加速で突っ込む

バリんツ！　バリインツ！

「ッ！」

闘オーラ気に包まれている右拳により、ロキを覆う魔法陣が全て音を立てて消失する。

これには予想外だったのか、流石のロキも驚愕している様子だ。

すると、空中にいるヴァーリから途轍もない魔力を感じた。思わず見上げると、ヴァーリの手元に魔力以外の術式が展開していた。

あれは北欧の攻撃式魔術だ。以前ヴァルハラでオーデインの爺さんが兄貴にレクチャーした時に見たのと似てるが、あそこまでバカげ

た術式は展開してねえ！

「——取り敢えず、初手だ」

パアアアアアアアアアアアアッ！

あの野郎、俺がロキに接近してるのに何の躊躇いもなく掃射しやがった！　いくら俺がロキの防御を崩したからって、少しは考えて攻撃しやがれ！

そう思いながら超スピードで回避＋退避すると、採石場の三分の一ほどを包むほどの規模の一撃が降り注いだ。

攻撃が止むと、ロキのいた場所は——全く底の見えない大きな穴が生まれていた。

なんつーか……まるで地球を侵略しに来たベジターの相棒だったヤサイ人——ナパーが大地に底の見えない穴を開けた『オーラ破』みたいだな。俺もやろうと思えばできない事もないが。

ヴァーリの事だから一応攻撃範囲は狭めたんだろうが、使い始めた事もあって完全にコントロール出来てないようだ。いくらアイツが天才だからって、覚えてすぐ使いこなすなんて無理だろう。兄貴も空孫悟たちの技を初めて使った際、調整するのに少しばかり苦労している。

「ふははははー！」

突如、高笑いが聞こえてくる。

そこへ視線を向ければ、宙に漂う人影——ロキだ。ローブはいくらか破れても、奴自身は全くの無傷だ。

くそつ。やっぱ躲してやがったか。ヴァーリが術式を放った瞬間、咄嗟に転移術を使っていたのを見た。反応が一秒遅ければ、それなりのダメージを与えていたんだが。

だったら今度は俺の出番だ！　腰に付けていたハンマー——ミヨルニルを手に取り、練習通り闘気オーラを送って少し大きなサイズにする！

「ふはははははははははは！」

若干呆け気味となってる俺にロキが再び高笑いをする。

「素晴らしい一撃ではないか！ その槌は本来力強く、そして純粹な心の持ち主にしか扱えない。貴殿は邪な心があるのをヴアルハラへ来た時に知ってたから、恐らく雷が生まれないと予想していた。だが、あの強力な雷を生みだせるようにしたのは、恐らく聖書の神が何かしらの細工をしたのであろう？」

その読みは大当たりだ。

ロキの言う通り、俺はハンマーを振り回しても、スケベな為に雷まですす事は出来ない。けど、そこを聖書の神である兄貴がカスタマイズしてくれた。ハンマーを通して、俺の闘気オーラを雷に変換させよう。

これはレプリカだからこそ出来た荒技だ。兄貴曰く『もし本物だったら、かなりの時間を要して今回の戦いには絶対間に合わない』らしい。

「ふっ。流星は俺の宿敵ライバル。そうじゃなくては」

どうでもいいが、なんかヴアーリの奴が俺を凝視してるような気がする。取り敢えずは無視しておこう。

そんな中、さっきまで笑っていたロキが真面目な表情となった。

「赤龍帝、その槌を持っている貴殿は少々危険だ。ここからお遊びは抜きにしようッ！」

ロキが指を鳴らすと、今まで様子を見ていたフェンリルが一步前に進みだした。

同時に奴の両サイドの空間が激しく歪みだす。

出て来たのは——灰色の毛並みに鋭い爪、そして感情がこもらない双眸と大きく裂けた口。それも二体だ。

「スコルツ！ ハティツ！」

ロキの声に呼応するように、二体は天に向かって吼えた。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ンッ！

月の光に照らされて、二匹の巨大な獣の狼が咆哮をあげていた。

マジかよ!? 確かフェンリルは一匹だけじゃなかったのか!?

当然俺だけでなく、この場にいる全員が驚きの顔だった。ヴァーリだけは楽しそうだが。

「この二匹はフェンリルの子供達だ。親のフェンリルよりも多少スベックは劣るが、牙は健在だ。神はおろか、貴殿らも簡単に葬れるだろう」

フェンリルに子供がいたのかよ……くそっ！ こりや完全に誤算じゃねえか！

ミドはあの二匹の事を言っていなかったが……恐らく知らないだろう。知ってたら教えてくれている。そう考えると、ミドが今も深海でグースカ寝てる時に、親フェンリルが子供を作ったかもな。

最悪だ。一匹だけでも厄介なのに、子供とは言え二匹もいるって……マジで最悪だよ！ こんな事ならオツタルと戦えば良かった！

そう思っていると、ロキが親子のフェンリル三匹に指示を送り出す。

「さあ、スコルとハティよ！ 先ずは父と一緒にミヨルニルを手にしてる赤龍帝を始末しろ！ その牙と爪で食らい千切るがいいっ！」

第十八話

ロキがフェンリル達に俺を殺す出した瞬間——部長が手を挙げた。
「にゃん♪」

黒歌が笑むのと同時に親フェンリルの周辺に魔法陣が展開し、地面から巨大で太い鎖が出現した。魔法の鎖、グレイプニルだ。既に届いていたけど、持ち運ぶのが難儀なため、黒かが独自の領域にしまい込んでいた。本当だったら兄貴がやる筈だったが、オツタルと戦わなければいけない事情があったので、やむを得なく黒歌に任せるしかなかった。

出現した鎖をタンニーンのおっさん、バラキエルさんに続き、後方に控えていたメンバー全員が掴み、親フェンリルの方へ投げつける。
「ふはははははっ！ 無駄だ！ グレイプニル そんな物は、とうの昔に対策済み——」

バチチチチチチッ！

哄笑するロキの思惑が外れたように、ダークエルフによって強化された魔法の鎖は意思を持つように親フェンリルの体に巻き付いていった。

オオオオオオオオオオオオ……。

親フェンリルが苦しそうな悲鳴を辺り一帯に響かせる。

「——取り敢えず親のフェンリル、捕縛完了だ」
バラキエルさんが身動き出来なくなった親フェンリルを見て、そう口にした。

本当だったら一番厄介な敵を制止させた事に大喜びしたいところだが、生憎とまだ一匹だけだ。アレ以外に二体の小フェンリルがいる。ロキ曰く、『スペックは落ちてても、神を屠る牙は健在』だから。

そのロキは予想通りと言うべきか、焦った様子は全然見受けられな

かった。未だ不敵に笑っている。

「ふむ、少しばかり赤龍帝を意識し過ぎたか。ならば——スコルとハティよ！ 予定変更だ！ 父を捕らえた不屈き者たちを、その牙と爪で食らい千切るがいいっ！」

指示された子フェンリル二匹は、風を切る音と共に折れの仲間たちの元へ向かっていく。一匹はヴァーリのチームへ、もう一匹はグレモリー眷族の方へ。

もう鎖は親フェンリルの方に使っちまったから無い。一旦ロキは後回しにすべきかと考えていると——。

「ふん！ 犬風情がつ！」

ゴオオオオオオオオツ！

タンニーンのおっさんが業火の炎を口から吐き出し、それで子フェンリル二匹を包み込んだ。

並みの相手なら即座に焼死する威力だが……子フェンリルは何事も無かったかのように動き続けている。ダメージは受けてるが、怯む様子は全くなかった。

「赤龍帝、どうやら仲間の方へ向かいたいようだな。だが貴殿の相手は我である事を忘れていないか？」

「！」

すると、ロキが俺に向かってどデカイ魔術の球を撃ちだしてきた！ 手にしてるハンマーで打ち返したかったが、反応が遅れた為にギリギリで避けた。けど、それは却って正しい判断だと認識する。俺を包み込んでる赤い闘気オーラの一部が消しゴムを使って消されたかのように貫通していたから。

さつき俺に使った魔術の光は闘気オーラで防御出来たのに、今度は難なく貫通かよ。余裕そうな顔をしながら、本当にお遊び抜きでやってるよ。うだ。

「白龍皇おれもいるという事を忘れないでもらおうか、ロキ。半減の力がうまく発動せずとも、その力を少しずつでも削らせてもらおう！」

今度はヴァーリが手元から幾重にも北欧の術式を混ぜた魔力の攻撃を撃ちだした。殆どはロキの魔術でなぎ払われるが、何発かは奴の体に当たるも、大したダメージを与えている様子はなかった。

「忘れてはいないさ白龍皇！ 短期間で北欧の魔術を覚えたのは流石だが——まだ甘い！」

虹のように輝く膨大な魔術の波動をロキが放つも、ヴァーリは背中
の光の翼を大きく展開して迎撃しようとする。

『ディバイドディバイドディバイドディバイドディバイド
DivideDivideDivideDivideDivideDivide
ディバイドディバイド』

白龍皇の能力——ディバイン・ディバイディングが発動し、ロキの攻撃を連続で縮小させていく。

アレを見ると、新校舎を半分にした技を思い出す。あの時は手加減していたが、今は本気だ。分かってはいたが、どうやら本当に修行して新しい能力を得てるようだな。

とは言え、いくつか撃ち漏らしたものがヴァーリの鎧を撃ち抜いていた。が、ヴァーリは即座に復元させていく。

「隙ありだ！」
「っ！」

ヴァーリを攻撃して気を取られてるロキに仕掛けようと、即座にハンマーを小さくして一旦仕舞い、そのまま超スピードで突っ込んでいく。

既にハンマーを持った俺を警戒しているから、何の考えも無しに振るえば簡単に躲かれてしまう。だから最大の間を見せない限り使う事は出来なかった。

気付いたロキは再び魔術で迎撃するが、今度は俺の方が速く——

「だあっ！ ぜあああああ！」

「ぬっ、小癩な！」

ダアンツ！ ダダダダンツツ！ ドウン！

懐に入って早々に強く握りしめた拳で攻撃するが、向こうは咄嗟に

腕で防御する。

防がれた俺は臆する事無く、拳だけでなく肘や膝に脚と、純粹な格闘戦へと持ち込んでいく。

けど、ロキも負けじと魔術を使わずに俺に合わせた格闘をする。

コイツ、見た目とは裏腹に格闘戦も出来るのかよ！

「ロキ、俺と兄貴の修行をバカにしてたくせに、お前もやれるんだな！」

「ふはははは！ 我はこんな野蛮な戦いなど好まぬが、出来ないと言った憶えはないぞ！」

ドゴオ！ ドオオンツツ！

拳や脚が激突する度、そこから発する衝撃波で大気が震えていた。

回し蹴りをする俺にロキは腕で防御でいなしながら、もう片方の開いてる片手を此方に向けて魔術の光弾を放った。

それを見て即座に超スピードで躲し、そのまま距離を取り、お返しをしようと思った両手を前に出し――

「はあっ！」

ズオオオツツ！

ドラゴン波ではないが、それなりの威力がある闘気波オーラを撃ち放った。

俺が放った一撃に、ロキは不敵に鬼気迫る表情を浮かべて真正面から俺の攻撃を受け止め――

ドンツツ！

そのままヴァーリの方へといなした。俺の闘気波オーラはそのままヴァーリの方へ向かうが、アイツはすぐに高速で動いて避ける。

「ふはははは。白龍皇の方は熟練した強さを誇っている。そして赤龍

帝は神であるこの我相手に近接戦を仕掛けるだけでなく、先程の凄まじいオーラを放つとは。本当にヴァルハラへ来た時とは大違いだ。もはや別人ではないかと思うほどに成長したではないか。流石だ。あの聖書の神に鍛えられているのは伊達ではないようだな。この我也も内に響いたぞ」

俺の攻撃を防御していたロキの手足は軽く痙攣している様子だった。

これが魔術や小細工抜きの本勝負だったら勝てるかもしれないが、相手はあのロキだ。ヴァーリと共闘してるからって、決して油断できない。

どうしようか。アイツの事だから俺がサポートに徹しようと、ヴァーリや仲間にも力を譲渡すると分かった途端、即行で狙ってくる。兄貴に言われたな。

「高速で動き回る白龍皇よりも——やはりミョルニルを持った赤龍帝だ！ 倍増した力を譲渡をされたら面倒極まりない！ 先ずは貴殿からぶつ殺しだッ！」

くそっ！ 何で俺が考えていた事を読みやがるんだよ！ 顔に出してねえ筈なのに！

完全に狙いを定めたロキが此方を向く。

「——この俺を無視するとはいい度胸だ」

瞬時に動いたヴァーリが、俺に攻撃の矛先を向けていたロキの背後を捕らえた。

けど、ロキは全く焦った様子を見せていない。それどころかまるで引つ掛かったかのように笑みを浮かべ……っ！ 不味い！

「下がれヴァーリ！ そこは罠だ！」

「！」

バグンツッ！

俺の声に反応したヴァーリだったが一足遅く、横から現れたフェンリルの大きな口に喰われた。

「ぐはっ！」

吐血するヴァーリ。例の牙が白銀の鎧を難なく砕き、ヴァーリの体すら完全に貫いていた。

白龍皇の鮮血によってフェンリルの口元を赤く濡らしている。

やっぱり罠だったか。ヴァーリの神経を逆撫でさせる為に、態と無視しやがったんだ。その結果、見事に引掛かったヴァーリはフェンリルの牙の餌食に……！

……ん？ ちよつと待て。よく見たらあのフェンリルは子供の方じゃない。大きい親の方じゃねえか！ 鎖で捕縛されていた筈なのに、つてまさか！

俺が振り向いた先には、子フェンリルが口に鎖を咥えていた。思った通り親を開放する為に、俺の仲間と戦う振りをしていたようだ。

「ふははははっ！ まずは白龍皇を噛み砕いたぞ！」

まるで上手く言ったように哄笑するロキ。やっぱり全部思惑通りに動かされていた！

あの野郎にとって、親フェンリルが最大の武器。なのに捕縛されたのを見ても大して気に留めなかったのは、俺達に親フェンリルへの意識を逸らす為の策略だったんだ！

そして子フェンリル二匹が最大の切り札と思わせるよう、俺の仲間達と戦わせる嘘の命令を出して、親フェンリルをグレイプニルから解放させる。そして自由になった親フェンリルが無防備な姿となるロキを助けさせようと、仕掛けてるヴァーリに奇襲をさせたところだろう。

くそっ！ 『策が成功したからって油断するなよ。ロキのやる事には必ず何か裏がある筈だ』って兄貴に言われたのに！ 完全に失態だ！

ともかく今はヴァーリの救出だ！ 非常に情けないが、俺一人でロキは倒せない！

突貫する俺に親フェンリルはこの前の事もあってか、少しばかり身構える様子を見せていた。

「この駄犬がッ！」

おっさんの悲鳴が聞こえた。

生半可な攻撃が一切通じないおっさんの体をズタズタに斬り裂いてやがるッ！ 本当に厄介だな、あの爪や牙は！

最強の生物と呼ばれている誇り高いドラゴンがこうもあつさりやられるって最悪だ。……つつても、それに対抗出来る存在だっている。『最強だからって必ずしも絶対ではない』と兄貴が言ってた。目の前のフェンリルが正にソレだ。

負傷してるおっさんは奥歯にしまっていた回復アイテム——フェニックスの涙を使って傷を治していた。今回のロキ戦に、メンバー全員フェニックスの涙を所持している。悪魔サイドからの物資として。

俺は今のところ無傷だが、いつでも出せるように懐にしまっている。もうついでに、兄貴から貰った別の回復アイテムも一緒に。

それにしても、フェンリルの規格外っぷりには驚かされる。伝説のドラゴン三体を相手にして、今も余裕を見せて戦うなんてとんでもない怪物だッ！

俺がタンニーンのおっさんに加勢したところで、フェンリルは何の障害にもならないように、あの恐ろしい爪を振るうだろう。アレに当たったら最後、俺の闘気^{オーラ}を身体ごと簡単に斬り裂かれる。

残念だけど、今の俺じゃフェンリルを完全に捉えきれない。爪や牙だけじゃなく、あの反射神経とスピードの所為で攻撃が全然当たらない。捨て身覚悟でやれば当たるかもしれないが、リスクが余りにも高過ぎるから悪手だ。

くそっ！ こんな時に兄貴がいてくれたら……！ 今はオツタルと戦ってるから無理だと分かっても、どうしてもそう考えちまいがる！

いつそのこと、この状態のままアレをやって——いや、ダメだ！
まだ制^{コントロール}御も出来ないどころか、使ったらすぐに身体がぶつ壊れちまう！ やるだけ無駄だ！

とは言え、この状況は余りにも不味い。何とかヴァーリを助け出さないとい！

「まだ赤龍帝が健在だから、念の為にこいつらも出しておこうか」

